序章（プロローグ）

「来たるべき時が来たようだな」

　アリア帝国の王であるアルフは豪華な机の上に両肘をつけ、椅子に座した状態でそう呟いた。

　その机は縦幅８ｍ、横幅３ｍといった大きさで、その周りには８人の皇子や皇女たちが椅子に座ってアルフ王の話を聞いている。

「１５００年前に勇者様が魔王を倒してから、勇者様は世界を統一することを目標としておられた。奇しくも勇者様の時代にその願いは叶わなかったが、我らの時代でその悲願を叶えることにしよう」

　アルフ王は不敵な笑みを浮かべた。

「どのように世界を統一していきましょうか」

　第３皇子であるオチャゴスがアルフ王に質問した。

「ふむ、まずは手始めに我らの帝国があるカーム大陸から統一するとしようか」

　その言葉を聞いた第４皇子以外の者たちは邪悪な笑みを浮かべている。

「これからは帝国の時代になる。帝国に逆らうものは蹂躙する」

「「「「はっ、かしこまりました！」」」」

　これがアリア帝国が世界統一に向けた初めての会議であった。

　聖暦２５０１年１月１日のことである。

第１章　仮面の戦士

「アリア帝国わずか１年でカーム大陸を統一する……か」

　俺は新聞の記事の見出しを見て眉を顰め、この１年に起きたアリア帝国があるカーム大陸の出来事について思い出していた。

　アリア帝国が大々的に世界統一をするということを全世界に発信したのは、聖暦２５０１年の１月１５日のことである。

　その発表に対して当然ながらアリア帝国以外の国は反発した。しかし、アリア帝国はその反発に対して意に介さずラジオの放送で全世界に対しアルフ王の言葉を流した。

「我らの国に同意しないとどのような末路になるかこれからわかることになるだろう」

　そのラジオ放送の３日後にまたアリア帝国はアルフ王の言葉を流した。

「さて、先日のラジオ放送から３日経ったが、我らアリア帝国はカーム大陸にある中規模の国を１つ蹂躙した。たった１人の神器の使い手によってな」

　そのラジオ放送後、カーム大陸にある中小国家の国々は、アリア帝国のカーム大陸統一を阻むべく結束した。

　だがしかし、アリア帝国は他の大陸に自らの力を見せつけるかのように、神器の使い手である皇子たちによって中小国家を滅ぼしていった。その力の差にカーム大陸にあるまだ滅ぼされていない他の中小国家の国々は絶望し、最終的にカーム大陸にある全ての中小国家の国々はアリア帝国に降伏したのだった。

　そして、聖暦２５０２年の１月１５日にアリア帝国のアルフ王はラジオ放送で言葉を流した。

「今日をもって、我がアリア帝国があるカーム大陸は完全に支配した。今まで高みの見物をしていたであろう他の大陸にある国々どもよ。次は貴様らの番だ」

　そのラジオ放送が昨日のことであった。

「次期王を決める戦いが今日から始まるというのに、海外は物騒だな」

　俺は、アリア帝国と肩を並べる大国の１つであるトロン王国の街中に住んでいる。王都の街は人通りが多く賑やかだが、王宮から離れた場所になってくると人通りも少なくなってくる。俺はその辺りのところに家を建てていた。俺の家には現在４人が住んでいる状況だが、後２〜３人増えても住める大きさである。

　次期王を決める戦いがあったとしても、一般市民は特に何かするというわけではないのでこっちはいい。問題はトロン王国とは別大陸にあるアリア帝国である。アリア帝国から流れているラジオは１年前からずっと物騒である。というか物騒なんて言葉で片付けてはいけないほど、市民にとってはやばい場所になっている。それにやばい状況なのはアリア帝国があるカーム大陸だけではない。今やカーム大陸以外の４大陸全てがアリア帝国がいつ侵攻してきてもおかしくない状況下にある。

　正直こんなことになるのを知っていたなら、王都に立派な家なんて建てなかった。この王都トロンに家を建てたのは１年前の１２月頃だった。立派な家を自分達で貯めたお金で建てられたのは実に感慨深い気持ちになった。しかし、それから１ヶ月経ってのあのアリア帝国のラジオ放送には、なぜこのタイミングでという気持ちになった。

　去年はアリア帝国は自分達の大陸のカーム大陸を統一するので忙しかったため、他の４大陸では特にこれといった侵攻は受けなかった。そのため１年間は、カーム大陸の状況にヤキモキしながらではあったが、新居を堪能できた。

　しかし、今年からは違う。本格的にアリア帝国が４大陸に攻め込んでくる。せめて、このトロン王国のあるアスカ大陸の侵攻は最後にして欲しいと願うばかりである。まぁ、一番良いのはアリア帝国が世界統一を諦めることなんだがな。諦めないんだろうなーと憂鬱な気分になり少し大きめなため息を吐く。

そんなことを考えているとコンコンとノックのする音が聞こえてきた。

「どうぞ」と声をかける。

「失礼致します」

流麗な動作で扉を開け入ってきたのは執事であるシン・クラーである。

「朝から大きなため息を吐いてどうされましたか？」

　どうやら俺のため息は扉を閉めていても部屋の外まで聞こえていたらしい。

「仕方ないだろ。アリア帝国の侵攻のことを考えたらいやでもため息がでる。てか、こんな時期にトロン王国は次期王を決める戦いをするのか？」

　コーヒーをカップに注ぎながら、シンは口を開く。

「アリア帝国の侵攻はともかく、次期王選の戦いはカルク様には関係ないでしょう？」

「そうなんだけどさ、わざわざこんな時期にやらなくても良いじゃんと思うんだよね」

　その俺の言葉には特に何も返さず執事は、コーヒーと新聞を俺の前に出してくれた。俺はそのコーヒーを一口飲む。

「うん、うまい」

　とりあえず現実逃避も兼ねてコーヒーの味に集中した。

　コーヒーを味わいながら新聞を読んでいると「コンコン」とノックのする音が聞こえて来た。執事の時と同様返事をしようと思ったがすぐさま廊下側から声が聞こえてきた。

「カルク様朝食の準備が出来ました。１階に降りて来てください」

そう言いメイドであるルトー・カルネは、やることがあるのか去っていった。１階に降りると全員が席に座っていた。ちなみに席には、執事のシンとメイドのルトーが手前に座っており、奥には俺の冒険家としての相棒のトミ・ティエーナが座っている。『てかシンお前一緒に俺と階段降りて来たはずだろ、なんで当たり前のようにそこにいる』とツッコミを入れたくなってしまった。

　俺が席に着くと全員が手を合わせ、「「「「いただきます」」」」と口にして、朝食に手をつける。朝食に手をつけながら俺は３人の様子を見る。昨日のラジオ放送は３人とも聞いていると思うが特にいつもと変わった様子はなく落ち着いていた。

　執事のシンはいつも通りの耳にかかるくらいの銀髪ヘアで目の色は黒色、左目だけに丸いメガネをつけ、執事服をしっかりと着こなしている。顔には皺がいくつかあるがなぜか彼の魅力を引き立たせている。

　メイドのルトーは金髪のロングヘアで後ろに髪をくくっていて、前髪が邪魔にならないように赤色のヘアピンをつけている。目の色は青色で、こちらも執事のルトーと同様にメイド服をしっかりと着こなしている。

　相棒であるトミは紫色の髪で肩にかかるまでの長さで目の色は赤色、部屋着で１階まで降りてきたのかゆったりとした服装をしている。少しというかかなり寝ぼけているように見える。

　そんな３人のいつもと変わらない様子を見て、俺なんて新居がいつ壊れるのかもしれないと気が気じゃないのにと内心で愚痴を言う。とりあえず、これ以上考えても悪いことしか思いつかないので、特に何も考えずに喋った。

「てかさ、毎回のことなんだけど朝食を食べるのに、わざわざ俺を待たなくていいぞ」

　その俺の言葉に、ルトーはナプキンで口を拭いてから答えた。

「カルク様を待つのは当然のことです。私と執事は本来、主人であるカルク様と一緒に食べることなんてしてはいけないのです。カルク様が『俺より先に起きていて朝食が俺より後なんて落ち着かない』と何度もおっしゃるから、一緒に食べさせてもらっているのです。これ以上は私のメイドとしての矜持が許しません」

　シンの方に顔を向けると目を瞑りながらうんうんと頷いている。それを見た俺は諦めたように呟いた。

「……わかったよ」

　毎回、このメイドにはこうして言い負かされてしまう。やれやれと思い、食事を続けた。

　食事が終わったので、トミと本日の冒険の打ち合わせを行う。ちなみに、シンは外に出かけ、ルトーは家の掃除をしている。

「さてと、今日の冒険はどうする？」

　そう俺が聞くとトミは顎に手をやり、考えるそぶりを見せた。朝食を食べ終えた後にトミは着替えたのか、外に出られるような服装になっている。

「……そうね。やはり“忘れられた都市“に行って素材を集めるのがいいんじゃないかしら」

　忘れられた都市というのは、Aランク以上の冒険家が行ける難易度の高いダンジョンのことだ。

　冒険家になるためにはその街にあるギルドに行って、冒険家の適性があるかどうかをギルドの人とCランク以上の冒険家に見てもらう。要は、試験のようなものだ。

　その試験に合格すると、Fランクから冒険家をスタートすることができる。

　冒険家としての仕事を順調にこなすことで、ランクを上げることができ、仕事をこなすことであげられる最高ランクがAランクである。

　ただAランクが最高のランクではなく、その上にSランクが存在する。Sランクになるには少々特殊で、固有の能力を手に入れ証明しなければならない。

　証明する方法は、『始まりの大地』と呼ばれるダンジョンにある。そのダンジョンには証明の間と言われる部屋があり、部屋の扉の横にちょうどカードを置ける隙間がある。その隙間にギルドから渡される透明のカードを設置する。

　ギルドからその透明のカードをもらうには、ギルドに行って「証明の間に行くのでカードをください」といえばもらえる。

　透明のカードを設置したら、扉を開けて部屋に入る。その部屋は何も置かれていなくて、縦幅横幅ともに５ｍくらいの大きさである。しばらくすると、“ぴっ“という音が聞こえてくるので、その音が聞こえたら部屋を出て、隙間に置いておいた透明のカードを確認する。

　透明のカードのままだと、固有の能力を手に入れていない。固有の能力を手に入れていた場合は、その透明のカードに紋章が刻まれている。ちなみに刻まれる紋章の形は人によって様々である。その紋章がＳランクを証明するものである。

　冒険家の仕事は植物採取や魔物退治、街の人の手伝いなど多種多様である。

　ダンジョン攻略も冒険家の仕事の一つである。ダンジョンは、冒険家または王族関係者が一緒にいないと他の人たちは入ることが許されていない。まぁ、許されていないだけであってこっそり入ることはできる。ただバレたりした時が面倒らしいのでほとんどの人はしない。

　冒険家の話に戻ろう。冒険家でも、ある一定以上のランクにならないと入れないダンジョンがいくつもある。

　『忘れられた都市』というのはその中でも最高峰に難易度の高いダンジョンである。忘れられた都市に入るためには、Ａランク以上の資格を持つ冒険者が少なくとも３人以上は必要であり、Ｂランク以下の冒険者は例えＡランクやＳランク冒険者と同じパーティだとしても入ることが許されていない。忘れられた都市は特に危険なダンジョンなので、入る時もちょっとした手続きが必要である。そのダンジョンのすぐ側に、小さな村である『忘れられた村』があるのでそこのギルド支部にいる人に自分のランクを証明する必要がある。証明せずにこっそり入ろうとしたものも何人かいたみたいだが、ダンジョンに入る前にすぐにそのギルドにいる冒険者に捕まっている。

　ちなみにＳランク冒険者だと人数制限はなくなり、１人でも忘れられた都市に入ることができる。ただし、Ｓランク冒険者といえども１人で入るのはあまりおすすめされていない。そしてもちろんＳランク冒険者でもこっそり入ることは許されていない。試したことはないが、多分バレるんだろうなとは思うし証明すれば堂々と入ることができるので、そんなこっそり入るような真似はしない。

　俺とトミは２人でその忘れられた都市を攻略中である。２人で入れるのは、俺とトミがＳランク冒険者だからだ。

「忘れられた都市に行くとなると少なくとも１週間は帰りたくないよな」

　その俺の言葉にトミは眉を顰め悩ましそうな表情を浮かべる。

「……まぁ、そうだよね」

　１週間帰りたくないというのは、忘れられた都市というダンジョンは探索にかなり時間がかかるからだ。半年前から攻略中なのだが、俺たちの最高到達点は第５層である。

　忘れられた都市は未攻略のダンジョンなので、何層まであるのかわからない。忘れられた都市が見つかったのは今から３００年前のことだ。この３００年の間の最高到達点は、２０層だと言われている。正直、２０層まで行くのにどれだけの準備をし、どれだけの時間がかかるのか想像つかない。

　俺たちは第５層まで行くのに１ヶ月はかかった。そのため今は攻略目的ではなく素材集めのために忘れられた都市に行っている。忘れられた都市は最高峰のダンジョンだけあって、他のダンジョンと比べてレア素材が多い。そのため金策するには打ってつけなのだ。

　トミが悩ましそうな表情を浮かべたのは、１ヶ月かけて攻略した時にシンとルトーの２人を心配させてしまったことがあったからだと思う。

　まぁ、その後は何度か忘れられたダンジョンに行っているが、その時はちゃんと帰る日付を決めて、今のところ守っている。

「１日でも約束した時間を過ぎると、ご飯が野菜だらけになっちゃうし、私たちの苦手な料理ばかり出されちゃうからねー」

　どうやら、トミが悩ましそうな表情を浮かべていたのは２人を心配させることではなく、遅れて帰った時のペナルティが嫌だったからだ。流石に２人を心配させてはいけないと思ってはいると思うのだが。まぁ、憶測は良くないよね。

　俺は特に苦手な食べ物がないので、ご飯が野菜だらけになっても平気ではある。まぁ何連続も続いて野菜だけになるのは嫌ではあるが。

「あなたはいいわよね。嫌いな食べ物がないのだから」

　こちらが考えていることを察しているのかいないのかトミはそうごちた。

　まぁ、ご飯は１日の楽しみの１つだが、トミはダンジョンを探索するのがもっとも好きなので結局行く結論に変わりはない。そこは５年もパートナーとして一緒にいるからわかる。

そしてもちろんのこと、ダンジョン探索は冒険家の仕事としてもっとも自由だと思っているので俺も好きだ。

　そんなわけで俺とトミは、シンとルトーに１週間かけて忘れられた都市に行ってくると声をかけてから家を出た。

　家を出てから人があまり歩いていない裏道に出ると俺は自分の気配を消した。

「相変わらず、すごいわね。あなたの気配を消す技能。目の前にいるのに、しっかり意識していないとわからない」

　気配を消した俺をトミが驚いたように見ながら言った。

「まぁ、この技術は何年も前からシンに教わって練習しているからな。魔法ではなくて技術でできるというところがかなりいいよ」

　俺は平然と答えるが、内心は少し喜んでいた。やっぱり、自分が努力してきたことを褒められたら悪い気はしない。

　ところで、どうして執事のシンが気配を消す術を知っていたのかは、彼が元一流の暗殺者だからだ。２０年以上前は暗殺者として恐れられていたらしい。その暗殺者がなぜ俺の元にいるかだが、まぁお目付役みたいなものだ。

「私は、技術だけで気配を消すのは得意ではないんだよね」

　そう言ったトミは、普通の状態よりも存在感がほんの少し薄くなっている。そして、さらにその上から気配遮断の魔法をかけ、かなり存在感が薄くなった。

「それだけ気配を消せたら十分だろ」

　そういうとトミの表情は特に変化していないが、少しだけ嬉しそうにしているように俺には見えた。

　ギルドに向かう途中、情報屋の家に向かった。情報屋は昔からの悪友であり、名前はオリ・ハザリヤという。

「これはこれは上客の登場だね。これから冒険にでも行くのかい？」

　店に入ると、こちらを歓迎するかのようにオリの快活な声が聞こえた。

「ああいつもの部屋２つを借りたい」

俺がそういうとオリは笑顔で「ご自由にどうぞ」と言った。

　いつもの部屋というのは、オリが座っているカウンターの奥にある部屋のことだ。ここは情報屋ということもあり大事な話をする時に用いる部屋がいくつも用意されている。その中の２部屋を俺とトミは借りている。

　俺とトミはそれぞれに用意された部屋に入った。その部屋のクローゼットを開けると仮面と着替えが置いてある。俺はクローゼットに置いてある服に着替え、目元までを覆う仮面をつける。その仮面をつけると脳内に声が聞こえてくる。

『隠蔽魔法を発動しますか？』

　俺は脳内に聞こえた質問に対し淡々と答える。

「はい」

『髪の色はどうしますか？』

「赤色で」

『髪型はどうされますか？』

「今と同じで」

『少々お待ちください』

　そう脳内に聞こえたので少しばかり鏡をぼーっと見ながら待つ。

　そういえばこの服装ってＡランクの服装なんだよなーと鏡を見ながら思った。情報屋の部屋に置かれている服は俺とトミがダンジョンから探索して手にいれたものである。確か２年くらい前に手に入れたものだ。手に入れた時はＣランクの服装だったのだが、ある時オリに「その服強化しないか？」と言われ「したい」と答えたら、オリのお得意様である鍛冶屋を紹介してもらった。その紹介してもらった鍛冶屋というのが、トロン王国では有名な鍛冶屋でそこでは何人もの従業員が働いている。俺も何度かその鍛冶屋には客として見に行ったことがある。というより、トロン王国に住んでいるものなら、誰もが一度は訪れる店の１つである。

　その中の１人とオリは懇意にしており、俺はオリから紹介してもらった。今ではその鍛冶屋の１人に装備の見直しなどの依頼を行ってもらったりと常連となっていた。

　鍛冶屋の人に強化してもらった服装の見た目は赤色と黒色を基調とした貴族が着ていそうなデザインをしている。個人的にはかなりお気に入りのデザイン、そして性能であるので、冒険に出かける時に装備している。

　そんなことを考えていると特に前触れがなく、いきなり髪の色が黒色から赤色に変化する。正直この急な変化はいつ見てもびっくりする。

　しかし、びっくりするが、この仮面は便利だなとも思う。髪の色を変えられ、正体を認識しにくくする隠蔽魔法も使用者の魔力を使うことなくかけてくれる。

　本来こういった魔法具と呼ばれるものは、使用者の魔力を注入することでその魔法具の能力を発動することができる。魔法具に魔力が内包されているのはかなり珍しいものだと言われている。

　ちなみに魔法具にも冒険者と同じでランク付けされていて、ＦからＳランクとランクの内容もギルドの冒険者と同じである。それでその魔法具のランクを決めるのが鑑定屋である。

　俺は集めた魔法具をオリに鑑定してもらっている。情報屋であるオリは鑑定をする資格も手に入れている。前にこの仮面を鑑定してもらったところ、Ａランクの魔法具と言われた。強さ的には大したことない魔法なので、どうしてＡランクなのか聞いたことがあったが、隠蔽魔法の精度がかなり高く、正体を見分けるのは非常に困難であるらしいからだ。

　準備ができたので、部屋の外に出る。廊下で数分も待たないうちにトミが部屋から出てきた。トミの姿も俺と似たような格好になっていて、青と黒を基調としており俺と同じデザインだ。顔には目元を覆う黒色のマスクをつけている。髪型や髪の色は特に変わっていない。前になぜ髪を変えないのか聞いたことあったが「気に入っているから」という返事が返ってきたのみである。

　着替えが終わったので俺とトミは情報屋を出る。情報屋を出る時だが、実は情報屋の出口はいくつもある。地下にも出口があるので驚きだが、今回は店内の入り口の近くにある出口から出た。

　俺とトミは、情報屋の人気のないところから一直線に街中に出て、ギルドに向かう。街中は人が多いがＳランクの仮面の戦士が歩いているということには気づかれていない。気配を消しているため一般人には分からないのだ。分からないと言ってもすれ違うときには、すれ違ったという認識は一般人の方にもある。しかし、いちいちすれ違った人の顔などは覚えていないものだ。気配を消すのが苦手なトミも街中では特に気づかれない。まぁ、たまに気づかれて騒ぎになったことがあったので、トミは魔法を使ってさらに自分の気配を消すようになった。

　特に誰にも仮面の戦士とバレずにギルドの前に到着した。ギルドの中に入ると、冒険者や道具を売りに来たものなどいろんな人たちがいて、混み合っている。入り口付近にいた人は仮面の戦士が入ってきたのに気付いたのか「おはようございまーす」と軽い挨拶をしてくれる。俺も礼に習い「おはようございます」と挨拶をかわし前に進む。

　ギルドには依頼ボードというものがあり、その依頼ボードにはさまざまなランクの依頼が張り出されている。依頼ボードは朝に更新されることが多いので、朝の時間帯はギルドに人が多く集まる。依頼を受けるのは早いもの勝ちだからだ。早いもの勝ちと言っても１人につき一枚までしか受けることができない。複数枚依頼ボードから取ることはできず、１パーティにつき３枚までといった縛りもある。大量のパーティメンバーを集めたものが独占しようとした事件が昔にあったのでそのような決まりになったのである。

「朝は相変わらず人が多いわね」

　ギルドが混み合っているのを見て、嫌そうだがどこか嬉しそうにトミが呟く。

　俺とトミは他の冒険者が取り合っているのを他所に３階に行く。２階にも依頼ボードがあるが、１階と違って依頼ボードを見ている人は少ない。こちらはＣランク以上の冒険者が受けることができる依頼ボードなので１階と比べて人は少ない。そして、３階にも依頼ボードがあり、こちらはＡランク以上のものしか受けられない内容の依頼となっている。

　そのため３階の依頼ボードの周りが最も人が少ない。まぁそれでもちらほらと人はいるのだが。

「おお、“あか“と“むらさき“じゃん」

　３階に着くと声をかけられた。声をかけた人物の方を見ると、同じＳランク冒険者のエイル・ロンブランドがいた。

　ちなみに“あか“と“むらさき“というのは俺たち仮面の戦士の呼び名である。前は仮面の戦士と呼ばれていたが、俺とトミのどっちも仮面の戦士呼びだったのでどちらか片方に呼びかけた時に非常に面倒だったので名前をつけたらしい。名前をつけたのはこの目の前にいるエイルだ。「なんでその名前なんだ？」と前に聞いたことがあったが、「髪色で決めたー」と軽い返事だった。特に反論しなかったが、気づいた時には“あか“と“むらさき”呼びで定着していた。

「やぁ、エイル」

俺もそう挨拶を返す。トミは軽く頭を下げる。

「依頼ボード見に来たの？」

「まぁ、いいのがあったら受けるけど、多分ないよね……」

「うん、あるのは面倒臭い依頼だけかな。ま、Ａランク以上の依頼ボードだから仕方ないけど」

「なるほど。ところで、忘れられた都市の依頼はあるかな」

忘れられた都市のダンジョン名をいうとエイルは楽しそうに聞いてきた。

「へー、忘れられた都市に行くんだ。どこまで攻略したの？」

俺は少しだけ嘘の階層を言うか迷ったが、本当のことを伝えた。

「……前と話した時と変わらず、５階層で止まったまま」

そういうとあからさまに嬉しそうにエイルが笑った。

「じゃあ、私の勝ちだね。私のパーティは８階層まで行ってるから」

それを聞いた俺とトミは驚いた。

「え？！もう８階層まで行ったの？確か３ヶ月くらい前に会ったときは、３階層までだったはず」

トミがエイルに聞いた。

「ふふーん凄いでしょ。まぁ結構な時間ダンジョンにこもることになって大変だったけど、お金もいっぱい入ってよかったよ」

そのエイルの話を聞いたトミは羨ましそうにしていた。かく言う俺も羨ましいなと思った。

「で、今回はどれくらいの期間忘れられた都市にこもる気なの？」

気になったのか、エイルが聞いてきたので俺は簡潔に答える。

「１週間だけだね」

「その期間だけじゃ、当然ながら私たちのパーティの記録は超えられないね。と言うより、良くて１、２層進むのが限界なんじゃない？」

「まぁ、そうだな。流石に１週間で攻略に挑もうなんてしないよ。ただの素材集めだ」

そう言うと納得したのかエイルは頷いた。

「なるほどね。忘れらた都市は低階層でも素材はいいもんね。結構高く素材は売れるし、武器の強化ができるアイテムも拾えるかもしれないからね。まぁ、でも忘れられた都市に行くなら攻略する気で行くのが一番いいとは思うけどね」

それでエイルとの会話は終わり、俺とトミは受付の方に向かった。

「すいません、忘れられた都市に行くワープポータルを使いたいんですけど」

「かしこまりました。仮面の冒険者様、いつもこちらのギルドをご利用いただきありがとうございます」

そう言ったギルドの受付嬢は、ワープポータル使用証明書を渡してくれた。

　ワープポータルとは、瞬時に移動できるもののことで、例えばこのトロン王国から忘れられた都市までは馬で走って３日はかかると言われているが、このワープポータルを使用することで、瞬時に移動することができる大変便利なアイテムである。しかし、そんな便利なアイテムも数が非常に少ない。

　俺とトミはそのワープポータルを使用して、忘られた都市がある近くの村まで瞬時に移動した。

　その村にあるギルドでも手続きを行う。今度の手続きは、忘れられた都市に入るための手続きである。この手続きをしないで忘れられた都市に入ろうとするとギルドに雇われている凄腕の冒険者に捕まってしまう。

　手続きを行った俺とトミは早速忘れられた都市のダンジョンに向かった。このダンジョンは地下型のダンジョンである。ダンジョンの型として主にあるのが塔型のダンジョンであり、地下型のダンジョンというのは珍しい。

　ダンジョンの入り口前まで来た俺とトミは階段を降りてダンジョン内に入る。着替えやら手続きやらで時間がかかったが、１０時ごろにダンジョンに入ることができた。この時間帯だと軽い探索をするくらいで終わるだろうと俺は思った。

　なぜ軽い探索だけで終わるのかというと、忘られた都市の親切設計なのかどうかは知らないが、昼と夜の１２時になると強制的にその層の出口までワープさせられる。忘られた都市は個人的に最も難しいダンジョンだと思うので、一見親切設計に見える。しかし、この親切設計はいざ真面目に忘られた都市の攻略をしようとすると非常に厄介なのだ。いや、この親切設計自体は特に悪いことではない。ただ、その親切設計におまけでダンジョン内の道が変わってしまうのである。だから、攻略のために地図を書いたとしても１２時間後にはその地図はゴミとなってしまう。記載した地図をそのまま利用できたら、この忘られた都市はもっと上の層あるいは攻略できていただろう。忘られた都市が未攻略のダンジョンなのは、このおまけのせいだと言っても過言ではない。

　まぁしかし、ダンジョンがリセットされるまで２時間あるのでただ待っているだけというのも勿体無い。ということで忘れられた都市の探索を始めた。

　忘れられた都市は名前の通り、大昔に作られたダンジョンである。３００年前のギルドが調べた所によると、このダンジョンは１５００年前の勇者と魔王が生きていた時代のものだということがわかった。大昔のものばかりで構成されたこのダンジョンは現代人の俺たちからすると目新しいものばかりで新鮮である。そんなことを考えているとトミの方から声が聞こえてきた。

「前方に魔物が３匹いるわ」

　そう言ったトミは右手でレンズを掴み右目にそのレンズを持ってきている。

その言葉を聞いた俺はすぐさま戦闘態勢をとる。

「了解。魔物はどんなやつだ？」

「メタルスライムが１匹とレンズ卿が２匹いるわね」

　まだ魔物との距離はあるが、少し走れば魔物も気づく距離にいる。

　なぜ距離があるのに魔物に気付いたのかは、トミが持っているレンズにある。このレンズは『遠目レンズ』といいBランクの魔法具である。入手方法は、魔物であるレンズ卿から入手することができる。ただレンズ卿は倒すのは簡単だが、レンズ卿が持っている魔法具をゲットしようとなるとかなり難しい。まぁ、俺とトミは既にレンズをゲットしているから、倒すだけなのでレンズ卿は問題ない。

　メタルスライムだが、こちらは敵として非常に厄介だ。まずこのメタルスライムは名前にメタルとついている通り硬い敵なのだ。しかも逃げ足も意外に早く攻撃を当てづらい。そして、メタルスライムに見つかったら無視するわけにもいかない。その足の速さでメタルスライムはついてくるからだ。ついてくるだけならばいいのだが、どういう方法を使っているのかわからないが、メタルスライムがどんどん集まるようになってくる。だから、メタルスライムは集まる前に倒さないといけないのである。敵としては厄介だが、倒した場合の素材は簡単にゲットできるので、その点に関してはレンズ卿と違って楽だなと思う。

　だが、メタルスライムが厄介なのは普通の冒険者に当てはまるのであり、俺には当てはまらない。

「問題はなさそうだな。突っ込むぞ」

「了解」

　トミは『遠目レンズ』を服のポケットに直し、１本の棒を出す。その棒にトミが魔力を込めるとクリスタル型の杖に変化した。

俺たちが一直線に魔物に向かって走ると、魔物もすぐにこちらに気づいた。メタルスライムが距離を取ろうとしたので、俺は『纏』と言われる身体強化を発動した。纏とは魔力を身体全体にめぐり渡らせる技であり、身体を強化してくれる。どれくらい強化するのかは、個人によって違うみたいだが、俺の場合は通常の身体能力の３倍は体感的に強くなっていると思う。

　その３倍となったスピードで今も全力で逃げているメタルスライムの目の前までやってきた。メタルスライムは俺が目の前まで来たのに驚いたのか急ブレーキをかける。俺はその隙を見逃さず、右手に力を込め、その手が銀色に輝く。そしてその銀色に輝く右手の拳をそのメタルスライムめがけて殴りつけた。殴りつけられたメタルスライムはまるでそのメタル部分が溶けたかのように倒れる。

　メタルスライムは本来人が殴った程度ではびくともしない。むしろ殴りつけた側の手の方が悲惨になる。しかし、俺はメタルスライムを一撃殴りつけただけで倒せた。これは俺の特殊な能力によるものである。その特殊能力というのは、俺が力を込めて殴った敵のダメージが、体内に直接衝撃として響くものである。なので、メタルスライムのようにいくら表面が硬くても、中から破壊してしまえば問題ないのである。これが俺がメタルスライム相手に苦戦しない理由である。正直なところ、俺の能力がなければメタルスライムは倒すのにかなり厄介なので、他のSランク冒険者やAランク冒険者がどうやって倒しているのか気になるところではある。ちなみにこの殴りつけることで体内に直接ダメージを与える技は『崩拳』と名づけている。

　この崩拳のおかげで俺はSランク冒険者になることができた。

　メタルスライムを無事倒せたので俺は、メタルスライムの溶けたメタル部分を持っていた小さい空き瓶に入れる。素材を回収できたので後ろでレンズ卿と戦っているであろう、トミの方向に顔を向ける。トミは二体目のレンズ卿に向かって、クリスタルロッドを振り翳しているところだ。一体目の方は消えているので倒したようだ。クリスタルロッドで殴りつけられたレンズ卿は、吹っ飛ばされたかと思うとその途中で霧散するように消え失せた。

「何事もなく倒せたようだな」

　俺はトミに近づきながらそう声をかけた。

「レンズ卿相手だから楽勝ね。あなたの方こそ一瞬でメタルスライムを倒せるのは凄いわ」

　感心しながらトミが言う。その後も俺たちは、魔物を見つけては戦い、素材を見つけては拾いを繰り返していた。

　１２時になったのか、迷宮の地面が光り出した。どうやらリセットの時間が来たらしい。迷宮全体が光出したかのように視界が完全に真っ白になる。

　数秒すぎると真っ白になった視界が徐々に形を表す。さっきまでいた場所とは目の前の視界が変わっている。そして、後ろを振り返ると昇りの階段がそこにはあった。

　どうやら第１層の入り口に戻ってきたらしい。

「だー、くそあとちょっとだったのに」

「本当にね。なんでこのダンジョンはこんな仕様なのかしら」

　俺たちから少し離れたところからそんな声が聞こえてくる。

「今日このダンジョンに来ているの私たちだけじゃないみたいね」

　トミも別のパーティがいることに気付いたのかそう声をかけてくる。

「そうみたいだな」

　俺はトミの言葉に生返事をし、あることを考える。忘れられた都市のリセットがあるのはもう仕方ないことだけども、攻略中の全員が戻されるというのは少し怖いものでもある。戻った瞬間にその人物を攻撃したら無防備だからだ。まぁ基本的には近くにいた人物と近い距離に入り口に戻され、離れていたところにいたパーティは少し離れたところに配置されるので、ダンジョンを作った人物は少しは考えているようだと思う。こんなことを考えるのは一般冒険者としては悪い癖だなと思ってしまう。子供の頃から暗殺者の師匠にいろいろ教わったのでそんなことを考えてしまうことが多い。

「視界に階段を見つけた時に床が光ったのは、正直今かよと思ったよな」

　俺たちと別のパーティがそう話しているのを聞こえた。それを聞いた俺は可哀想だなと思った。

「あー、あれはかなりショックよね」

　トミも冒険者が話した内容を聞いていたのか俺に話しかけてくる。表情もどこか相手を同情するような感じで苦笑いを浮かべている。

「ああ、あれは正直引きづるよな」

　次の層に行ける階段を見つけたところでリセットが起こるのはこのダンジョンの嫌な出来事の一つだ。

「あ、仮面の戦士がいる」

　そのパーティの１人が俺たちに気付いたのか、その言葉でそのパーティの全員がこちらを見てくる。

「おう、仮面の戦士」

　さらにその中の１人が俺達に声をかけてくる。

　よくよく見るとその声をかけてきた人物には見覚えがあった。

「おお、ロッジじゃないか。今日は指導役でパーティに同行しているのか？」

　彼の名はロッジ・クルーガである。

「ええ、そうですよ。これも私たちの仕事ですので」

　ロッジと話していると後ろから女が割り込んできた。

「おまえもいたのか。イリス」

　彼女の名はイリス・ナラリヤである。

「あの、僕もいます」

　そう言った男は、ベネディ・スルメルトである。

　６人だと思っていたパーティの３人は、ギルドに直接雇われているベテランのAランク冒険者達だ。俺も彼ら３人のことは知っているしそれなりに親しげに話せる間柄だ。

「話は聞いていたけど、残念だったな。次の層に行ける目の前でリセットが起きてしまって」

　俺は少し茶化すようにそう３人に話しかけた。しかし、３人は特にショックを受けた様子もなく返答した。

「まぁ、忘れられた都市ではたまにあることだからな。指導者になると何度か同じことがあったから、特に気にしなくなってきたな」

　そのセリフに俺とトミは驚いたように声を漏らす。

「「おお、まじか」」

　他の２人はやれやれと言った感じで首を振っている。

「そう思っているのは、流石にあなただけだと思う」

　イリスが呆れたように言っている。

「そうですね。確かに何度かありましたが、ショックに慣れるなんてことはないですね」

　ベネディもそう言った。

「そうですよね。流石になれないですよねー」

　トミもどこか安心したようにつぶやいた。

「あれ、なれてなかったの！？」

　ロッジは、他の２人がリセットのショックになれていないことに驚いた。

「おいガイド、いいか？」

　俺たちが話していると、３人を雇っているそのパーティのリーダーらしき人物が話しかけてきた。

「なんだ？」

　ロッジが答えた。

「そいつらってSランクの仮面の戦士のあかとむらさきだろ？」

　どこか疑っているような目つきでそのパーティのリーダーらしき人物が俺を睨んでくる。

「そうだが、それがどうしたんだ？」

　ロッジがそのパーティのリーダーらしき人物の視線が俺に向いているのを見て不思議そうに聞いた。

「俺はSランク冒険者が嫌いだ」

　ロッジの質問を無視し、その男は俺にそう言ってくる。

「……えっと」

　突然そんなことを言われた俺は思考が停止したようにフリーズしてしまう。

「……ちょっと、ドラン」

　どうやらリーダーらしき人物はドランと言うらしい。そしてその仲間がドランを嗜めるように呼びかけた。だが、ドランはその呼びかけを聞こえていないかのように囃し立てた。

「Sランクは特別な力を手に入れたものだけが、確かなれるんだよな。正直俺はそんな力がなくてもSランクなんかに負ける気はしないがな。なんで俺らAランクは３人以上の制約があってSランクには人数縛りがないんですかねー。それにギルドで優遇されているのも腹が立つ」

　ドランは落ち着いて話しているので冷静のように見えるが、内心全く穏やかなのではないのだろう。とりあえず、俺がSランク代表としてキレられているのはわかる。

「おいおい、あかに向かって失礼だろう。それにSランク冒険者は俺たちAランク冒険者と違って、本当に強い。まぁ、中には戦闘面では役に立たない特殊能力者もいるみたいだが、そう言う奴らは、Sランク冒険者にはなっていない」

　ロッジがドランを宥めるかのように言った。だが、そのロッジは不満そうな顔を浮かべこちらを向いてきた。

「だったら、あか、あんたはSランク冒険者を名乗ってるから、強い能力を持ってるんだよな。けど、あんたの噂は聞いてるが、一切魔法が使えないと耳にしたことがあるが、本当か？」

　その質問に俺は痛いところついてくるなーと思い、苦笑いを浮かべて答えた。

「ああー、その、うん、その噂は本当のことだ。俺は初級魔法から上級魔法のどれも使えない」

　それを聞いたドランは嘲笑するかのように顔をにやけさせた。

「はん、マジかよ！？魔法が使えないのにSランクを名乗るなんてあり得なくねぇか？」

　魔法が使えないのは本当のことなので、俺は反論せずに黙っていた。

「……何も言い返さなねぇのか。本当にあんたSランクの実力があんのかよ？」

　俺が黙っていることをいいことに、ドランが饒舌になってくる。

「あなたね、パーティの私が言っても信用しないかもしれないけど、彼は本当に強いのよ」

　相手の挑発に反発をしない俺をみてトミがそう言い返す。だが、トミが言い返したことが愉快だったのか先ほどよりもさらに意地悪い笑みをドランは浮かべ口を開いた。

「はっ、パーティメンバーに代わりに言い返してもらうとかマジでダセェな」

　これ以上トミに反論してもらうと、余計にこのリーダーが饒舌になりそうだったので、俺はトミが喋ろうとしたのを右手で遮るようにして止めた。

「あー、なんだ、あんた流石に言い過ぎじゃないか？」

　俺が反発したのが嬉しかったのか、さらにリーダーは笑みを深めた。えっ、こいつ何しても笑うんじゃねと思ってしまい内心ちょっと面白かった。

「ようやく、言い返してきやがったか。俺に言い返す度胸があるってことは、Sランクの実力があるってことだよなー」

　正直、俺はこいつが何を言っているのかわからない。Sランクの実力があるのかどうかなんて、俺がSランクの冒険者であることは周知の事実のはずだ。

「Sランクの実力ってのを証明してもらってもいいか？仮面の戦士のあかさんよー」

　ああ、なるほど。ドランは本当に俺がSランクかどうか知りたかったようだ。証明する方法は簡単なので俺は冒険に持ってきていた鞄を漁ろうとする。

　俺の行動を見たリーダーはなぜか訝しげな表情を浮かべていた。なんでドランがそんな顔をしたのか少し不思議に思ったが、とりあえず言われた証明書のカードを取り出し、ドランに渡した。

　カードを渡されたドランは明らかに不機嫌そうだ。

「おい、これはふざけてんのか？」

　？？？。ふざけたつもりはなかったので、頭の中が真っ白になる。リーダーは怒りのまま捲し立てる。

「俺が言ってんのはお前に本当にSランクとしての実力があるのかってことだ。こんなもんはトロン王国の冒険者全員がお前のことを認識している時点であるに決まってるだろうが。てか、俺さっきSランクの実力を証明しろって言ったよな！？」

　ああ、言われてみれば確かにそうである。隣のトミを見てみると少し俺を小馬鹿にしたような笑みを浮かべていた。うん、これは俺が悪いわ。そう思い俺は謝罪の気持ちも込めて口を開いた。

「悪い悪い、証明しろって言われたから、証明書を出せばいいのかなと思ってしまい、つい」

　その俺の言葉を聞いたトミは顔を上に向けて手で顔を押さえている。その様子を見た俺は、あーこれは明らかに失敗したやつだなと、表面では狼狽えているが内心かなり冷静になっていた。

　当然のごとくリーダーはさらに不機嫌になり、手に持っていた俺のSランク証明書を地面に叩きつけ叫んだ。

「ざけんな！」

　俺の内心はそのリーダーの叫びを無視し、俺の証明書がーと叫びたくなる気持ちになる。まぁ、Sランク証明書のカードは頑丈に作られているので多少のことでは壊れはしない。しかし、Aランク冒険者が地面に思いっきり、叩きつけても無事なのかどうかはやったことがないので少し不安ではあった。

　果たしてSランク証明書は無事だった。表面には見せず俺は内心安堵して、Sランク証明書を拾い鞄の中に戻す。

「おい、お前」

　そんな俺の行動にドランがイラついたのか、仮面の戦士からついにお前呼ばわりになってしまった。まぁどう呼ばれようと気にはしない性格なので、普通に返事をした。

「何？」

「舐めた態度ばかりとりやがって。……俺と勝負して、Sランクであることを証明してみやがれ」

　その発言にパーティメンバーの2人が慌てた様子でそのドランに話しかける。

「流石にS級相手に勝負挑むのはやめた方がいいんじゃ」

「そうですよ。いくらドランが強いからと言って、Aランクになったばかりの俺たちじゃ仮面の戦士と経験値が違います」

　その慌てた２人の様子にドランは極めて落ち着いた様子で話す。

「心配するな、２人とも。俺がこんなやつに負けるとでも思うか？」

　まだ、俺の実力を見ていないのに、もうこんなやつ扱いである。ちょっとは心にくるものがあるのでやめて欲しい。

　しかし、そんなことよりも少し気になったことがある。このドランという人物は俺と喋っている時は、明らかに見下したような喋り方をしていたので、てっきりパーティーメンバーにもきつく当たるタイプかと思ったら、どうやら話している態度を見るにそうではないらしい。

「けど」

　仲間の女が何か言おうとしたが、ドランはそれを手で遮る。

「俺の実力はお前等も知ってるだろ」

　ドランは自信をのぞかせる笑みでパーティの２人を見てそう言った。その様子を見て、パーティメンバーに話すみたいに俺とも話してくれませんかねと思った。

　それでドランはパーティメンバーの２人とは話が終わったのか、こちらに振り向いてきた。振り向いてきたドランの表情は明らかにイラついている。いや、絶対にそんな怖そうな顔で後ろの２人と話してなかっただろ。俺にも優しく話せと内心毒づく。

「俺と勝負してもらおうか」

　ドランは怖い表情を浮かべながら、そう俺に言ってきた。しかし、どこか覚悟を決めた表情をしている。

「え、嫌ですけど」

　さっきまでのやりとりとかは関係なく俺は平然と断った。

「……なぜこのやり取りで断る？」

　出鼻をくじかれたドランは不機嫌そうに呟く。

「だってあんたと勝負するよりは、忘れられた都市を探索したいからな。それに、あんたと勝負することで無駄に体力を消耗してダンジョンに差し支えるのも嫌だしな」

　俺はドランに冷静に説明した。む、とドランは少し唸る。

「ここまで特に何も喋ってこなかったけど、これはあかが断る理由としては十分じゃないのか？」

　ロッジも俺に加勢するように、ドランにそう話す。

「少し待て」

　ロッジの話を聞いたドランはそう言い、考えるそぶりを見せる。

「話が少し長引きそうね。今日はどれだけ探索できるのかしら」

　トミが心配そうに呟く。

「よし！」

　ドランはいきなりそうつぶやいた。そして、こちらの方に向き話しかけてきた。

「あか。あんたはなんのためにこのダンジョンの探索をすると言っている？」

　ドランが不思議な質問をしてきたので、俺はトミの方に顔を向ける。トミもドランの言いたいことがわかっていないのか、両手と肩を上にあげわからないと言った姿勢をとる。

　トミには頼れなさそうなので、とりあえずその質問の内容について考えてみる。けど、答えははっきりしているので、俺は自分が考えていることをドランに告げた。

「……なぜ、ダンジョン探索をするかって。それは、攻略のためなんじゃ」

　ちょっと自信なさげな口調になってしまった。まぁ、さっきから相手の求める返事をしてこなかったので、こんな自信なさげになってしまったのかもしれないのかなと、内心分析していた。

「そうじゃねぇ。お前は俺との勝負が時間と体力の浪費だと言ったよな？」

「ああ、まぁそういう風には言ってはいないが、ニュアンス的にはそんな感じになるのかな？」

　俺が自分の言葉を思い返そうとしていると時間の無駄という言葉は特に気にしていなかったのか、冷静にドランが言ってきた。

「さっきのやり取りで俺としてはそう認識させてもらった。時間の無駄は確かに俺も嫌うところだから、そこは納得してやるよ」

「じゃあ、もうダンジョン探索を再開してもいいかしら？」

待ち侘びたかのように、トミがドランに向かって言った。

　しかし、ドランは首を横に振った。

「まだ、駄目だ。というよりむらさき、あんたは落ち着けよ」

　今にもトミがダンジョンに向かって走りそうな勢いを見てドランが言った。トミは不服そうな顔を浮かべるが、ドランのいうことを聞いたのか、話の続きを促すように壁に背中をもたれかけた。

　それを見たドランは満足そうに笑顔になり、口を開いた。

「俺と勝負するのはあんたにはなんのメリットもない。だから時間の無駄なんだろ？」

　悪意ある言い方ではあるが、間違っていないので否定できない。

「まぁ、そういうことになるな」

　その俺の返答に満足しているのかドランは笑顔のままである。なんだろ、さっきまで怒っていた顔の人物とは思えないほど不気味なんですが。

「じゃあ、メリットがあったらどうだ？」

「メリット？」

「ああ、そうだな、仮面の戦士の２人はなんで忘れられた都市を探索に来たんだ？攻略以外で答えてくれ」

　俺とトミは顔を見合わし、互いに頷く。

「攻略以外だと素材集めや、あと集めた素材を売ってお金稼ぎだな」

　ドランは目を光らしたかのように笑みを深め、俺が言った部分に食いついてきた。

「素材を売って金稼ぎか。Sランク冒険者とは思えない発言だな。てっきり金にはもっと余裕があるのかと思ったぜ」

　それを聞いた俺は少しだけしまったなと思った。わざわざこちらがお金について心配している状況だということが相手にわかってしまうのは、なんとなく気分的に嫌なものがある。

　お金に困っているSランク冒険者だと言いふらされたくなければ勝負しろだなんて言われたらどうしよう。まぁ、多分そう言われても勝負しないんだろうが。というよりそんなこと言われたら、是が非でも勝負したくないというものだ。しかし、そう考えていた俺とは裏腹にドランはある提案を口にした。

「仮面の戦士、あか、お前が俺との１対１に勝てたら金貨１０枚をお前にやろう」

「喜んで戦わせていただきます！」

　俺の手のひら返しにトミは呆れていた。

　さて、ドランと俺が戦うことが決まったので、俺たちはダンジョンをでて、忘れられた都市の近くの忘れられた村まで戻っていた。

　ダンジョンの出口の前で話していたので出ることに関しては誰も文句は言わなかった。まぁダンジョンで戦ったら、いつ魔物に乱入されるかわからないし、危険だからね。また忘れられた村までも大した距離ではないので誰も文句は言わなかった。トミが少し不服そうにしていた気がするが、まぁ、多分気のせいだろう。

　忘れられた村まで戻ってきた俺たちは戦いについて話し合うことになった。とりあえず俺は気になったことがあったのでドランに聞いてみた。

「戦う条件だけど、俺が勝ったら金貨10枚くれるんだろ？あんたが勝った場合は俺たちは何をしたらいいんだ？」

「あんだ、Sランク冒険者ともあろうお方が負けた条件に対してビビってんのか？」

　不敵な笑みを浮かべて、ドランはそう言ってくる。

「べ、別にビビってはないが、同じ条件で金貨10枚払えと言われたってむ…だから」

　その自信なさげな俺の言葉を聞いてトミは「あーあ」と呟いていた。それを見た俺はそんなため息つかないでと内心思った。

「はっ、自信ないのか、それとも条件にビビっただけなのか。まぁ精神攻撃するのもありではあるが、心配すんなよ。俺が勝っても特にお前ら仮面の戦士には何も請求はしねぇ」

　俺はその言葉が少し意外だと思った。トミもそう感じたのか首を傾げており、俺より先にドランに問いかけた。

「どうしてあなたが勝ったときの条件を出さないの？」

「……俺にとっては、Sランクに勝ったという証明が欲しいだけだ。そうだな、条件をつけるとしたら俺が勝った時に、トロン王国の冒険者に言いふらして良いっていう条件はどうだ？」

　え？何、その条件。このドランという人物かなり律儀なのでは。ドランの印象が最初の喋っていた時よりもかなり変わってきた。わざわざ、そんな条件を出さなくても勝手に言いふらせばいいと思う。

「OK。わかった。その条件で構わない」

　俺がそういうとドランは笑みを浮かべ「勝負成立だな」と言った。

　そして、俺たちは忘れられた村から少し離れた空き地にいる。

「さてと、じゃそろそろ戦うか」

「ああ、ぼこぼこにしてやんよ」

　今にも俺とドランが勝負を始めようとする。

「ちょっと待ったぁ。Aランク冒険者とSランク冒険者が戦うんだ。周りに被害が及んでは俺がギルドに怒られてしまう」

　ロッジが焦って俺たちの戦いを止めようとする。

「あん？いいテンションになってきたんだから止めんなよ」

　出鼻をくじかれたドランは少々不満顔になる。まぁ俺も戦う気満々だったので急に止められたのは不満ではある。戦いたいのであって、決して勝ったときの金貨10枚がすぐに欲しいという訳ではない。

「止めるつもりはない。それにすぐ終わることだ。おい、ベネディ、イリス、結界を貼るからそれぞれ空き地の端までいけ」

ベネディとイリスは面倒臭そうにするが、ロッジの言うことを聞くようにそれぞれ空き地の端まで移動した。

「ムラサキさん。結界を貼るから、あんたは結界の外で見物してくれねぇか？」

「私はここで見ていても平気だけど」

　トミは近くで俺とリーダーの戦いを観る気なのか、動こうとしない。

「あの2人もあんたがここにいると戦いづらいんじゃないのか？」

　トミはそう言われ、うーんと少し唸る。

「わかった」

　ロッジの言葉に納得したのか、結界を張ろうとしている外側までトミは移動した。

「ようやく、Sランクと戦えんのか」

　そう言ったドランは笑みを浮かべ、右手を左手に打ち付け、気合を入れている。

「ああ、思う存分やろう」

　俺はドランの戦いたいという気持ちに応えるべくそのように言った。なんだかんだこれから戦う相手のドランを俺は少し気に入ってきたようだ。

　そして、俺とドランは戦闘態勢をとる。

「ああ、戦う前にもう1ついいか？」

　ロッジの大きな声が聞こえてきた。拡張魔法、あるいは魔法具を使っているのであろう。俺は今度はなんだと嫌そうな顔を浮かべ声のする方を見る。

「結界の外に出ても負けだし、壊しても負けだから。そこんとこは気をつけてくれよ。じゃ、いつでも始めてくれ」

　その言葉を聞いて俺とドランは互いに相手を見る。俺とドランの距離は数メートル離れており、互いに近づかなければパンチなどの近接技は当てられない。

「俺から仕掛けていいかぁ？」

　ドランは不敵な笑みを浮かべそう俺に問いかけてくる。

「ご自由にどうぞ」

　そういうと、リーダーは俺の方に向けて右手をかざしてきた。

　すると魔法陣が浮かび上がり、火の矢が魔法陣から俺に目がけて飛んできた。

　この魔法はファイヤーアローという初級魔法である。初級魔法の便利なところは今みたいに呪文を唱えることなく発動できる点にあり、そして初級魔法とは言っても人に当たれば十分にダメージを与えることができる。

　避けれる距離だったので、俺はその攻撃を危なげなく避ける。相手の方を見ると続け様に魔法陣が浮かんでいた。またファイヤーアローが飛んでくるのかと思ったら、今度はウィンドアローが飛んできた。ウィンドアローはファイヤーアローよりもスピードが速い初級魔法だ。ファイヤーアローが飛んでくると油断していた俺は、ウィンドアローを避けきれずに右腕に掠ってしまう。

　またリーダーの方を向くと魔法陣が浮かび上がっていた。今度はウィンドアローでも避けれるように十分な距離をとる。その行動を見たドランは魔法陣を解除した。

「勝つ気はあんのか？」

「勝つ気？あるに決まってるだろ。報酬が欲しいからな」

「ならいいが。こっちに向かってくる気配がねぇからな。お前魔法が使えないんだろ？距離をとって一体どんな攻撃を仕掛けてくんだよ？」

「……今は様子見しているだけだ」

　相手の言い分が正しいので、ちょっとだけ言葉を考えてしまった。しかし、ウィンドアローがあるのは面倒だ。相手に近づくたびにそのことを考えさせられてしまう。人と戦う時に最も厄介な初級魔法はウィンドアローだ。何が厄介かというと攻撃のスピードが速いと言う点だ。こと魔物戦においては魔物の皮膚は硬いので、ウィンドアローの攻撃はほとんど魔物には効かない。しかし、人間の皮膚は魔物よりも脆いので、十分にダメージを与えることができる。

「距離をとったことを後悔しないといいがなぁ」

　ドランは何やらぶつぶつ言い始めた。喋っている速度が早くて、何を言っているのか聞き取りにくいが、間違いなく魔法の詠唱である。

　これは高速詠唱と呼ばれる技で、魔法の呪文速度を上げている。普通に魔法の呪文を唱えるよりも高速詠唱を使用すると10倍の速度で唱え終えることができる。

　中級呪文は数十秒から数分かかるものが多い。だが、高速詠唱を唱えることで数十秒、物によっては数秒で唱え終えることができる。

　ドランとの距離は少し離れたと言っても数秒で攻撃できる距離にいる。俺は迷わず、呪文を唱えているドランに向かって走り出した。しかし、そんな俺の行動を読んでいるのか、ドランは笑みを浮かべていた。突然、呪文を唱えているドランの前方に魔法陣が浮かび上がる。その魔法陣から飛び出してきたのは、サンダーアローだった。

「くっ」

　ドランとの距離はファイヤーアローを撃たれた時と同じくらいにいた。俺は進行方向を変えることができずにそのサンダーアローをまともに受けてしまった。サンダーアローはファイヤーアローよりも速度があり、ウィンドアローよりも少し遅い。まともにサンダーアローを受けてしまったが、ダメージはそこまでない。ただ、体が痺れてしまい片膝をついてしまう。そのせいでドランとの距離を詰めることができない。

　今のは同時並行処理。高速詠唱と同じで高度な技である。Aランクだけあって、いろいろな技や呪文を覚えているようだ。そんなことを考えていると数秒がたち、痺れが取れていた。俺は立ち上がるが、ドランの前にはもう魔法陣が出来上がっていた。

「ちっ」

　俺はその様子を見て舌打ちをし、念のため後ろに数歩下がる。そんな俺の様子を見たドランは笑みを浮かべる。

「今頃後ろに下がっても無駄だ。魔法陣はとっくに完成している。さっきのサンダーアローは大したことねぇ魔法だが、この魔法は耐えられっか？」

　魔法陣からは、電撃の槍が飛び出してきた。先ほどのサンダーアローとは同じ様な魔法ではある。その電撃の槍が俺の前に突っ込んでっくる。サンダーアローよりは少し速いくらいだが、距離をとっていたためギリギリ避けられる。

しかし、地面に刺さった電撃の槍はバリバリと消えることなく電流を蓄えている。ピカっと光ったかと思うと、放電するように電気が円形の形で広がっていた。

　電撃の槍を放ったドランの視界は砂埃であかがどうなっているのかわからない。

　手応え的には間違いなく当たったと思っている。しかし、ドランは油断なく砂埃、そしてその周りを見ている。仮にも相手はSランクである。Sランクが中級魔法を直撃したからといって、やられるとは思えない。とはいえ、サンダーアローは間違いなく痺れさせていたので、多少のダメージは期待できる。

　そんなことをドランが考えていると砂埃が少なくなってきて人影が見えてくる。

　どうやら、電撃の槍を直撃した仮面の戦士はダメージは分からないが立っているようである。サンダーアローを直撃した時は、数秒とはいえ片膝をついていたのにそれより威力のある電撃の槍を直撃したのに立っているのは不思議であるとドランは思った。

　砂埃が晴れ、仮面の戦士を見ると無傷の状態で立っていた。仮面の戦士の身体からは白いオーラのようなものが纏っていた。

「馬鹿な？！」

　ドランは驚きの声を上げた。

　電撃の槍には驚いた。電撃の槍が魔法陣から飛び出して来た時には、サンダーアローのような魔法だと思っていたが、まさか範囲魔法だったとは。通常の状態で直撃していたら結構なダメージを受けていたと思う。

　俺は電撃の槍が地面に突き刺さっているのに放電が続いているのを見て、何かヤバそうだと思ったので纏を展開した。纏とは身体能力を数倍に膨れ上がらせることができる魔力があれば誰にでも使用することができる大変便利な技である。メタルスライムを倒した際にも使用したが、この技は魔法にも耐性がある。

　なので、電撃の槍の魔法は大したダメージにはならなかったのだ。

「まさか、纏を使って防いでくるとは思わなかったぜ」

　ドランは憐憫の目を俺に向けてくる。

　ドランが憐憫の目を向けて来たのにはもちろん理由がある。纏という技は確かに使用者の身体能力を上げ、魔法にも耐性がつく。こんなに便利な能力をしており、誰もが練習すれば使えることができるのだが、大きな欠点が1つある。

　その欠点とは魔力の消費量があまりにも多いという点だ。通常の魔法使いが纏を使用できる時間は5分くらいと言われている。5分経過すると、通常の魔法使いの魔力量だと枯渇してしまう。

　今回の時の対決の時のような1対1の戦いで終わるのなら、纏はかなり良い一手と言える。しかし、1対1の戦いで終わることなどない。忘れられたダンジョンの攻略が良い例だ。5分で魔力が枯渇してしまっては、攻略にならない。だから、纏は使用されない。そういった理由があって、ドランは俺に憐憫の目を向けてきたのだ。

「第2ラウンドと行こうか」

　俺はそんなことはお構いなしに堂々とそう告げた。

　様子見をせずに真っ直ぐに突っ込む。ドランは魔法陣を出すが、遅い。俺はドランの顔面を右手で殴る。

「がっ」

　殴られたドランは数メートルの距離を吹っ飛んだ。これで終わりだと思ったが、ドランは数秒足らずで立ち上がってきた。

「ってぇな！」

　ドランは右手で口から出た血を拭っている。

「流石はSランクと言いたいところだが、どれだけの時間纏を維持できるんだ？」

　ドランは余裕を取り戻してきたのか笑みを浮かべた。この状況で笑みを浮かべる理由が俺にはわからなかった。しかし、次の瞬間俺の足元に魔法陣が浮かび上がった。そしてその魔法陣から結界が発動した。俺は、その結界に閉じ込められてしまった。

「この結界が何だって言うんだ？」

　俺はそうドランに問いかけた。

「お前の纏が時間切れになるまでそこに閉じ込めてやろうとしたんだよ」

「なるほどな。しかし、これだとお前からも攻撃はできないんじゃ、って危な？！」

　喋っている俺に突然後ろからファイヤーアローが飛んできた。

「ちっ、外したか。当然閉じ込めるだけでテメェの纏の時間切れを狙っているわけじゃねぇ。その結界の中は常にファイヤーアローが飛んでくる」

　ファイヤーアローが俺の斜めから飛んできたが、俺は左手でそれを弾いた。

「ふんっ、魔法を片手で弾くか。やるな」

　リーダーは感心したように俺に言う。

「だが、いつまで続くか見ものだな」

　そのセリフを聞いた俺は、まぁ根比べでもしようかなとそう意地悪な気持ちになった。

　約30分くらい俺は、結界の中でファイヤーアローを捌いていた。

　時間切れなのかわからないが、結界が突然消え去った。

「いつまで纏いを発動してんだよ！？」

　そう言ったリーダーの前から巨大な魔法陣が浮かび上がった。どうやら俺が遊んでいた時間に上級魔法の呪文を唱えていたらしい。

　そして、その巨大な魔法陣が浮かび上がったと同時に俺の背後にもいくつもの魔法陣が浮かび上がる。その魔法陣から飛び出してきたのは結界だ。しかし、先ほどの円形の形の結界とは違い、今度は壁の形となっている。

「これで結界の破壊は気をしないで済むぜ。喰らいやがれ。雷撃砲！！」

　魔法陣からは巨大な円状の雷の魔法が俺に向かって突っ込んでくる。スピードも電撃の槍よりもさらに速い。

　俺はその攻撃を避けようとはせずに、真正面から立ち向かう。正直に言うなら、纏の状態なので避けるのは簡単だ。しかし、それで勝っても相手は納得しないのかもしれない。喧嘩を買ったときに、AランクとSランクとの差をわからせた上で勝つと心の奥で決めていた。

　そう考えたため、俺は真っ向から雷撃砲に立ち向かうことを決めた。俺は右腕に力を込めた。身体は纏の影響で白いオーラみたいなもので包まれているが、力を込めたことにより、右腕は白いオーラの様なものが一層強く輝きを放つ。そして、そのオーラは白いオーラから銀色のオーラへと変化する。

「どうした、逃げねぇのか？！S級さんよ？！」

　ドランは雷撃砲を俺が避けると思っていたのかそんなことを言ってくる。

「ああ、避けねぇよ」

　俺は小声でそう答えた。そして、目の前まで迫ってきた雷撃砲を銀色に包まれた右腕で殴りつけた。

　ぶつかりあう、雷撃砲と右拳。技と技がぶつかりあったことで互いに一瞬だが硬直する。一瞬ではあるが、拮抗したかに思われた両者の技は、しかし、カルクが技名を呼んだときと同時に決着がついた。

「崩拳！！」

　そうカルクが叫ぶと、雷撃砲は霧散した。

「……有りえねぇ」

　ドランは今見ている光景が信じられないのかそう呟いた。実際にドランは、雷撃砲を放っているので何が起きたのかは本来見えていない。しかし、何が起きたのか見ていなくとも何が起きたのかを予測することはできる。だが、あまりにも予測した内容が馬鹿馬鹿しい。しかし、それ以外には考えられない。

　なぜなら、俺とお前では力の差があると言わんばかりに、あかはそれをドランに見せびらかしている。そうあかは雷撃砲が霧散しても膝を曲げ右拳が突き出したような正拳突きの構えの状態で立っている。

　その光景にドランは怒りを示した。

「ざけんな！！」

　激昂したドランは、俺が使ったときには憐憫の目を向けていたはずなのだが、なりふり構っていられないのか纏を発動していた。そして、纏を発動した状態で俺に突っ込んでくる。右手の拳で思いっきり殴り込んでくるが、俺は冷静にその拳を受け止める。

「何だよ？テメェは？もう時間が切れてもいい頃合いだろ？！」

　そう叫びながらドランは俺にがむしゃらに攻撃してくる。

「彼、負けたわね」

　纏を発動したドランの様子を見て、トミは誰とも言わずにそう呟いた。

「なんであんたにそんなことわかるわけ？」

　そう言ったのは、ドランの仲間である女だった。

「何でって、最初は戦術を使用して、あかを翻弄していたのに今では、その戦術を考えることもなく真っ直ぐに突っ込んでいる。どう見ても彼の負けよ」

　トミは女からの質問を面倒臭そうにそう答えた。

　女はトミの言ったことに不服なのか、反論をし始めた。

「確かにドランは冷静ではないのかもしれない。けどね、あなたのお仲間のあの仮面の戦士はどうなの？もう30分以上は纏を続けているのよ？普通の魔法使いの魔力で、纏は5分使っているのがやっとと言われているのよ？そろそろ魔力が枯渇するんじゃないかしら。そうなれば纏を発動してるドランの勝ちよ」

　自分で言っていることに納得をしたのか、女は冷静さを取り戻してきた。

「あなた達のリーダーはどれくらい纏を維持できるの？」

「僕たちのリーダーは普通の魔法使いよりも5〜6倍の魔力があると言われています。多少上級魔法などを使っているので魔力を減らしていると思いますが、それでもどれも完全詠唱した魔法で発動しているので魔力の燃費も悪くありません。そのため30分は纏の状態を維持できるでしょう」

　トミの質問には、ドランの仲間の男の方が答えた。

「ふーん、30分ね。あなたたちのリーダーはAランクだけあって結構魔力あるんだね」

　そのトミの言葉を聞いた女は、30分も纏を保つことができると捉えたのかわからないが、勝ち誇ったように言った。

「どうやら、そろそろあなたのお仲間の纏は切れるようね。でしたら、私たちのリーダーの勝ちですよ」

　女の言葉にトミが首を傾げる。

「私がいつ、あかの纏が切れそうだなんて言ったの？」

「……だって、あなた驚いていたじゃない。私たちのリーダーが30分も纏を使用できることに」

「そうね。けど、普通の魔法使いより5倍以上も魔力量があれば感心しても不思議ではないでしょう？」

　そのトミの言葉に先に反応したのは、ドランの仲間の男の方だった。

「不思議ではないですが、ではどうしてそんなに落ち着いているのですか？」

　冷静そうに見える男ではあったが、その実焦っている。なぜなら、確信をついた言葉をわかっているのに聞こうとしないからだ。女の方もそうである。あることを質問すればトミの余裕がわかる。しかし、それを聞くことができない。なぜなら、それを聞いてしまえば、もし悪い予感が当たってしまったら、ドランは確実に負けると思っているからだ。

　それを察したトミは意地悪い笑みを浮かべながら、2人に質問した。

「どうして、あかの魔力量について2人は聞かないのかしら？」

　トミがそう聞いても、2人は沈黙したままである。仕方なくトミは答えてあげる。そして2人は知ることになる。どうして仮面の戦士がS級と呼ばれているのか。

「彼の魔力量は正確には測れていないけど、普通の魔法使いの300倍以上よ」

　ドランは息を切らしながら、俺に攻撃を仕掛ける。そして、俺はその攻撃を捌くといった単調のやりとりが行われていた。

　しかし、時間が経過するごとに明らかに、ドランは疲弊していった。そしてついに攻撃する手をとめ、俺との距離が少し離れる。

「もう、降参した方がいいんじゃないか？」

　俺はそうドランに問いかけた。

「うるせぇ。誰が降参するかよ」

　ドランは俺の言うことに聞く耳を持たずにそう言った。

　はっきりとした実力差を見せつけたにもかかわらず、ドランは諦める気配を見せない。そのドランの姿に嬉しく思ったのか、俺は自分が知らないうちに笑っていた。

「何笑ってんだよ？」

　俺が笑っていたことに不服だったのか、ドランがイラついたようにそう俺に向かって言った。

「笑っていたのか。俺は。……だとしたら、嬉しかったのかもしれないな」

「何が嬉しいんだ？」

「これだけの実力を見せても諦めずに立ち向かっているあんたを見てな」

「馬鹿にしてんのか？」

「いや、尊敬している」

「ムカつく野郎だな」

「かもな。だが、あんたのその諦めない態度に敬意を評して、しっかりノックダウンで勝ってやるよ」

　俺はそう言い、一瞬でドランの目の前までやってきた。その俺のスピードにドランは反応できなかった。

　そして、反応し切れなかったドランのお腹に俺は思いっきり右拳を殴りつけた。右拳での攻撃は雷撃砲を破壊した崩拳を発動しなかった。しかし、まともにその攻撃を受けたドランはそのまま前に倒れ伏した。

「そこまで！この勝負アカの勝利で決着だ！！」

　ドランが倒れ伏した様子を見て、ロッジがそう言った。

「今日は誰かさんのせいでもうダンジョンには行けないわね」

　トミは恨めしそうに、俺に向かってそう言った。

「おいおい、そのことはこれから食べる晩御飯のステーキ定食を俺が奢ることでチャラになっただろう？」

　俺がそういうとトミは勝ち誇ったかのように言った。

「まだ料理は届いていないので、文句は言う資格は私にはある」

　横暴だと言ったら、トミの気分が悪くなってしまうかもしれないので黙っている。それにトミも恨めしそうに言ったものの、どこか雰囲気は食事への期待で楽しそうである。

　今日はダンジョンにあんまり潜れなかったし、余計な出費はしたしで、災難だなとちょっと思った。そんなことを考えていると、料理がやってきた。

　トミはやってきたステーキ定食に目を輝かせ、いただきますと言い、早速齧り付いた。

「おいしい」

　そう呟いたトミは後は無心で料理に集中していた。俺もトミと同じステーキ定食を食べようと思ったが、ステーキ定食はここではかなり高価な食べ物なのか、それなりの値段がしていた。さらにトミは高価なデザートも注文していたので俺は泣く泣く、この料亭のそれなりの人気メニューであるスープとパンの料理で我慢をした。

「ごちそうさまでした」

　料理を食べ終えたトミは満足そうに言った。

「満足いただけたようでよかったよ」

「ええ。これで私も文句はないわ」

　トミは笑顔でそう言った。

　ところで、なぜドランとの戦いが終わって、ダンジョンに潜らなかったのかというと、俺に負けたドランが心配だったからだ。

　それで目が覚めるまで、一応待とうとトミに言ったら「わかったわ」と納得してくれ、この忘れられた村を見て時間を潰すことにした。

　しかし、数時間経ってもドランは目を覚まさない。何で？と思って、そのドランの怪我の治療をしていた医者に聞くと「どうやら魔力が枯渇したことにより、目を覚ますのが遅くなっているのでしょう。命には問題はありませんので心配しなくてもいいですよ」と答えてくれた。

「ちなみに、いつごろ目を覚ますのでしょうか？」

「明日には目を覚ますでしょう」

　そう医者が言うと、トミは不機嫌になったような気がした。目の前に医者がいる手前、顔には出ていないが明らかに俺の目から見ては不機嫌になっている。俺も表面ではドランが無事であると安堵したように医者と話しているが、その内面ではこの後どうしようと嘆いていた。

　そして、医者との会話が終わって、トミと2人になった後に「どうやら、彼、目を覚ますのは明日らしいね？」と言った。

「そうですね」と俺は生返事を返すことしかできない。

「まぁ、目を覚ますまで待とうって決めたことだらかいいけど、そうね。今日の晩御飯奢ってもらおうかしら？」

「喜んで奢らせていただきます！」

　反論してトミの機嫌が悪くなると後あと面倒なので俺はトミの言うことを聞くことにした。

　そういう理由でトミに晩御飯を奢ったのだった。思ったよりもステーキ定食の値段が高かったのが、俺の懐には痛かったのだが。

　とりあえず夜も更け始めたので、俺たちは宿をとり1日、その宿でゆっくり休んだ。

　翌日になると俺とトミは早速病院に向かった。病室にはドランの仲間の2人がきていた。

「おう、悪いな。俺のせいであんたたちを引き止めちまって」

　目覚めていたドランはベッドに座った状態で病室に入り込んだ俺たちにそう言った。その言葉には俺たちの敵意は無くなっている。

「気にするな。元気になってよかったよ」

　とりあえず俺は当たり障りなくそう答えた。

「イリスから聞いたぜ。あんたの魔力は通常の魔法使いの300倍以上はあるそうだな」

　俺はその言葉を聞いてトミの方に振り向いた。トミは俺に振り向いたことには気にせず、正面を向いていた。おい、こっち向けと思ったのは内緒である。

「はぁ」

　俺は溜息をついた。まぁ、別に隠していたわけではないのでドランが言ったことを認めるように頷いた。

「なるほど。Sランクと言われるだけはあるぜ。リッカ、ルービオン、2人は少々席を外してくれるか。後、あんたの仲間のむらさきも」

　ドランがそう言うと、二人は病室から出ていった。

　後からトミに聞いた話だが、ドランの仲間の女の方がリッカ・トハントといい、男の方がルービオン・カムーアという。

　トミも何かを察したのか「宿屋でダンジョンに行く準備をして待っているわ」と病室を出ていった。

　病室が俺とドランの二人だけになると、ドランは突然頭を下げてきた。

「すまんかった。今まで散々あんたの悪口を言っちまって」

　正直、謝られるとは思わなかったので俺は驚いた。

「あ、ああ、別に気にするな」

「いや、S級にむかついていたとは言えあれは言い過ぎだった。それにさっき言った、Sランクと言われるだけあると言ったのも撤回させてほしい」

謝られる内容にも俺は驚いた。どうやらこのドランは思っていた以上に頭が回るらしい。

「何で撤回したいんだ？正直そのセリフは褒め言葉だと思うんだが」

　とりあえず、俺はそう返事をした。だが、ドランは撤回をするつもりはないらしく、口を開いた。

「あんたが通常の魔法使いよりも300倍以上もあるというのはさっき聞いて知った。だが、俺はそれよりも前に、あんたが魔法を使うことはできないと言うことをあんた自身の口から聞いた」

「……そうだな」

「あんたの事情について聞こうとは思わない。ただ、済まなかった」

　そう言い、ドランは座りながらも深く頭を下げた。他人からそんな気遣いを受けるとは思わなかったので、どう受け答えしようか迷った。

「……気にするな。慣れている」

絞り出したのが、そんな答えだった。相変わらず、こう言うことに関しては愛想がないなと思ってしまう。その俺の言葉でドランは満足したのか、顔をあげ「ありがとな」と言った。

「どういたしまして」

　自然と俺の口からそんな言葉がこぼれ落ちた。

「これでケジメはつけたぜ」

　そう言うと、ドランは深呼吸した。

「……また、そうだな、今よりももっと強くなった時、俺と戦ってくれねぇか？」

「……あれだけ、実力差を見せつけたのに、俺に挑みたいのか？」

「ちっ、そういうところはむかつくな。まぁあんたとの実力差があるのは本当のことだからいいがな。だが、いつまでも俺は今のままの俺じゃねぇ。俺はいずれあんたを超える」

　その声は決意がこもっているように聞こえた。

　Aランク以下の冒険者がSランクの冒険者と個人戦をした場合は、大体はその実力差に絶望する。Sランクの強さは固有の能力なので、努力がどうこうでは絶対に追いつけないと戦ったものは悟ってしまうからだ。

　しかし、このドランは少数の方に当てはまったようだ。ちなみに俺は少数側のやつと会ったのは初めてのことだ。

「あんたなら、Sランクになれると思うぜ。まぁ、俺を越えられるかはわからないがな」

「はっ、いいねぇ。目標は高いほど燃えるからなぁ」

そう言いドランは不敵な笑みを浮かべた。

「ま、楽しみにしているよ」

俺はそういい病室を出た。

聖暦2502年1月20日

　今日は、忘れられた都市に来てから5日目の朝が来ていた。

　俺とトミはこの5日間、同じ宿に泊まっている。ダンジョン攻略はどうしたって？もちろん最初の1日以外はしている。しかし、第1層から第2層に進むことはできていないので、宿屋に戻っているのだ。まぁこれはこれでゆっくりベッドで休めるから、悪くはない。ちなみに俺と戦ったドランだが、昨日にこの忘れられた村から出て行ったようだ。傷も完治したとのことなので、まぁ心配はないだろう。

　宿屋の窓から外を見ると、雨が降っていた。雨の日はどこか憂鬱な気分になってしまう。ダンジョンは基本的に屋内にあるので雨の影響は受けないのだが、気分的な問題だ。着替えを済ませて部屋を出るとトミが既に準備をして待っていた。

「「おはよう」」

　俺たちは挨拶を交わし、ダンジョンへと向かった。

　この5日間と同じように第1層を探索しているとすぐに第2層へと降りる階段を見つけた。また第2層では数時間ほどで第3層へと降りる階段を見つけた。

　魔物との戦闘は数回しか行っていない。リセットする時間も来ずに、2層も進むことができるのは本来ならあり得ないペースである。

「今日は運がいいわね」

　そう言ってトミは喜んだ。

「ちょっと出来過ぎではあるがな」と言いつつも内心俺も喜んでいる。

　それから数時間ほど、第3層を探索していると突然トミが慌てたように声をかけてきた。

「ちょっと待って」

　トミが言ったように、俺は立ち止まって周りを警戒した。トミが突然このようなことを言い出すのはいつも決まって、何か異変があった時だ。

　しかし、特に何も見当たらないし、不審な音も聞こえない。とりあえず、異変は俺たちの近くではないことはわかった。

「何か感じ取ったのか？」

「ええ、今まで感じたことのない魔力の感じをね」

　その言葉に、トミが異変に気づいて、俺が異変に気づかないことを察した。

　俺は、自分の魔力を使用した魔法を使うことはできない。これは理由がわからないのでいつからかそのことについて考えることはしなくなった。何が言いたいのかというと、魔力を感知するには自分の魔力を使用した感知魔法を使う必要がある。つまり、魔法が使えない俺には感知魔法を使用することができない。ただ俺も直接目で見たら、何か異変があるのだと気付けるが、視覚に入らない場所だと異変に気づくことができない。

「どれくらい距離がある？」

「数百メートルは離れていると思う」

「今まで感じたことのない魔力か。それは気になるな」

　そう言った俺はニヤっと笑い、トミの方を向く。俺の顔を見たトミは「はぁ」と溜息をつくが、俺と同じように笑みを浮かべていた。

「その異変を感じ取った場所に行ってみようか」

「ええ」

　そして、俺たちは異変を感じた場所に向かった。念のため、気配を消す技を使用して。

　その場所に着くと、怪しいフードを被った2人がいる。俺たちも仮面をつけているので怪しいと言えば怪しいと思いつつも、フードを被った者たちに見つからないように、物陰に隠れる。フードの隙間から顔が見えないかどうか見てみるが、よく見えない。恐らく何か魔法を使って顔を見えないようにしているのだろう。だから、そのフードを被っているものが人かどうかも俺には判別できない。

　よく見てみるとその2人の奥に何かふわふわと浮いた人間ではないが、人間に似ている何かがいる。初めは魔物かと思ったが、何となく魔物には見えない。まぁ、これは勘だが。その何かはフードを被った2人と仲間のように接しているので、仲間なのだろう。

「トミ、あの奥にいるやつはなんだ？魔物ではないよな？」

　俺は自分じゃわからないのでトミに聞いてみた。

「ええ、多分だけど精霊だと思う。魔物のような邪悪な感じはないしね」

「精霊！？まじか」

　精霊と言う単語を聞いて俺は驚いた。なぜなら俺はこれまでに精霊を見たことがなかったからだ。それに、このアスカ大陸には精霊使いはいなかったはずだ。俺が記憶している分にはだが。そして、精霊と仲良くなるためには精霊使いの能力がなければならない。精霊使いの能力は俺の巨大な魔力量と同じように、冒険者ならSランクに分類される能力の一つだ。固有ではない能力だが、使用者によって使役する精霊は違ってくるのでほとんど固有能力みたいなものである。

「精霊と仲良くしているってことは、あの2人のどちらかは精霊使いになるよな？」

「そう言うことになるわね」

　ということは、あの2人はアスカ大陸の人ではなく、別の大陸から来た人物の可能性が高い。俺はアリア帝国が流していたラジオ放送のことを思い出す。

「あの2人は」

「ええ。そうね。カーム大陸から来た帝国の侵略者の可能性が高いわね」

　トミも俺と同じ考えだったのか、俺が言うよりも早く言ってくる。

「とりあえず、憶測だけで話していても仕方ないから、あの2人に直接聞いてみるか」

「そうね」

　そう話していると、精霊の前から魔法陣が浮かび上がる。そしてその魔法陣の目標は明らかに、俺たちの物陰の方に向いている。

　魔法陣からは風の魔法が飛んできた。不意をつかれた俺たちはその攻撃が範囲魔法の場合、避けることができない。相手が不意をついてきた状況を察するに、範囲魔法の可能性が高い。そう判断した俺は、トミの前に出て纏を使用した。トミも避けることができないと判断したのか、纏を使用していた。

　そしてその飛んできた風の魔法は俺たちの目の前までくると、突然円形に広がった。その円形の中に俺とトミは入る形となった。その円形の中ではかまいたちのように、無数に風の刃が飛んでいる。10秒ほどで、その魔法は終わる。俺とトミは纏を使用していたが、その魔法が強力だったのか、切り傷を何箇所か受けてしまっていた。

　とりあえず、受けたダメージを気にするよりも次相手が何をしてくるのか警戒しようと前を向いたら、そこには誰もいなかった。

「逃げたみたいね」

「さっきの風魔法は攻撃と同時に目眩しもかねていたわけか」

　その俺の言葉にトミは返事をしない。気になった俺はトミの方をみると目を瞑って何やら集中している。

「強力だけど、逃げるのは雑みたいね。私の探知魔法で十分捕捉できたわ」

　トミはそう言い走り出した。探知魔法ってのは便利だなと思いながら俺は走り出したトミの後をついて行く。フードを被った謎の人物2名を追いかけること数分が経過したがなかなか追いつけない。多分だが、こちらが追いかけていることを相手側も探知魔法で捕捉しているのだろう。

「ムカつくわね」

　そう言いトミは少しイラついている。しかし、次の瞬間トミは急に走っていた足を止めた。何も言わずにトミが止まったので後ろを走っていた俺は、トミにぶつかりそうになる。済んでのところで、俺は右斜めにジャンプしてぶつかるのを回避する。受け身を取るために地面に転がる羽目になったが、まぁぶつかって文句言われるよりはマシだろうと自分を納得させる。

「何を遊んでいるの？」

　自問自答していたときにトミが不思議そうに俺に問いかけてきた。

「遊んでいるわけではないのだがな。ところでなぜ急に足を止めたんだ。もしかしてさっきの2人はこのあたりで隠れていたりするのか？」

「いいえ、違うわ」

「では何故？」

「多分だけど、あの2人は私たちをこの場所に誘導したみたい」

「誘導？」

「ええ、そっちから多分この第3層のボスがくるよ」

　そう言いトミはボスがくるであろう方向を指差した。俺もそちらの方に顔を向けると、確かに何かが走っている音が聞こえてくる。その何かが近づいてくるにつれて走っていたと思われる音は凄まじく大きくなってきており、地震か何かが起きているのかと錯覚させるような音を響かしていた。

　そして、その走ってきたものはトミが言った通り、この3層のボスの機械騎士サイカであった。

　サイカの大きさは10mあり、機械仕掛けの体をしている。手は4本あり、その4本ともに大きな剣を持っている。

「この層のボスが現れたけど、どうする？」

　状況を整理するためか、トミは俺にそう問いかけてくる。迷わずに俺は答えた。

「さっきの2人組が帝国の関係者かどうかわからないが、今は追えないな。そんなことをしたら、このボスに殺されるかもしれないだろ？」

「了解。じゃあ、まずはこいつを倒すのを優先するわね」

　そう言いトミと俺は臨戦体制に入った。俺はボス相手なので出し惜しみせずに纏を発動した。

　サイカは4本あるうちの2本の剣で俺とトミ両方に攻撃してくる。縦に切りつけてきたので俺とトミは難なく横に避けてその攻撃を回避する。

　そして俺はサイカに向かって走り出した。サイカが俺に向かってさっき切り付けてきた別の手で剣を振ってくる。今度は横払いで剣を振ってきたので、俺は高くジャンプして避ける。しかし、サイカはそれを読んでいたのか最後に残った1本の手で俺に切りつけようとしてくる。

　1対1ならやばいかったかもしれない攻撃だが、今このボスとは俺とトミの2人で戦っている。

　“ガキーン“と鉄と鉄が触れ合った音が俺の耳に響く。サイカが俺に向かって振り下ろした剣は俺に届くことなく、トミの固有能力の鎖によって弾かれていた。

「相変わらず、強烈なチェーンだな」

　俺はそういい、トミの方を振り向く。トミはクリスタルロッドからチェーンを出しているが、本来チェーンは普通に空間から出すことができる。なんで武器からチェーンを出すんだと前に聞いたことがあったが「持っている武器から技を出すのが癖になっているのよね」とトミは答えていた。

　トミのチェーンは中距離武器としてかなり強力である。10mもあるサイカの振り上げた剣の威力を相殺しているところから見るにその威力は窺い知れる。

　俺はトミの援護も受け、無防備となったサイカとの距離を詰める。距離を詰める際に俺は右拳に力を集中した。距離を詰めた俺はサイカのお腹のところまでジャンプした。俺はサイカの状態に少し違和感を感じたが、そのまま崩拳をサイカにくらわした。崩拳をまともに食らったサイカは後方に数メートル吹っ飛んだ。

　吹っ飛んで倒れたサイカは体の表面上だけみるとダメージを受けているようには見えない。しかし、倒れているサイカは起き上がる気配がない。なぜなら、サイカは俺の崩拳の一撃によって倒されてしまっているからだ。

　サイカの弱点は5mくらいの高さのところにあるお腹の内側にあるコアである。このコアを破壊するとサイカは機能停止となる。本来このコアを破壊するためにはいくつかの手順を踏まえなければいけない。

　しかし、俺の崩拳はその手順を全て無視することができる。俺の崩拳は触れた相手の内部に衝撃をもたらし、内側から相手を破壊する。サイカのコアがお腹の内側にあるなら、そのコアがあるお腹に向かって崩拳を繰り出すことで内部に衝撃をもたらし、コアを破壊することができたと言うことだ。

「何が、“相変わらず、強力なチェーンだな”よ。あなたの崩拳の方がよっぽど強力じゃない」

　そう言いながらトミは俺に近づいてきた。俺はトミの言葉を無視するように、トミに呼びかけた。

「なぁ」

「何？」

「サイカ何だが、俺たちと戦う前にも他の誰かと戦っていたと思う」

「何でそう思うの？」

「さっきのサイカの体なんだが、何かで引っ掻いたような跡がいくつもついていた。そうまるで、俺たちが受けたあの風魔法のようにな」

　それを聞いたトミは驚いた表情を浮かべた。しかし、どこか合点がいったように「ああ」と頷くように言った。

「2人組はサイカと戦って離脱していたから、その位置を把握していて私たちにサイカを誘導することができたと言うことね」

「……多分な」

　俺はそこまでは考えていなかったので、なるほどなと思いながら表面では知ったかぶりをしておいた。

「けど、あの2人少なくともうち1人は精霊を扱えるのに、サイカとの戦いで離脱するなんて不自然じゃない？」

「それは、おそらくサイカの状態を見るに、倒し方を知らなかったんだろう」

「なるほど。サイカは手順が多いボスだものね。あなたみたいな例外的な倒し方もあるけど、基本的には正攻法で倒すのが基本の相手。初めてこのダンジョンに来たのなら知らなくても当然だわ」

　あの2人組の素性について俺は考えるが、大した情報は得られていないのですぐに諦める。

「どうする？あのフードの2人組についてギルドに報告しにダンジョンの外に行くか？」

　そう言うとトミは明らかに嫌そうな表情を浮かべながら口を開いた。

「ええ？！せっかく第3層のボスを倒したと言うのに外に出ちゃうの？ボスを倒したから次の4層に行けるのに？」

　そう言われ俺も外に出るか悩んだ。そして悩んだ結果「ギルドに報告するのは3日後でいいか」という結論に至った。

「そうでなくちゃ」

　そう言ったトミは満面の笑みを浮かべていた。

　そして、ちゃっかりと俺とトミはこの3層のボスのサイカから入手できる貴重な魔力回復薬を持参の瓶に入れてから、第4層に移動した。

　それから、3日が経過し俺とトミは忘れられた都市の近くの忘れられた村のギルドに2人組のことを報告するためにやってきていた。報告を聞いているのはロッジである。どうやらドランのパーティは俺との戦闘の怪我が治ってから別の街に行ったのか、今は護衛の仕事ではなく、ギルドの手伝いをしているようだ。

「それで、忘れられた都市で怪しい2人組を見たのは本当なのか？」

「ああ」

　俺はそう頷き、トミも縦に首を縦に振って肯定している。ロッジは眉を顰める。

「3日前に見かけたんだろ？けど、こっちでは見てないんだよな」

「怪しい2人組の特徴はわからなかったけど、1人の使ってた能力なら、精霊を使役していた」

「精霊使いだと？！」

　俺が精霊を使役していたと伝えると明らかにロッジは狼狽していた。

「ええ。精霊使いはカーム大陸にいるのを聞いたことがないから、外国から来たんだと思う」

「そして、この時期にお忍びで外国から来たとなると、アリア帝国の可能性が高いと思う」

　俺はトミの言葉に続くようにそういった。

「可能性は高いな。もし、そうだとしたら精霊使いのもう片方は隠蔽魔法の使い手かもしれないな」

「なぜだ？」

「見張りの俺たちに気づかれることもなく、忘れられた都市に入ることができたんだ。そう思うのは当然だろ？」

「なるほどな、けど」

そういい、俺はトミの方を見る。

「ええ、多分違うわね。もちろん隠蔽魔法も使っていたと思うけど、ダンジョンでは私の探知魔法で捕捉することができたわ。けど、捕捉することはできてもその後全然追いつくことができなかったわ。後、そうね、私たちが気配を消して近づいてもあの2人は迷いなく私たちの隠れているところを正確に風魔法で狙ってきたわ。このことからわかることはもう1人は探知魔法の使い手だと思う」

「なるほどな。と言うことは探知魔法を使用して、俺たちがダンジョンの監視の目を一瞬離した隙をついて、ダンジョン内に入ったってことか」

　トミの説明に納得したようにロッジは頷いた。

　その後も俺たち３人は話し合うが、怪しい2人組についてわかることはこれ以上なかった。

「とにかく報告ありがとな。俺の方でギルドに報告しておく」

「ああ、頼んだ。俺たちは帰るとするよ」

　そういい俺とトミは、ワープポータルを使用してトロン王国のギルドに帰った。

　ギルドに帰り、集めた素材でいらないものはギルドに売った。銀貨30枚をもらうことができた。そして、俺たちは情報屋のオリの元に向かった。

「今日も素材が大量だね」

「何か、強化できることがあったら教えてくれ」

「任せておいてくれ。まぁ時間はかかるがな。とりあえず、こいつを受け取ってくれ」

　オリはそういい俺に金貨1枚をくれた。

「いいのか？！金貨1枚ももらって」

「それなりの素材だからな。1ヶ月分の部屋代も引かしてもらった値段だから気にすることはない」

「ああ、ありがとう」

　そういい、俺たちは情報屋で借りている部屋で着替えを済ませ家に帰った。

　家に帰って来た翌日、1羽の鳥が家にやってきた。その鳥には足に紙が巻き付けてあった。それを見た俺は憂鬱な表情を浮かべた。

「どうやら王国からの依頼がきたようですね」

「ああ、面倒ごとのようだ」

第2章　侵攻する帝都

聖暦2502年1月16日

　アリア帝国の第4皇子であるカイタチは、王に直談判するため、王がいる玉座の間に向かっていた。

　その途中の廊下で第3皇子であるオチャゴスと出会う。

「おいおい、これからどこに向かうんだ？」

「……玉座の間に向かっているところだ」

「お前が何のために玉座の間に行くんだよ？」

「あなたに言う必要はないだろ？」

　そうカイタチが言うと、明らかに不機嫌な顔をオチャゴスは浮かべた。

「兄に向かってその口答えはないんじゃないか？」

「……失礼しました。つい口が過ぎたようです」

　これ以上オチャゴスを怒らせると面倒ごとになると思ったのか、カイタチは謝罪した。

「で、何しに行くんだ？」

　謝ったことで多少は満足したオチャゴスだが、本題は忘れていなかった。カイタチは内心ため息を付き、話し始める。

「アスカ大陸の最初の侵攻を私に任せてもらうように、父上に話に来たんだ」

「何だと？お前がアスカ大陸に侵攻するだって？僕の方が絶対に上手くやれる！」

　オチャゴスは興奮したようにそう言った。カイタチは要件が済んだと言わんばかりに「ではこれで失礼します」といい、玉座の間に向かう。

「まだ話している途中だろ？」

　オチャゴスがしつこく追いかけてくる。しかし、カイタチは歩くのを止めない。

「しゃべる気はないってか？相変わらず生意気なやつだ。まぁいい。だが、僕も玉座の間に一緒に行くとするか」

　そう言い、オチャゴスはカイタチの前を歩き出す。

　玉座の間の部屋の前につき、オチャゴスは扉を開ける。カイタチはその後ろをついていった。

「父上、お話したいことがございます」

　部屋に入るなり、オチャゴスはそう口を開いた。

「オチャゴスとカイタチか。何の用だ？」

「世界統一に向けて最初の侵攻をどこの大陸にするか考えていると思われるのですが」

「ほう、その口ぶりだと何か考えがあるようだな。オチャゴスよ」

「はい、我らの次に強い国があると言われているアスカ大陸を侵攻するのが良いかと存じ上げます」

　オチャゴスがそういうと、アルフ王の目が少しだけ鋭くなった。

「我らの次に強い国となるとトロン王国か。それで、なぜトロン王国から侵攻するのだ？」

「はい、我らの国を除くと1番強いトロン王国の侵略に成功することで、他国の抵抗のやる気を削ぐことができ今後の侵略を楽に進めれることでしょう」

　オチャゴスの言葉にカイタチはただ後ろから見ているだけである。しかし、その目はどこか空虚である。

「ふむ、言っていることは一理あるかもしれない。では、肝心のトロン王国の侵略はどうするのだ？」

　アルフ王の目が先ほどよりさらに鋭くなった。その目は、どこかオチャゴス皇子を値踏みするかのような目である。

　しかし、オチャゴスはアルフ王のそんな目に気づいていないのか、どこか自信ありげに喋り出す。

「そんなものは簡単です。アリア帝国の兵を用いて、圧倒的戦力で叩くのです。2番目に強い国と言っても、我らが帝国と比べれば他の国など大したことありません」

「……」

　鎮まり帰る玉座の間。その空気はどこかひんやりとしていた。

　先ほどまでオチャゴスの言うことに興味を示していなかったカイタチだが、今は驚いたようにオチャゴスの方を見ている。

「オチャゴス第3皇子よ」

「よい。大臣よ」

　大臣が何かを言おうとしたが、アルフ王がそれを止めた。

「オチャゴスよ。念のため聞いておくが、兵は何人連れて行って、攻め落とすつもりなのだ？」

「はい。我ら帝国の屈強な兵なら1万もあれば容易く侵略できるでしょう」

　この言葉にはアルフ王も頭を抱えるしかなかった。

「オチャゴスよ」

「はい、父上」

　アルフ王に名前を呼ばれたオチャゴスは、自信満々に返事をした。

「流石にそれで侵攻するのは他国を舐めすぎだ。やる気は買うが、それだけではな。もう一度考え直してくるがよい」

　アルフ王にそう言われたオチャゴスは、愕然とした表情で「馬鹿な」と呟いていた。「バカはお前だろ」と内心カイタチは思った。

　オチャゴスが悔しそうに、玉座の間を後にした。カイタチの話を聞かずに出ていったのは、自分の意見が通らなかった悔しさのあまり忘れていたからだ。ただ玉座の間をでて行く際は「失礼しました」と言い丁寧に開け閉めしていた。そんな礼節を弁えられるのなら、私の話くらい聞いていけば良いのにとカイタチは内心思っていた。

「それで、カイタチは何しにこの玉座の間に来たのだ？」

　アルフ王はカイタチに問いかける。カイタチもオチャゴス同じように平然と言ってのける。

「私も侵略についての話です」

「ほう、お前もか。それでどうするのだ？」

　アルフ王は今度はカイタチを値踏みするように睨みつける。

　カイタチはその値踏みするかのような目つきに気づいていたが、特に緊張することもなく、先ほどと変わらず平然といってのける。

「はい。私も先ほどのオチャゴスの意見のようにトロン王国があるアスカ大陸の侵攻を最初にするのが良いと思われます」

「ほう。それでお前はどのように責める落とすつもりなのだ」

　カイタチはそう言われると頭を整理するために一度深呼吸をした。

「実は、トロン王国には内通者が1人おります」

　そのカイタチの言葉に、アルフ王と大臣は目を大きく開け驚いている。

「これは驚きました。いつの間に内通者を作っていたのですか。まだ世界統一を掲げてから1年しか経っていないと言うのに」

　先に口を開いたのは大臣だった。カイタチはその大臣の言葉には特に何も言わず、ただ黙っている。

「それでその内通者は何者なのだ」

　今度はアルフ王が口を開いた。

　カイタチは一瞬目を瞑り考えるような仕草をとるが、すぐに目を開く。

「それはお教えできません」

　アルフ王は怪しむようにカイタチを睨みつけた。

「それはなぜだ？」

　カイタチは国王の圧を何も感じていないかのように淡々と答える。

「内通者とは互いに秘密を明かしてはいけない契約を交わしました。私が内通者について話すことができるのはここまでです」

「カイタチ皇子よ。それでは国王様も私も納得できません。しっかりと説明をしてもらわないと」

「よい、大臣よ」

　納得いかない大臣を国王が片手を上げて制す。

「それでカイタチよ。その内通者を使ってどうするのだ？」

「まずは、敵の戦力を把握するために私自ら部下を連れてトロン王国に向かいます。敵にはなるべく気づかれないように私の部下2人と私の計3人で向かおうと思います」

「なるほど、敵の戦力を把握するために密かにトロン王国に向かう。悪い手ではないが、それは内通者に任せれば良いのではないのか？」

「内通者の言うことを全て鵜呑みにすることはできません。やはり自分の目で確かめて見ないことにはわからないこともあるでしょう。そのために私、自らが向かうのです」

「内通者の話を聞き、それが本当のことか自分の目で確かめることで内通者がこちらにつく気なのか押し測るということだな？」

　アルフ王はカイタチの考えを看破したかのようにそう質問した。その質問にカイタチは頷く。

「ならばよかろう。カイタチよ、お前にトロン王国の偵察を任せる。準備が出来次第すぐに向かうとよい」

「はっ、かしこまりました」

　そう言いカイタチは玉座の間を後にした。

　カイタチはトロン王国の侵攻の準備をするために自室の部屋にもどってきた。

「お疲れさん」

　部屋に入るとすぐに、カイタチの側近であるアクア・ソークが声をかけてきた。

「ああ」

　カイタチは淡白な反応で返事をする。

「玉座の間に向かう途中オチャゴス皇子に絡まれてましたね」

　アクアの隣にいるエル・ナーレが声をかける。

「見ていたのか？」

「ええ。たまたま通りかかりましたから。面倒そうなので隠れて見ていましたが」

「面倒だと思ったなら、隠れてないで離れればいいのに」

　アクアがそういった。

「カイタチ様がオチャゴス様に絡まれているのを見るのは面白いですから」

　カイタチの反応を見ずに、エルはそんなことを言う。

　特にカイタチはその話に興味がないのか、服を着替えている。

「お前達は、アスカ大陸に向かう準備はできているのか？」

　そのカイタチの質問に対し、アクアは自信満々に答える。

「もちろん。アスカ大陸がどんなところなのか今から楽しみだわ」

「そうだね」

　目を輝かせて言うアクアに比べて、エルは平然としている。

　そして、それから3時間が経過していた。

「……それでいつアスカ大陸に向かうのかしら？」

　3時間前と変わらず、カイタチの部屋で3人は待機していた。

「アクア、話を忘れたのか？」

「……話って何よ？」

　エルはアクアの反応にため息をつく。

「あー！ため息つくなんて酷い！」

「バカの相手は大変だ」

　そのエルの反応にますますアクアはご立腹のようだ。

「そんなに言うことないでしょ」

　そう言いながら、アクアはカイタチの部屋の床を何度も悔しそうに足で叩いている。

「エル。そうアクアをいじめてやるな」

　カイタチもそんなやりとりが見ていられなくなったのか、エルを注意する。

「了解しました」

　特に反省した素振りもなくエルは頷く。

「アクア、アスカ大陸に行くのは、まず内通者から連絡が来てからだ」

　そのカイタチの言葉にアクアは思い出したかのように頷く。

「そういえばそうだったね。で、何の連絡を待っているんだっけ？」

「……トロン王国の第1皇子が他の大陸に移動する連絡を待っている」

　カイタチが冷静にアクアの質問に答える。

　その答えにアクアは不思議そうな顔を浮かべた。

「えーっと、なんでトロン王国の第1皇子がアスカ大陸を離れるのを待たなきゃいけなかったんだっけ？」

　この質問にはエルもため息をつきながらも答えてくれた。

「はぁ。忘れたのか。トロン王国というよりもアスカ大陸で最も強いと噂されているのが第1皇子なんだ」

「うん。ため息ついたことは忘れてあげるからつづけて」

「……わざわざ、アスカ大陸で1番強いと言われている奴がいる時に、偵察をしなくてもいいという話だよ」

　まだ納得いかないのかアクアは難しそうな表情を浮かべながら言った。

「うーん、アスカ大陸で1番強くてもきっとカイタチなら勝てるでしょ。そんなにビビる必要はないんじゃない？」

「……まぁ、カイタチ様なら勝てると思うけど」

　アクアの発言に困ったようにエルは言った。

「勝てる勝てないではなく、今回は偵察だ。トロン王国の実力を測るためのな。偵察中にそれなりの実力者とは戦おうとは思っているが、わざわざ1番強いやつと戦う必要はない」

「カイタチがそれでいいなら私はいいけど」

　アクアはまだ少し文句がありそうだったが、カイタチが気乗りではなさそうに見えたので追求するのをやめた。

　そしてさらにそれから数時間が経過する。カイタチ３人がカイタチの部屋で待機しているとカイタチが持っている通信機から連絡が来た。

　この通信機はダンジョン内で入手したBランクの魔法具である。その通信機は真ん中についているボタンを押すことで、かかってきた相手と話すことができる。カイタチはそのボタンを押して通信状態にする。

「私だ。これから第1皇子が別の大陸に船で向かうことになっている。こちらの大陸に来るなら今がベストだと言えよう」

　声の主はどこか普通とはいえない声音をしている。魔法具で変声機を使用しているのだ。そのため、この声を聞いただけでは男か女か判別はできず、声色で正体を看破することはできない。この連絡者からの言葉から男の感じはするが、あえてそのような喋り方をしているのかもしれない。なぜ、声の主がこのような面倒なことをしているのかというと、通信傍受を警戒してのことだ。カイタチも変声機を使用して、通信機に声をかける。

「わかった。連絡ありがとう。大陸に到着次第こちらからまた通信をかける」

「了解」

　そう言い、互いに通話を切った。

「聞いていた通りだ。これからアスカ大陸に向かう」

「OK。けど通話の相手って何者なの？」

「それは、契約していることだから言えないな」

「ええー、ケチ。じゃあさ、男か女だけでも教えんてくんない？」

　アクアの質問に呆れたようにエルが説明した。

「やれやれ忘れやすい性格だな。相手の特徴をいうのも契約違反になるんだよ。だからカイタチ様は何もいえないんだ。前にも言ってただろ」

「契約違反したらカイタチはどうなっちゃうの？」

少し興味ありげにアクアは言う。

「最悪死ぬかもな」

　カイタチはそういい椅子から立ち上がる。

「……それは言わない方がいいね」

　恐る恐るそう言ったアクアとエルはカイタチの後ろに続いた。

　カイタチ達は城の屋上に来ていた。城の屋上についた時真っ先に声を出したのはアクアだった。

「ねぇ、大陸を移動すると言うのに何で城の屋上に来たの？普通は船で大陸に移動するんじゃないの？」

　笑顔でアクアは聞いているが、その笑みはどこか引き攣っている。

　カイタチはその質問に対し、少しばかり意地悪そうな笑みを浮かべる

「普通はな。だが、船で大陸を移動するとなるとアスカ大陸の見張りに気づかれる可能性が高い。そこでアクア。君の力を使って大陸を移動しようと思ってね」

　そのカイタチの言葉にアクアは頭を抱える。

「つまり、精霊を使って大陸を渡るってことよね？」

「そう言うことだ」

「はぁー。できなくはないけれど精霊をずっと出しとくのって疲れるのだけれど？」

「わかっている。そのぶんの報酬は弾む」

　カイタチがそういうとアクアは笑顔を浮かべた。今度の笑顔は引き攣っていない。

「本当に？！じゃあ楽しみにしているわ！」

「……扱い安いやつ」

　誰にも聞こえない小さい声でエルはそう言った。

　アクアは呪文を唱える。その呪文の音を聞き取ることは2人にはできない。アクアは自分の能力を使い、かなりのスピードでその呪文の詠唱をしているからだ。10秒くらいで呪文が終えたかと思うと地面から魔法陣が浮かび上がった。その魔法陣から出てきたのは、魔法ではなく精霊と言われる存在である。その精霊は人間と同じように四肢があるが、服は何も着ていない。体の色は緑色で風を纏っているような感じで存在が薄く見える。薄くと見えると言うより、その精霊の姿から向こう側の景色がぼんやりと見えるので本当に薄く見えているのだろう。そして人間と同じように顔があり、目は真っ白な色で2つある。

「お呼びでしょうか。主人よ」

　呼び出された精霊はそう丁寧にアクアに呼びかけた。

「シルフィー、実はあなたにお願いがあるの」

「お願いですか？」

「ええ、シルフィー、あなたの風魔法で私達3人をこのカーム大陸からアスカ大陸を移動させてほしいの」

　シルフィーと呼ばれる精霊は少し困ったように言葉を発する。

「えっと、それは確かに可能なのですが、カーム大陸からアスカ大陸に移動するとなると1日はかかると思いますよ。その、主人が疲れますよ？」

　遠慮がちにシルフィーがそう言う。

「わかっているわ。その辺の話は終わっているから大丈夫よ。報酬は何を貰えるのかしら」

　最後の方のセリフはアクアはぼそっと言っていた。

「それを主人が望むなら、わかりました。では私の風魔法でアスカ大陸まで3方様をお送りしましょう」

「頼むね」

　そうアクアが言うと、シルフィーは風魔法を発動する。精霊が自分の属性の魔法を使用する際に、人間のように呪文を必要としていない。シルフィーは風属性の精霊であるので、風魔法を使用する際は呪文を唱える必要がない。シルフィーが使用した風魔法によって、3人は宙を浮いた。

「では、少し時間はかかりますが、空の旅をお楽しみください」

　シルフィーがそういい、３人は空高く舞い、カーム大陸に向かうのであった。

　カーム大陸に到着したカイタチ達は、誰にも気づかれないように森で着陸した。

「ふー、疲れた」

　地に足をつけると疲れたようにアクアはそう呟いた。

「お疲れ様です、主人」

　シルフィーはアクアを労うようにそう言った。

「お疲れさん」

「長い時間ありがとう」

　エルとカイタチもそれぞれ労いの言葉をアクアとシルフィーに言った。

　カーム大陸のどこかの森に降り立つ時にはすでに太陽は昇っていたので、とっくに朝は過ぎている。カイタチが時刻を確認すると9時になっていた。昨日の18時ぐらいにアリア帝国を飛び立ったので15時間かけて来た計算になる。精霊を出し続けるのにも魔力は消費する。また、精霊が使う魔法にも使用者は魔力を消費する。ただ精霊が使う魔法の魔力の消費量だが、自分で魔法を使うよりも魔力消費は少なく済む。これには理由がある。精霊が使用する魔法には使用者の魔力を使用するが、精霊自身の魔力も使用するためである。その分だけ本来自身で使う魔法よりも魔力消費は少なく済む。

「とりあえず宿を探そう。私疲れた。歩くの面倒だから、シルフィー私を運んでくれない？」

　地面にぐったりと座り込んだアクアはそう言った。

「主人よ。それだと魔力を消費して結局疲れると思うのですが、いいのですか？」

「……そうだよね。知ってた。自分で歩くしかないか」

　がっかりするように、アクアは言った。

　エルはアクアのその様子を見て呆れているが、彼なりに思うところがあったのか呪文を唱え始める。呪文を唱え終えると、アクアの地面のところに魔法陣が浮かび上がる。するとアクアの体が宙に浮く。先ほどまで使用していたシルフィーの魔法と同じ風魔法である。

「これでいいだろ？」

　エルはアクアに背を向けながらそういった。

「……うん、ありがと！」

　アクアはエルの態度に少し驚いたが、笑顔でお礼を言った。

「主人の魔力のことを考えて私は一旦失礼します」

「まだ大丈夫だと思うけど」

「駄目です。私がいると主人の魔力は回復しませんよ。ここは侵略する大陸なのですから、魔力は回復しないと」

　精霊の呼び出した使用者は、精霊を呼び出している間、魔力が回復しなくなる。そのためシルフィーは魔力を回復するように主人であるアクアに言った。

「わかったよ。多分また呼びだすと思うから、その時はよろしく」

「かしこまりました。主人。それではこれで失礼します」

　シルフィーはそう言い、カイタチ達の前から霧散するようにいなくなった。

「さて、それでは行くか」

　カイタチがそう仕切り出す。

「どこに行くの？」

「ここから近くの街さ。空から降りてきた時見えただろ。そこで宿を借りて今日のところは休むとしよう」

　アクアの疑問に答えたカイタチは歩き出す。2人はカイタチの後に続いた。

　街についたカイタチ達は早速宿を見つけ、旅の疲れを癒していた。宿に入って初日は特に内通者に連絡しなかった。アクアが回復した2日目に泊まっている宿の部屋で内通者に連絡をした。連絡をする際は2日前の時と同様に、Bランクの魔法具と変声機を使用した。

「こちらは大陸についた」

「了解した。では、次はこちらからの連絡を待っていてくれ。時間がかかると思われるからそれまで自由に行動するといい」

　男のようなのぶとい声が通信機から聞こえたが、すぐに『ツーツー』という音が聞こえた。どうやら相手は伝えることだけ伝えるとすぐに通信を切ったようだ。

「うーわ、すっごい短い連絡ね」

　文句を言いたそうな顔でアクアが通信機を見ながらそう言った。

「時間を潰せか。どうしますカイタチ様？」

　先ほどの連絡のことは特に気にしていないのか、エルはいつもの冷静な調子でそう言った。

「そうだな。このアスカ大陸の実力を知るのが今回の偵察の目的の1つだ。だから、手っ取り早くそれを知るためには高ランクの冒険者の実力を見るのがいいだろう」

「……高ランクの冒険者」

　エルがぼそっとつぶやく。アクアは首を傾げ何やら考えているようだ。エルはそのアクアの様子を見て、何か喋ろうとしていたが黙っていることにした。アクアが思いついたのか、傾けていた首を元に戻しカイタチとエルの二人を交互に見る。

「高ランクの冒険家の実力が見たいなら、やっぱりダンジョンがいいよね」

「そうだな」

　アクアの言葉にカイタチが頷く。

「確か、この大陸の1番難しいダンジョンって……、名前なんて言うんだっけ？」

カイタチとエルはやれやれと言った様子でお互いを見る。しかしその様子はどこか楽しそうである。ひとしきり楽しそうにした後、カイタチはエルにお前が言えと言わんばかりに目を瞑った。エルはそれに従うように口を開いた。

「忘れられた都市」

　その名前を聞いたアクアは「そういえばそんな名前だったね」と少し焦ったように呟いた。

「では、やることが決まったな。これから私たちは忘れられた都市のダンジョンに向かう」

「了解」

　そう言いカイタチ達は街を後にした。

「ところで、忘れられた都市のダンジョンにはどうやって行くの？」

　街を出た後すぐにアクアがそうこぼした。その言葉を聞きカイタチが地図を広げた。その地図はアスカ大陸について記載されているものである。地図を広げるカイタチの様子に驚いたようにアクアが声を出す。

「いつの間に地図なんて手に入れてたの？」

「この2日間は特にやることがなかったからな。とりあえず街で情報収集をしていたんだ。そしたら、物々交換だったけどこの大陸の地図をもらうことができた」

「うわー、私が宿屋でごろごろしているときにそんなことしてたんだ。私も呼んで欲しかったなー」

　カイタチの言葉に対し、アクアは少し不満そうにそう言う。その不満に対し、エルが宥めるように言った。

「仕方ないだろ。魔力を回復するには寝るのが一番だからな。だから、カイタチ様もお前に声を掛けなかったんだ」

「……わかってるよ」

　そう返事をしながらも、アクアは何やらぶつぶつ言っている。どうやら自分がのけものにされたことに少しばかり不服なようだ。

「さて、私たちの場所は今ここだ」

　地図を2人に見せながらカイタチはそう言った。エルは「うん」と頷く。2人を見たアクアはぶつぶつ言うのをやめて、カイタチの話に耳を傾けた。

「それで忘れられた都市はここにあるそうだ。ここからだいたい1日歩く距離だな」

「ええー、1日も歩くのー。それなら私が精霊を呼んで飛んで行った方がいいんじゃない？」

　1日歩くことにアクアは不満気なようだ。

「だめだ。ここからは無駄に魔力を使用するのは厳禁だ」

　エルがアクアに注意する。

「うーん、わかった」

　アクアはそう言い、カイタチ達は忘れられた都市に向かって歩き出す。

　カイタチ達が歩き出して数時間が経過した頃、エルが口を開いた。

「この先から３人こっちに向かって歩いてくる。多分だけど、人だと思う」

「ふむ……こんな森の中で、3人の人となると冒険者の可能性が高いな」

「どうしますか、カイタチ様？」

「こんなところを歩いている冒険者となると、それなりの実力があるのだろう。気になるし、すれ違ってみよう」

「了解しました」

　カイタチ達は特に進路を変えずに、その冒険者と鉢合うように歩く。エルが言っていたように数分歩くとその冒険者3人と鉢合わせした。カイタチ達は何もいわずにその3人とすれ違おうとしたが、その3人組の一番前に歩いていた男が声をかけてきた。

「おいお前ら、これからどこに向かうんだ？」

　その言葉にカイタチは立ち止まり、すれ違った冒険者達の方に体を向ける。カイタチの後ろにいた2人もカイタチと同じように、冒険者達の方に体を向け、カイタチが前に来るように後ろに下がった。

「我々はこれから忘れられた都市に向かうところです」

　そういうと男は眉をぴくっと動かした。

「ほう、忘れられた都市に向かうのか。さぞかし自分の力に自信があるんだろうな」

　その男の言葉にカイタチは少し考えるそぶりを見せるが、すぐに口を開いた。

「ええ。腕に自信がありますので、自分達の力を試すために忘れられた都市に行こうと思っています」

　そう言いカイタチは踵を返し歩こうとする。しかし、男はまだカイタチ達に話があるのかその場で立ち止まったまま口を開いた。

「そんなに自分の力に自信があるなら、1つ俺と勝負してくれないか？」

「……勝負ですか？」

　そう言い、カイタチは再び男の方に振り向いた。

「ああ、そうだ。忘れられた都市に挑むなら、当然この勝負にも承諾してくれるよな」

　カイタチの後ろにいた2人はカイタチの前に出ようとするが、それをカイタチが手で遮る。カイタチが男の後ろの2人組を見るとやれやれと言った表情を浮かべていた。それを見てカイタチはどうやらこの男は喧嘩っ早い人間なのだろうなと思った。

「いいだろう、その勝負受けて立とう。しかし、こんな森の中で戦うのか？」

「まぁ、俺は森の中でもいいが、この森から少し進んだところにちょっとした広場に出ることができる」

　そう言い出し、男は歩き出す。男の言った通り、確かに少し歩くと広場に出た。広場にでると、カイタチとその男の仲間である4人はそれぞれのリーダーの後ろの少し離れたところに移動していた。

「こんな森の中に広場があるなんて驚いたな」

　そのカイタチのセリフに男は黙って見ている。どこかこちらの正体を怪しんでいるような目をしている。カイタチはその男の目つきに気づいているが、目を合わせないように冷静にしている。しかし、カイタチの内心は余計なことを言ったかも知れないなと思っている。

「さて、勝負の前に1つ聞かせてもらおうか。お前、名前はなんて言うんだ？ああ、先に俺の名前を言っとくとドランだ」

　その質問に対し、カイタチは平静を装っているが、後ろのアクアは少し慌てた様子で「どうしよどうしよ」とエルに話している。カイタチは後ろを振り向いていないが、内心で溜息をつきたくなった。当然ながらドランと名乗った男は、後ろの2人の様子も静かに見ていた。

「カイ、それが私の名前だ」

　そのカイタチの言葉を聞いたアクアはいくらか冷静になってきていた。しかし、それはドランには逆効果であり、ますますカイタチ達は怪しい目で見られる。

「そういえばさっきの言葉はどういう意味なんだ？」

「さっきの言葉？」

　当然カイタチはさっきの言葉が何かわかっているのだが、わかっていないふりを通すことにした。

「冒険者ならこの広場のことくらい知っていると思うんだがな。なんであんた達は知らないんだ？」

「この森に来たのは今日が初めてだ。それでこの森についての情報収集をせずに突破しようと思ったんだ」

「冒険者が情報収集をせずにねー。……まぁそう言うことにしといてやる。勝負も受け入れてくれたしな」

　ドランはまだカイタチのことを怪しんでいるようだが、それ以上の追求はしなかった。

「さてと、勝負のルールだが俺とあんたの1対1で戦って、降参あるいは気絶した方が負けってことでいいよな？」

「……それで構わない」

　ドランが勝負のルールを提示したことに少し驚いたカイタチだが、特に問題はないと判断し承諾した。

「ああ、それとここは森の中だからな。火の魔法は禁止だ」

　思い出したように、ドランはそういった。このセリフにもカイタチは内心『口調は荒々しいが意外と周りに気が配れるな。それに私達のことも怪しんでいるようだ。油断ができないようだ』と驚きながらもドランが厄介な相手だと定めた。

「わかった」

　カイタチがそう言うとドランは後ろを振り向き歩いて10mくらいの距離を取ると再びカイタチのほうを振り向いた。

「さて、戦いを始めるか」

　そう言いドランは後ろを振り向き仲間の2人のほうを見る。リッカがドランのその目で察し、カイタチとドランのちょうど真ん中くらいのところまで来て、戦いの邪魔にならないようにそこから後ろに下がった。そして服のポケットからコインを取り出し、指で空中に弾く。

「あのコインが落ちたら、戦いの合図だ」

「ああ、わかった」

　コインが地面に落ちる。それと同時にカイタチは腰に収めている剣の柄に手を添えながらドランのほうへ走り出す。ドランは慌てずにカイタチに向かって、サンダー・アローを放った。カイタチはそのサンダーアローを走りながら最低限の動きで避ける。それにもドランは慌てることなく、むしろ少し笑みを浮かべウィンド・アローを放った。ドランが放ったウィンド・アローはカルクと戦った時と同様間違いなく必中の距離である。しかし、カイタチはその必中であったウィンド・アローを鞘に収まっている剣を瞬時に抜いて一閃で切った。居合切りである。

「何だと！？」

　ドランはそのカイタチの動きを見て驚愕した。それが完全に命取りとなった。カイタチは既にドランを斬れる間合いまで近づいていた。カイタチは居合切りをした剣を上に向け、そのまま剣を下に振り下ろしドランを切りつけた。

「がはっ」とドランは吐血し、後ろに倒れ動かなくなる。その様子を見たドランの仲間の2人はドランに駆け寄る。

「ちょっと大丈夫？！」

　そう言いながら、リッカはカバンから傷薬を取り出し、ドランの傷口にその水滴を落としている。ルービオンもドランに近づいていて、水滴が掛かりやすいようにドランの服を破っていた。2人とも慌てている様子である。

「動きが早いな」

　カイタチはリッカを見て、少し驚いている。

「魔法を切るなんて相変わらず凄いわね」

　アクアが感心したようにそう言いながらカイタチに近づく。

「魔法を切ったことよりもウィンド・アローをあの距離から切ったことの方がやばいですけどね」

　エルもそう言いながらカイタチに近づく。

「慌てることはない。その男は気絶しているだけだ。出血もあんた達が塗っている傷薬を塗れば治るだろう」

　カイタチは慌てて応急処置をしている2人に呼びかける。

「俺はまた……負けたのか」

　気絶していたドランが目を覚まし、寝転んだ状態でそう呟いた。その声はどこか悔しさを滲ませていた。

「もう目が覚めたのか。早いな」

　カイタチは少し驚いたようにそうこぼす。

「たったの……一撃で、気絶……させられたんだ。……くそっ、まさかこの……短期間で、2度も……負けるとはな。それも同じく、……一撃とは」

　ドランはカイタチから受けたダメージが大きいのか言いにくそうにそう呟く。

　その言葉に対し、カイタチが眉を顰める。

「あんたは結構強いと思ったんだが、私以外に一撃で倒せるやつがいたのか？」

　ドランが口を開けて何か喋ろうとするが、リッカが手でその口を塞ぎ、喋り出す。

「傷口に響くからリーダーは黙っといて。さっき喋ってた時もすごく喋りづらそうだったし」

「……しかし」とドランは首を動かして喋ろうとするが「いいから！黙っといて！」とリッカに一喝され、口を閉ざす。その様子を仲間であるルービオンは苦笑いしながら見ているだけだった。

「それでさっきのあなたの質問なんだけど、うちのリーダーを一撃で倒したやつなら確かにいたよ。確かリーダーがそいつと戦ったのは3日前だったよ」

「そいつについて詳しく聞いてもいいか？」

　カイタチの言葉にリッカは眉を顰め下を向くが、ドランの顔を見て問題ないと判断したのか口を開いた。

「そいつは、仮面の戦士と言われているSランクの冒険者よ」

　その言葉を聞いてカイタチは顎に右手を当て、考えるそぶりを見せる。

「……Sランク冒険者か。ちなみにそいつはどこにいるか知っているか？」

「あなた達がこれから向かう忘れられた都市で探索していると思うわ」

「なるほど。そいつは好都合だ」

　カイタチはそういい笑みを浮かべる。

「仮面の戦士と……戦うのか？」

　ドランがカイタチに問いかける。

「どうだろうな。今のところはまだわからない。だが、その仮面の戦士の実力に興味はあるな」

「正直俺には……お前と……仮面の戦士が戦ったらどっちが勝つか……想像つかないな」

　ドランの言葉に、アクアが反応した。

「その仮面の戦士ってそんなに凄い印象をあんたに与えたんだ？」

　ドランはその質問に答えようとするが「だから、喋らずにちゃんと手当てを受けてなさい！」とドランの頬をリッカが叩く。

　それでドランは大人しくなったのか、口を開けずに集中して手当てを受けている。

「私から見た印象でいいなら教えてあげるよ」

「う、うん、それで頼む」と少しびっくりしながらアクアは頷いた。

　その頷きを見て、リッカは笑顔になる。

「そうだね。個人的な印象で言ったら、そちらの剣士さんの方が本当に一瞬でうちのリーダーに勝っていたから、剣士さんの方が強いと思う。あっ、剣士さんって読んでいるのはあなたたちの名前を知らないから、そう呼んでいるので気にしないで」

　リッカはカイタチ達のことを怪しんではいるようだが、深く追求しない構えのようだ。

「私はカイだ。戦う前にその男にも名乗っている」

「カイさんね。じゃあこれからそう呼ばせてもらうわ」

　リッカの言葉にカイタチは頷く。

「カイさんの方が強いとは思うけど、うーん、やっぱりすいません、仮面の戦士とカイさんの2人が戦ったらどっちが勝つか想像できません」

　リッカは申し訳なさそうにそう言う。

「わからない……か」

　そう呟いたカイタチの顔はどこか嬉しそうである。

「その仮面の戦士と会うのが今から楽しみね、カイ」

　アクアも嬉しそうにカイタチに話しかける。

「貴重な話をありがとう。これはほんのお礼だ」

　そう言い、カイタチは剣を柄から取り出し、手に持ってドランに近づく。

「え？！いいの？！カイ、こんなところでそんなことをしても」

　カイタチの行動を見て驚いたように、アクアが言った。

「問題ない」

　カイタチは特に表情を変えずにアクアの問いに答えた。

　その行為を見たドランの仲間の2人は真顔になり、カイタチを警戒する。そんな2人を見たカイタチは2人の警戒心を解くように笑顔を見せ言った。

「そう警戒しなくていい。止めを刺す訳じゃないさ」

　その言葉の通りカイタチには、ドランに止めをさすつもりはないし、2人を傷つける気もない。殺気がないと感じたのか、ドランの仲間の2人はカイタチの進路の邪魔にならないように横に移動する。カイタチがドランに近づき、しゃがみ込む。そして寝転んでいるドランにゆっくりと剣を近づけ、剣の峰の部分がドランの傷口に触れる。それから数秒ほど経つと、カイタチが持っている剣が緑色に光だした。すると、みるみるうちにドランの傷口が塞がっていく。その光景を見たドランとその仲間たちは驚いているのか言葉を発することができない。

　完全にドランの傷口が塞ぐとカイタチはその剣を鞘に戻す。

「これで私がつけた傷は完全に治っただろう？」

　そう言われたドランは驚いた様子で自分の体を確かめ、立ち上がる。

「ああ、本当だ。完全に治ってやがる。またベッドに2日間寝転ぶ羽目になると思っていたが……凄いな、あんた。正直、こんな回復方法は初めてだ。しかも一瞬で傷口が塞がるなんてな」

　切られた箇所を手でさすりながらドランはそう言った。

「何、色々教えてもらったお礼だと思ってくれればいい」

　そういいカイタチ達はその場を去ろうとするがドランが呼び止める。

「待ってくれ」

　カイタチはドランのほうへ振り返る。

「聞くつもりはなかったが、あんたは帝国の王族なのか？」

　その言葉を聞いたカイタチは内心で少し驚いていたが「内緒だ」と含みを込めた笑顔でそういいその場をゆっくり歩いて離れていく。

「リーダーはどうして彼らが帝国の王族だと思ったんですか？」

　ルービオンがそう尋ねる。

「簡単さ。普通の剣が回復なんてできるわけがない。それにSランクの武器といえども、あれほど高性能に回復ができるとは思えない。まぁ、Sランクの武器に関しては見たことないから憶測でしかないが、それでも俺が使っているのはAランクの剣だ。そこまでの差があるとは思えない」

　その言葉を聞いたリッカが少し控えめに笑いながら言う。

「ふふっ、おかしなことを言うね。仮面の戦士との実力差は凄かったのに」

「あ？！っち、まぁそれを言われると否定はできないな。ただ武器でもAランクとSランクってそれほど差があるものなのかと思っただけだ」

そういうとルービオンは考えるそぶりを見せる。

「確かにSランクとAランクの武器の差がそれほどあるとは思えない……かもしれないですね」

「ああ。もしあの武器がSランクではなく神器だとしたら有り得る性能だと思ってな」

　リッカが目を大きく開け合点が言ったように頷いていた。

「なるほどね。だから、ドランは彼を王族だと疑ったわけだね？」

「ああ、王族にしか神器を使用することはできないからな」

「けど、どうしてアリア帝国の王族だと思ったんですか？トロン王国の王族かも知れないじゃないですか？」

　不思議そうにルービオンは尋ねる。それを聞いたドランとリッカは呆れていたが、ドランはその質問に答えた。

「んなの、簡単だろ。トロン王国の王族にカイなんてやつはいねぇ。つまり、神器を持っているカイは外国から来た王族ってことになる。そして、この時期の外国からの王族となるとラジオで世界統一をすると言っていたアリア帝国しかねぇだろ」

「……あ、ええと、も、もちろん気づいていましたよ」

　そう言いながら、ルービオンは少し目を逸らすように話していた。

「ところでこのことギルドに報告するの？」

　ドランはリッカの質問に少し考えるそぶりを見せるが、答えが出たのか口を開いた。

「いや、報告はしない。傷口を直してもらった借りがあるし、それにそれ以上に回復してもらったからな」

「？」

　リッカは不思議そうにドランを見るが、ドランは何も言わない。

『カイとか言うやろう。自分で傷付けた場所だけじゃなく、仮面の戦士にやられたところまで律儀に回復していきやがった。ちっ、倒さなければいけない奴がまた1人増えちまった』

そう内心で思ったドランは嬉しそうに笑みを浮かべていた。

「あいつらに能力見せちゃってよかったの？案の定あなたが帝国の王族なのかって疑われていたみたいだけど」

　先ほどのカイタチの行動が意外に思ったのか、アクアがドラン達から離れたところで聞く。

　カイタチはその質問について、歩みを止めずに答えた。

「私たちが今回来たのは偵察のためだ。冒険者を殺すことじゃない」

「……けどアリア帝国の王族だと思われると偵察がしづらくなるんじゃない？」

　エルも疑問に思っていたのか、アクアのその言葉に頷いていた。

「優秀な人材は生かしておいた方が後々のアリア帝国のためになるだろ？それに……いや、なんでもない」

　“それに“の後の言葉が気になった2人は互いに顔を見合わせるが、追求はしなかった。

　それから、数時間忘れられた都市に向かってカイタチ達が歩いていると、通信機が震えた。カイタチはまず変声機を取り出し自分の声色を変えてから通信機を取り出し、ボタンを押す。すると野太い男の声が通信機から聞こえてきた。

『君たちが今、この大陸のどこにいてどこに向かっているか知らないが朗報だ。この大陸の最難関ダンジョンから数時間馬で走ったところに港がある。そこへ向かうかどうか君たちの勝手ではあるが、君たちが狙っているものがある。時間は明日の12時ごろだ。それが何かお前にはわかるだろう？』

「それは貴重な情報だな。ちなみに“BS“は？」

『“ああ“、それなら“カイ”だ。この意味わかっているだろう？』

「ああ、問題ない」

　カイタチがそう言うと“ツーツー”と通信機から音が鳴る。どうやら、通話が切れたらしい。

「ねぇねぇ、BSとかよくわからない言葉が混じっていたんだけど、あれはどう言う意味？」

「BSって言うのは場所のことだ」

　カイタチの言葉に納得したようにアクアが頷くがすぐに首を傾げる。

「なんでそんな面倒なことをしているんだっけ？」

　これにはエルがため息をつきながら答えた。

「はぁ、そんなことも忘れているのか？俺たちの通話は傍受されている可能性があると前言っただろ？」

「……あ、あはは、そ、そうだったね。もちろん、覚えていたよ。ただエルが覚えているか確認しただけだよ？……ほんとだよ？」

　慌てふためいた様子でアクアが言った。

「ただ、俺にもわからない言葉を言っていましたね。“カイ”と言うのはなんでしょうか？」

　落ち着いた様子でエルがいうが、反撃できると見たアクアがにやりと笑って言う。

「エル、そんなことも知らないの？“カイ”ってのはね、この大陸でカイタチがそう自分のことを呼ぶように言ってたじゃん」

…………。その場を沈黙が流れる。

「あれ、私何か間違ってた？」

　その沈黙の意味がよくわからなかったのか、アクアが自信なさげに言った。

「まぁ、間違ってはいないのだが、この場合だとエルは別のことを聞いているんじゃないか」

　そう言ったカイタチは苦笑いを浮かべていた。

「別の意味って？」

　そう言いアクアはエルの方を見た。

「この場合に言った“カイ”って言葉は違う使われ方をしている。もちろんカイタチ様をさす単語じゃない。察すると“BS“の時と同様にイニシャルを表しているんじゃないでしょうか。“カイ”だから“KI”と言うイニシャルになると思いますので、直前の会話だと“場所“について話していましたので、この大陸で“KI”が使われている地名なのではないでしょうか？これで正解ですか、カイタチ様」

「ああ、それで大体正解だ。ただ“カイ”に関しては、“K”のイニシャルだと考えてくれればいい」

「けど、それだとややこしいね。なんで“カイ“だと“K”のイニシャルになるの？エルが言ったように、“KI“の方が正しいと思うんだけど？」

　首を傾げて、アクアが尋ねる。その質問に対しカイタチは笑顔で答えた。

「いい質問だ。アクアが言ったように傍受している奴らを惑わすためだ。現に、エルはイニシャルを間違っていただろう？」

　そう言われアクアとエルは納得したように頷いていた。

　しかし、何か思いついたのかアクアが不思議そうな顔をしながらカイタチに聞く。

「けど、それだとカイタチもややこしくなるんじゃない？それこそ聞いている私たちだって間違う可能性もあると思うんだけど」

「その見分け方なら簡単だ。“BS”のように記号を合わせた言葉だと、ダイレクトにイニシャルを言っている。“カイ”のように文字を言った場合だと最初の頭文字だけがイニシャルになるって言う仕組みだ」

　そのカイタチの台詞にも納得できないのか、アクアはまだ首を傾げていて質問する。

「でもそれだと記号を使っているのか、文字を使っているのかややこしい時もあるんじゃない？紙で文字を書いている訳じゃないんだから」

　そのアクアの言葉に感心したようにエルがつぶやいた。

「普段からそれくらい頭が回っていたらいいんだがな」

「ん？エル、何か言った？」

「……いや、何も言っていない」

　その様子を見て、カイタチは優しい笑みを浮かべていた。そして、2人が落ち着いた数秒後に口を開いた。

「それなんだが、相手が私の質問に対し最初に“ああ”と言っていただろう？」

「そうですね」

　頷いたのは、エルで、アクアの方は会話を覚えていないのかよくわかっていないようだ。

「こちらの質問に対し初めに“ああ“と答えたら文字で、“ええ”と答えたら記号で言っているということになる」

「思っていたよりもシンプルですね」

驚いたように、エルが言った。

「シンプルの方がこちらもわかりやすいからな。それに、そのことについて知らない傍受している側には、先ほどのエルのように欺くこともできる」

「なるほど」

　先ほど自分が引っかかったので、あまり強くは言えないエルであった。

「ところで私たちが狙っているものって？通信相手が言っていたよね？」

　エルもそれについては知らないのかカイタチの方を見て頷いている。

「俺の持っているこの剣は何だ？」

「神器だよね。この世に15本しかないと言われている」

　カイタチの質問にアクアが答える。それで察したのかエルは声を上げた。

「まさか！？」

「ああ、そのまさかだ。明日の12時ごろにこの“K”の地点に神器使いが現れる。つまり、この国の王族と会えると言うわけだ。まぁ、第1皇子はつい先日この王都を立ったばかりだし、戻ってくるという連絡は先ほどの通話では受けていないのでそれ以外の神器を持っている王族ということになるだろう」

　カイタチが淡々としゃべる。

「神器使い。それは、会うのが楽しみだ」

　アクアが嬉しそうに言う。

「しかし、仮面の戦士の方はどうしますか。我々は元々仮面の戦士に会うために、忘れられた都市に向かっているのですが」

「あっ、そうだった。どうする、カイタチ？」

思い出したように、アクアがそう言った。

「……そうだったな」

　そう呟きカイタチは顎に右手をあて考えるそぶりを見せる。2人は、カイタチの思考を邪魔しないように黙り込む。やがて、考えがまとまったのか、カイタチが口を開いた。

「確かに仮面の戦士も気になるな。もちろん神器使いと接触できる好機を逃すこともできない。よって、二手に別れて行動しようと思う」

　その言葉でどういう別れ方を察したのかエルが慌てて口を開ける。

「しかし、それでは我々はカイタチ様をお守りすることができなくなります」

「ん？どう言うこと？」

　状況が飲み込めていないのか、アクアが慌てているエルに聞いた。

「カイタチ様は2手に別れると言ったんだ。この３人で2手に別れるとしたら、最も効率のいい分け方が、私とお前のペアになって、カイタチ様がお1人になるということだ」

　カイタチは苦笑いを浮かべながらも口を開く。

「ああ、その別れ方であっている。そう心配するなエル。今回は偵察だからな。互いに無理はしないという決まりを決めておこう」

　そのカイタチの言葉に渋々と言った様子でエルが納得した。

「それで、どちらがどちらの方に行くのかだが」

　そのカイタチの言葉にアクアが割って入った。

「はいはい、私、カイタチ以外の神器使いを見てみたい」

　手をあげ目を輝かせるように、アクアが言った。

「残念だが、アクア。今回、お前達には仮面の戦士の方を見てもらいたい。探知使いがいないと、仮面の戦士の位置はわからないだろう。それに、神器使いの相手をできるのは同じ神器使いの私だけだ」

　アクアは納得いっていない表情を浮かべていたが、諦めた様子で「わかったよ」とつぶやいた。

「まぁ、仮面の戦士がどんなのか見てみたかったしいいか」

　すぐにアクアは気持ちを切り替えたようで、その顔には笑顔を浮かべていた。

「切り替えの早いやつ」

　今度はアクアに聞かれないようにエルがつぶやいていた。

「さて、これでお互いにやることが決まったな」

　そう言い、カイタチ達は忘れられた都市に向けて再び歩き出した。

　それから、1日が経過し、1月20日となっていた。アクアとエルは昨日の夕方ごろにカイタチと別れていた。

　夜の間に少し仮眠をとっていたが、雨が降ってきたことによって夜中に目が覚めていた。そして、目が覚めてしまったのでそのまま忘れられた都市に向けて歩き出し、朝ごろに忘れられた都市近くの場所までたどりつくことができていた。そして、そのまま忘れられた都市の入り口まで行こうとしたが、エルが小声でアクアにストップをかけた。

「ちょっと待った。ダンジョンの入り口近くに誰かいる。おそらく、ダンジョンに不法侵入させないための見張りだろう」

「ふーん、なるほど。じゃあ、その見張りを倒せばいいんだね？」

　アクアはそう言いながら笑みを浮かべていた。

「それは絶対にやめろ。面倒ごとが増える」

　エルは嫌そうな表情を浮かべていた。

「けど、雨も激しくなってきたし、早く屋根のある場所に行きたいんだけど」

　アクアがそう不満を垂れる。

「なるほど。確かに雨は激しいな」

　何か思いついたのかエルは笑みを浮かべていた。

　2人はそれぞれに隠蔽魔法を使用し、ダンジョンの入り口の監視者に魔力を感知されないところまで距離を広げていた。

「ダンジョンから離れてどうするつもり？」

　アクアがエルに問いただす。

「この雨だ。多少、風が強くなってもおかしくはないだろう？」

「うん、まぁそうだね」

「シルフィーを呼ぶんだ」

「わかった」

　そういったアクアは呪文を唱える。呪文を唱え終えると、魔法陣が浮かび上がり、その中から風の精霊のシルフィーが姿を現す。

「主人、お呼びでしょうか」

「ええ、ただ今回あなたを呼んで欲しいと言ったのは、エルよ。だから、何をやるかはエルに聞いて」

「かしこまりました」

　シルフィーがそう頷き、エルの方を見る。

「やってもらうことは簡単。ダンジョンの入り口近くにいる監視者に風魔法で視界を妨害してほしい」

「なるほど。そのくらいなら容易いことですね」

「ふーん、なるほどね。それで私たちはこっそりダンジョンに入るってわけね」

　納得したようにアクアが頷いた。

　３人は監視者の探知魔法に感知されないように、隠蔽魔法をかけて、忘れられた都市の入り口近くの階段のすぐ近くまできていた。3人は作戦を実行するためにお互いを見て、頷き合った。そして、シルフィーが動き出す。あらかじめ、監視者がどこにいるかはエルの能力によって割り出されているので、こっそりと移動し、気づかれないギリギリの範囲までシルフィーは監視者に近づいていた。そこまで近づくとシルフィーは中級魔法である“突風派”を発動した。その魔法は、範囲攻撃であり監視者に向かって放たれていた。監視者も魔法が発動されて流石に気付いたが、突風の範囲とスピードに対処できずに直撃してしまう。直撃した風により、監視者はダンジョンの階段を見ていない。しかし、2人はまだ動き出さない。

「誰だよ。こんな風魔法を使ったやつは？」

　そういい、監視者は風魔法が飛んできた方に向かって慎重に歩き出した。そして、シルフィーを探知できるところまで近づいた監視者は立ち止まり驚きの声を上げた。

「何だ？この魔力は？」

　その声を聞いて、ダンジョンとは逆方向にシルフィーは動き出す。

「待て」

　そういい監視者もシルフィーを追って走り出した。

「監視者も大したことないな。これで簡単にダンジョンに入れる」

　そういい、エルは入り口の階段を降りる。

「けど、誘導に簡単に引っかかったね。こんなことする奴は結構いたと思うんだけど」

　そのアクアの言葉に「確かに」と呟き怪訝な顔をエルは浮かべた。そして、念のため辺りを探知するが、特に探知には何も引っ掛からなかった。

「探知には誰も引っ掛からなかった。ただタイミングが好機だったのかもしれないな」

　そう自分を納得するかのように呟き、エルは階段を降り、アクアもその後に続く。

　階段を降りるとそこは、紛れもないダンジョンであった。ダンジョンの壁は少々古いレンガのような作りである。周りを見ていたエルが突然懐からナイフを取り出し、地面に突き刺す。しかし、そのナイフは壁に激突したと同時に弾かれ刃がこぼれた。

「ふーん、Bランクのナイフの一撃を簡単に弾くなんてかなりの強度だね」

「ああ、そうらしい」

　エルはナイフを懐に戻しながらアクアの言葉に頷いた。そして、エルは固有能力である索敵を発動した。これにより、半径2km先の魔物や人、道の把握をすることができる。索敵が終わったのか無言でエルは歩き始めた。

「もう探知は終わったの？相変わらず便利な能力だねー」

　アクアがエルの後に続きながらそう呟いた。

　数分くらい歩いていると、アクアの目の前の地面に魔法陣が浮かび上がった。えりはそのまま魔法陣を踏んでいたので横にずれた。そして、その魔法陣から出てきたのは魔法ではなく精霊のシルフィーであった。

「主人、ただいま戻りました」

　片膝を地面につけてアクアを敬う態勢でシルフィーがそう言った。

「ありがとう。引き続き私たちの戦力としてお願い」

「かしこまりました」

　再び3人は忘れられた都市を探索し始めた。1時間が経過した頃に「下りの階段を見つけた」とエルが言った。

　その言葉に少し驚いた表情をアクアは浮かべていた。

「もう？！確か忘れられた都市って、1層攻略するのにも数日はかかるって言われているのに。てか、そもそも魔物とも遭遇していないのに」

「魔物の位置は索敵でわかっているからな。わざわざ戦う必要はないだろ？それに、このダンジョンは運が良ければ数時間で1層を攻略することも可能だと言われている。そして、僕の能力なら運を頼まなくても済む」

「はへー、ほっんとうに便利な能力だねー」

　感心したようにアクアが呟いていた。3人はそのまま、第2層に行き、その第2層もエルの索敵の能力で魔物とも遭遇せずにわずか2時間で攻略し、第3層まで来ていた。

第3層もエルの索敵で辺りを感知しながらしばらく歩いていたが、突然忘れられた都市全体が光始めた。

「え？！なになになに？何なのこの光？！」

「ああ、主人この光はですね......」

シルフィーがなにか言おうとしたが、ダンジョンの中が目で見えないくらい光出し、気づくと3人は第3層のダンジョンの入り口に来ていた。

「え？！ここって、第3層の入り口よね？なんで戻ってきたの？」

驚いたようにアクアがエルの方を見てそう言った。だが、エルも驚いているのか、アクアの質問に答えることができず驚いた表情をして黙っている。沈黙の中最初に声を出したのは精霊のシルフィーだ。

「主人」

「なに？……そういえばシルフィーはこのダンジョンが光った時、何か言おうとしていたよね？」

「はい、その通りでございます。先ほどのダンジョンが光ったのはリセットの光でございます」

「リセットの光？！」

「はい、この忘れられた都市のダンジョンでは時間周期でリセットを行なっているのです。そしてリセットが行われると、ダンジョンに侵入していた者はその層の入り口まで強制的に戻されます」

「何でシルフィーはそのことを知っているんだ？」

　疑問に思ったのかエルがシルフィーに尋ねた。

「このダンジョンは『忘れられた都市』と言われるくらいにとても古いダンジョンだからです。私の精霊としての年齢は若いですが、こちらのような古いダンジョンの情報は、主人達でいえば親と呼べばいいのでしょうか。とにかくその親から我ら精霊は古きダンジョンについて教わるのです」

「なるほど。その古いダンジョンにこの忘れられた都市も含まれているということだな」

「はい、エル様の言う通りでございます」

「なるほどね。このダンジョンにはそんなルールがあるなんて、面倒臭いね」

　謎がわかったのか、明るい表情でアクアがそういい歩き始める。しかし、まだ何か考えているのかエルは歩き出そうとしない。

「どうした？」

　歩き出さないエルを見てアクアが声をかけた。

「ああ、シルフィー他に何かこの忘れられた都市について知っていることはないか？」

「他にですか？……そうですね、確かこのダンジョンでは、各層にボスモンスターと言われている強いモンスターがいます」

「各層にボスモンスター？ボスってのはダンジョンの最奥に一体というのが普通では？」

「はい、エル様の言う通りでございます。私も理由は知りませんが、とにかく各層に1体ボスがいるのです。そして、そのボスを倒せば、次の層に降りるための階段を見つけなくても次の層に行くことができるのです」

「なるほど」

　エルはシルフィーの説明に納得したのかそう頷き、歩みを進めた。数分が経過して「あ！」と何かを思い出したようにアクアが声を上げた。

「どうした？」

　アクアの方を振り向きエルがそう言った。

「私たちがこのダンジョンに来た目的って何だっけ？」

　その問いに対しエルとシルフィーが顔を見合わせる。シルフィーは知らないので首を振った。

「仮面の戦士に会うためだな」

　エルが簡潔に答えた。

「うん。仮面の戦士に会うためだよね。けど、3層がリセットされた時に誰にも会わなかったよ？」

「……それはもっと上にいるから……じゃ」

　何かに気付いたのか、エルが目を大きく開け、口を閉ざした。

「やっぱ、そういうことだよね。エルはもっと自分の能力の凄さを認識したほうが良いんじゃない？」

してやったりとアクアは笑みを浮かべてそういった。この言葉にエルは反省の色を顔に浮かべていた。

「そうだな。ドランの話によると仮面の戦士はまだこのダンジョンに来てから数日しか経過していないことになる。つまり、1層も攻略できていないのかもしれない」

「どうする？1層に戻る？」

「……いや、1層に戻るのは次のリセットが来てからでもいいだろう。もしかしたら、仮面の戦士が上がってくるかもしれない」

「了解」

　それで会話を終え、3人は3層の探索を再開した。

　1時間が経過した頃、またエルが足を止めた。

「また、次の層に行く階段を見つけた？」

　辺りを警戒しているのか声を静めて、アクアがエルに聞いた。

「似たようなものだ」

「似たようなもの？」

　エルの物言いにアクアは怪訝な顔を浮かべそう聞いた。しかし、エルはその質問には答えず、歩みを進める。ついて来いと言ってると解釈したアクアは少し不服ながらもエルの後ろをついていく。3ヶ所の分岐点があるところに到着すると右の道に続く先を角に隠れてエルがアクアを手招きする。右手は口に人差し指を当てている。静かに来いということだ。アクアは音を立てずにエルのところまで行き、エルと同じように壁に隠れた右に続く道を見た。

　その先には大きなモンスターがいた。少し驚いたアクアだが、特に音は立てなかった。

「10mくらいありそうだ。かなりでかいし、機械仕掛けの体だね。正面を向いたらどんな姿をしているのかな。とにかくあれがこの層のボスモンスターってことでいいんだよね？」

「ああ、そうだと思う。感知した限りだと、他のモンスター達と違うオーラを発していたしね」

「シルフィーはあのボスらしきモンスターに見覚えはある？」

　シルフィーはしばらく沈黙して考えた後、「でかくて機械仕掛けの体という情報だけだと候補が絞れませんね。せめて正面から姿を見ないと」と現状ではわからないと声を出した。

「ふーん、ま、とにかくあれを倒せばいいんだよね」

「ああ」

　そのエルの頷きに満足したのか、アクアはにっこりと笑みを浮かべた。

「いくよ。シルフィー」

「イエス、主人」

　そういい、アクアとシルフィーは3層のボスモンスターに突っ込んでいく。

　シルフィーは先制攻撃で、初級魔法であるウィンド・アローを放った。しかし、ボスモンスターの外皮が硬いのかダメージは全く与えられていなかった。それに、攻撃されていることに気づいていないのか、後ろを振り向こうともしない。これには流石に精霊のシルフィーもイラッときたのか「む」と声がこぼれ出ていた。

　続いてシルフィーは中級魔法である突風派を放った。これもボスモンスターはまともに当たるが、ノーダメージである。

「初級、中級魔法じゃ全然ダメージを与えられないね」

　眉を顰めて、アクアがそう言った。しかし、シルフィーの突風派で自分が攻撃されていることに気付いたのか、ボスモンスターがアクアとシルフィーの方を向いた。

「後ろ姿からだと気づかなかったけど、腕が4本あるみたいね。面倒臭そうな相手ね」

　アクアはボスモンスターを正面から見るなりそうごちた。

「4本腕にこの顔」

　シルフィーがそう呟いていると、ボスモンスターはなにも持っていなかった4本腕から急に剣が出てきた。その剣の大きさもボスモンスターの大きさに見合う大きさである。

「そして、剣を出してきた。間違いありませんね。このモンスターはサイカと言われている機械仕掛けの魔物です」

　確信を持って、シルフィーがそう断言した。サイカは、1本の剣をアクアに向けて振り下ろした。見え見えの攻撃であったので、アクアは危なげなくその攻撃を交わす。

　しかし、サイカはその避けた場所に向けて素早く、もう片方の剣を持っている手を横に払うようにアクアに向かって攻撃した。

「ちょっ、それは反則」

　アクアはそのサイカの攻撃に反応はできていたが、1撃目の攻撃をジャンプして横に避けていたため、まだ空中にいる。そのため、避けることができない。

「全く主人は危なっかしいですね」

　そうシルフィーは呟き、その2撃目の剣を両手を出して受け止めた。否、両手を出しているものの、その両手は剣に触れていない。剣と両手の間に何かあるように剣が止まっている。“絶風“と呼ばれている上級魔法であり、空間に風のバリアを張っているのである。サイカは攻撃が届かないと判断したのか、横払いした手を元の位置に戻した。

「上級魔法を詠唱なしで使えるのは精霊のいいところだね」

感心したように、アクアがそう言った。

「詠唱なしで使えるのは、自分の系統の魔法だけですから、そこまでいいものでもありませんよ」

　謙遜したようにシルフィーがそう言った。

「話している場合ではないよ。2人とも」

　そういいエルが近づいてきた。

「ところでシルフィー、あのサイカって魔物は何か弱点はないのか？あの機械仕掛けの表面をいくら攻撃しても大したダメージにはなりそうもないしな」

「ええ、もちろんあります。あのサイカの人間で言うお腹辺りのところにコアと呼ばれているものがあります」

　そう聞いたアクアとエルはサイカのお腹辺りを見渡した。しかし、見渡してもシルフィーが言っていたコアというものは見当たらない。

「そのコアというのはまさかサイカの体の内側にあるのか？」

　エルがひとまず思ったことをシルフィーに質問した。答えようとしたシルフィーだが、サイカが攻撃を仕掛けてきた。2本の剣をアクア達目がけて縦にふるってきた。アクア達はその攻撃を後ろに下がってよけ、追撃が当たらないようにした。

「はい、エル様が言っていたように、体の内側にあります」

　それを聞いたエルは「はぁ」とどこか面倒臭そうなため息を吐いた。

「どうしたの？」

　不思議そうな顔を浮かべたアクアがエルに聞いた。

「あいつの硬さを見ただろ。倒すのに正直時間がかかる」

「え？なに？もしかして逃げんの？」

　そのアクアの言い方に少しムッとしたエルだが、「その通りだ」と開き直るようにそう呟き続け様に口を開いた。

「君もさっき言っていただろ？僕たちがこの忘れられた都市に来たのは、仮面の戦士を見るためだって。だったら、こんなところで体力の消耗はしない方が得策なんじゃないかな」

「あー、そうだったね。うーん……仕方ない……今回は諦めるしかないのか」

　少し未練がましくサイカの方を見やりアクアがそう呟いた。

「逃げるのなら私にお任せください、主人」

　そう言ったシルフィーは即座に上級魔法である爆風陣をサイカに向かって放った。その風魔法はサイカに当たる前に円の形のように広がり、サイカを飲み込んだ。サイカはその円から脱出しようとするが、その中は嵐のように風が吹いており、思うように進めていない。

「さて、今のうちにここを離れよう」

　エルはそういい、サイカがいる方向とは逆方向に走り始めた。

「あー、倒したかったな。このサイカっていうボス」

　悔しそうに呟き、アクアはエルの後を追った。

　アクア達がサイカから逃げてから、1時間くらいが経過していた。アクア達は変わらずダンジョンを探索していた。するとまたエルが足を止め「念のため警戒」とアクアに言った。それを聞いたアクアは辺りを警戒するが、特に何事もない。

「何を感知したの？」

「多分、人間。でも……いや、ありえないよな。しかし、この感じはどう考えても人間だよな」

　自信なさげにエルは首を振る。

「何を感知したの？」

　そのエルの態度がはっきりしないのか再び同じ質問をアクアがした。

「正直今まで感じたことのない魔力だ。もう1人いるみたいだが、そちらは特に普通ではあるが、僕たち2人と似たような感じがするから結構強いと思う」

　エルは人間相手にそんな台詞を吐いたことは今までなかったので、アクアは驚いた表情を浮かべた。

「その2人こっちに気づいているんですか？」

　特に慌てた様子を見せないシルフィーがエルに尋ねた。

「たぶんこっちにはまだ気づいて……いや、今気づいたな」

「相手の方も結構良い探知魔法を使えるってことだね？」

「悪くはないと思うが良くもないと思うな」

「それはなぜ？」

「こちらが向こう側を探知できてないと思い込んでいるのか、気配を消して来たからな」

「じゃあ、大したことないってこと？」

「いや、そうとも限らない。気配の消し方は達人級だ。正直僕の探知でないと気づかないレベルだと思う」

「エル様のいう通り、私の探知魔法ではわかりませんね」

　シルフィーは神妙な声でそう言った。精霊が使う探知魔法はAランクの冒険者なら気配を消していたとしても探知可能である。つまりシルフィーが探知できないということは、相手が少なくともSランククラスの実力があるということだ。そして、アクア達はSランクの仮面の戦士を見るためにこのダンジョンに来ている。

「ねぇ、エル今こっちに向かって来ているのは、私たちが追ってる仮面の戦士なのかな？」

 Sランク冒険者は仮面の戦士だけではないので、半信半疑でアクアがエルに聞いた。

「ああ、顔のところに何かつけているみたいだからな。おそらく仮面をつけているのだろう」

　向かって来ているSランクがほぼ仮面の戦士であるということをエルが首肯した。

「そういえば何で仮面の戦士達は私たちの元に向かって来てるの？別にダンジョンに冒険者がいるのは普通なんじゃない？」

　首を傾げアクアがエルに聞いた。

「ああ、それは」

　そう言い、エルはシルフィーの方に顔を向け、シルフィーも頷き、言葉を引き継いだ。

「私が精霊だからですね。探知魔法を使用して、精霊を感知したら間違いなく違和感を持つはずです。何度も探知魔法で精霊を感知していたらともかくこの大陸では精霊という存在が極めて珍しいと聞いています」

「なるほどね」

　納得したようにアクアが頷いた。

「さて、そろそろ僕達の元に来るみたいだね。今回は戦闘を避けようと思う」

「えー」

　アクアがあからさまに不服そうな表情を浮かべた。

「近いうちに戦うことになるさ。その時は、強い方をお前と戦わせてやる」

　エルがそういうと、アクアは笑顔を見せた。

「ま、それならいいかな。それで、どうやって今回は切り抜けるの？」

「向こうが直接こちらを襲おうとしたら、走って逃げる。しかし、隠れてこちらの様子を伺ってくるなら、シルフィーの風魔法で目眩しをしてほしい」

「はは。走って逃げるってそれしか選択肢なさそうなのが笑っちゃう」

　笑いの琴線に触れたのか、アクアがお腹を抱えて声は小さく笑った。

「OK。それで行こう。シルフィー頼むね」

「かしこまりました。主人」

　そして数分が経過し、アクア達の近くの物陰に誰かが隠れ様子を伺っている。

「ねぇ、本当に近くにいるの？私は全然わからないんだけど」

　本当に近くに来ているのか半信半疑のアクアが小声でエルに聞いた。

「ああ。もういる。そして、隠れているのは間違いなく仮面の戦士だ」

　それを聞いたアクアの口元が少し上がった。かなり近くまで来ているのに自分の探知能力では気づかないレベルの相手だということに、アクアは内心喜んでいる。エルはそのアクアの表情を見て内心呆れている。そう考えていたところで、シルフィーの攻撃が始まった。

　シルフィーが放ったのは中級魔法“突風派”である。“突風派”は仮面の戦士が隠れている物陰に直撃した。直撃したことを確認してから、3人は走り出した。走っている途中にアクア達はそれぞれ隠蔽魔法で気配を隠していた。

　30秒くらい全力で走った3人は止まるが、「こっちを追っている」とエルが言い、再び走り出した。それから数十分が経過するが、未だにアクア達は仮面の戦士達に追いかけられていた。

「ああー、もうしつこい、ねぇ、このままやっつけちゃっていいんじゃない？」

　数十分も逃げ回る状況に嫌気がさしたのか、イラついた口調でアクアが言った。

「落ち着け。戦うという選択肢は本当に最後だ。今は逃げることだけ考え、……いいタイミングだ」

　エルも現在の状況に嫌気がさしていたのだが、何か感知したのか笑みを浮かべた。

「何かこの状況を打開する案でも浮かんだの？」

「ああ、そうだ」

　そういい、エルは走るスピードを上げる。それに続き、アクアとシルフィーも走るスピードを上げた。そして数分後に目的の場所に辿り着いたのか、分かれ道がある場所でエルが立ち止まった。

「立ち止まっていいの？追いつかれちゃうよ」

　心配そうにアクアがそう言ったが、やがてエルの意図に気付いたのか悪い表情を浮かべた。

「主人、また私の番ということですね」

　シルフィーも2人が何を考えているのか察したのか2人の前にでた。

「ああ、頼む」

　そういいエルとアクアはシルフィーが立っている道とは逆の道に走り始めた。

「やれやれですよ」

　シルフィーはそう呟き、前方の道に中級魔法の“突風派“を放った。“突風派”は途中で何かにぶつかると、かき消えた。その瞬間「ギー！！」という甲高い声みたいなものがダンジョンを駆け巡った。そして、シルフィーの前方の道からドスンドスンと何かが走っている音が聞こえ、それがどんどん近づいてくる。近づいてきたのはこの3層のボスであるサイカであった。シルフィーが後ろを振り向くと仮面の戦士達も、見えるところまで迫ってきていた。その姿を見てシルフィーは特に表情を変えずに小さい声で呟いた。

「後はあなた達に任せますよ」

　そういいその場から霧散するように姿を消した。

　仮面の戦士と3層のボスをぶつけることができたアクア達は、無事に忘れられた都市から脱出することができ、今は森の中で座り込んでいる。

「それにしても、階段見つけて登ったらまさかダンジョンの入り口に戻るなんてね。てっきり2層に行くもんだと思っていたよ」

「忘られた都市の構造は特殊ですからね」

　アクアの疑問に、シルフィーが答えた。

「しかし、仮面の戦士というのはさすがにSランクと言われているだけあるな」

　先ほどの追いかけっこを思い出し、関心したようにエルが呟いた。

「ええ、戦うのが楽しみだわ」

　そう言った、アクアは無邪気な笑みを浮かべていた。

　アクア達と別れてから、カイタチは特に何事も起きずに港に到着していた。すでに日は暮れており夜になっていた。カイタチはこの港に来た目的である、神器使いをすでに見つけていた。その神器を持っていた人物はカイタチも何度か新聞などで見たことがあり、すぐに誰かわかった。その人物はトロン王国第1皇女のアトリ・クロトである。

「神器を持つ人物だけあり、流石に大物だな。護衛も多い」

　カイタチはそう1人呟いた。

　アトリ達一行は港に到着して、すぐに荒野の方に向かって歩き出した。

「港で休憩はしないのか？それに荒野の方に向かった？まぁこちらとしてはその方が都合がいいのだが」

　眉を顰めそう呟き、カイタチはアトリ達に悟られないように、隠れながらついていった。

　アトリ達が荒野を歩いて30分が経過した頃、突然アトリ達が歩みを止めた。アトリ達に気づかれないように100mの距離をあけてついていっているカイタチはその行動に少し違和感を覚えた。今の自分の状況を確認するが、ちょうどよく岩の後ろに隠れられており、気配も魔法で消している。気づかれてはいないと思うが突然アトリ達が止まったことに内心不安ではあった。

「岩の後ろに隠れている人物よ。姿を表すがいい」

　カイタチの不安が的中したように、すでにアトリにはバレていたようだ。100m離れているカイタチにもアトリの声がはっきり聞こえたので魔法具を使って声を出しているんだなとカイタチは思った。それは向こうが確実にこの岩の後ろに隠れているものがいると確信している証拠でもある。ただ、かまをかけている可能性もあるので、その呼びかけだけでは姿を見せないようにしようと思ったが、「岩の後ろから出なければその岩を破壊する」と声が聞こえてきたので諦めて、姿を晒した。

　そして、カイタチも100m離れているアトリに声が届くように拡張機の魔法具を使って、声を出した。

「君は、トロン王国第1皇女のアトリ・クロトか？」

　その声を聞いてアトリは警戒心を顕にする。咄嗟の状況にアトリの周りの部下達も驚いているが、訓練しているのかすぐさま戦闘態勢をとる。アトリは警戒しながらも、部下が勝手に攻撃しないように右手をあげ、カイタチに語りかける。

「そうだが、お前は何者だ？」

「私は、帝国の第4皇子、カイタチ・サールスだ」

　カイタチはそういい凶悪な笑みを浮かべた。

第3章　神器対神器

聖暦2502年1月23 日

　王国から手紙が届いていることを知った俺は気分が憂鬱になるのがわかった。手紙を納めている封筒を開けようとすると、封筒が光った。俺以外がその封筒に触れ、中身を確認するために封を開けようとすると手紙ごとその封は粉々になって消え失せてしまう。

　俺以外の者が最初に読めないようにするための対策である。ちなみにその封筒はDランクの魔法具と言われているが、一般的にも入手しやすく、この世界の人々にかなり重宝されているのもである。

　手紙の内容は以下の通りだ。

---拝啓

久しぶりだな。我が息子カルディック、いや、仮面の戦士と言った方が良いだろうか。私はミーラだ。

早速ではあるが、本題に入らしてもらう。1月20日に第1皇女、つまりお前の姉のアトリが何者かに襲われ、現在はトロン王国の病室で寝ている。

なに、命に別状はないということだから、心配することはない。ただ、お前もことの重要さがわかるだろう。我が国屈指の強さの第1皇女であるアトリが襲われ、敗北したのだ。

トロン王国としては現在持てるだけの力を持ってしてこの犯人を探したい。

あまり、憶測を話しても仕方ないが、あのアトリに勝てるとしたら、アトリと同じ神器持ちしかいないだろう。

この手紙を読んだらすぐに王国に来てくれ。お前のSランクとしての力を借りたい。もちろんそれなりの報酬を渡す。

それでは来訪を待っている。

ミーラ・クロト

敬具---

　手紙に出てきたミーラという名前はトロン王国の現王の名前である。その現王がカルディックと呼んでいる人物は俺のことである。

　なぜ王族である俺が、名前をカルクに変えて、王国を離れ自分の持ち家で住んでいるのかは、色々とあったが、一番の目的は自由になりたかったためである。そして、俺は今自由に暮らしているのだが、王族としての制限もある。今回のように王国だけでは対処できないようなことがあった場合は、手伝って欲しいという制限である。まぁ最初はそんな制限なく自由に暮らしていたのだが、ある時俺が仮面の戦士ということを父上であるミーラ王にバレてしまった。正直バレたことについては当初はなにも思っていなかったのだが、今では面倒ごとを押し付けられるのは厄介だなとも思っている。まぁ今回のことは国の一大事だし、個人的にも姉が襲われたというのはむかつくことなので問題ないのだが。そんなことを考えながら、俺は手紙を執事のシンに渡し愚痴をこぼすように呟いた。

「まさか、アトリ姉様がやられるとはな。正直この国でアトリ姉様に勝てるのは、神器を持っているジョーカー兄様かライ兄様しかいないよな」

　ジョーカーはこの国の第1皇子であり、ライはこの国の第2皇子である。2人とも俺の兄である。2人は神器に認められた絶対的強者の立ち位置にいる。アトリもこの2人同様に神器にその力を認められており、神器の力を扱うことができる。

　神器というのはこの世界に15本しかないと言われており、国宝級の武器である。トロン王国は現在神器を3本所有している。神器の力は最高武器のSランクとは次元が違う強さと言われており、神器に認められることができれば、小国程度なら神器使い1人で簡単に滅ぼせると言われていた。過去形になっているのは、この1年でアリア帝国の神器使いの1人が本当に小国を1人で滅ぼしたというラジオ放送があったからだ。

「ええ、その通りと言いたいところですが、私にはアトリ様に勝てることができるのはもう1人いると思うのですが」

　シンはそういい、笑顔で俺の方を向いていた。俺はその視線を無視し、現在の状況について話始めた。

「アトリ姉様に勝てるうちの1人であるジョーカー兄様は、今海外に行っている。つまり、この国でアトリ姉様に勝てるのはカイ兄様しかいない。しかし、最も自分が疑われる状況でカイ兄様がアトリ姉様を襲うとも思えない。そうなると残るは世界統一を目論む帝国の神器使いが攻め入ったと考えていいだろう。しかし、それはそれで姉様を生かしていたのが気になるな」

　俺は思考を言葉にするが、それらは全て憶測でしかない。

「ここで考えていても仕方ないでしょう。早く王国に行って真相を確かめるのがよろしいかと」

　シンもここで考えるのは時間の無駄だと思っているのか、俺にそう提案してきた。

「まぁ、そうだな。では行ってくる。留守は任せた」

　俺はそういい、自分の家を後にした。俺はまずトロン王国ではなく情報屋のオリの仕事場に向かった。手紙に“仮面の戦士“と書かれていた場合は、“仮面の戦士“としてくるようにというミーラ王との決まりごとの一つである。

　オリの仕事場に着くと、「今日は1人なのか」とオリがこちらを見てそう言った。

「ああ、急用ができたんだ」

　俺がそう言うと、オリは事情を察したのかいつもの茶化すような言葉を使うのではなく、「そうか、大変だなお前も」と呟いていた。オリはある程度俺の事情を知っているので、俺が急用だと告げた時は王国がらみの件だと言うことを知っている。

　俺はいつもの着替え部屋に通してもらい、仮面の戦士の姿に着替え、バレないように気配を暗殺の技術で消して外に出た。外に出ると俺はそのままトロン王国の入り口前まできた。俺の家、そして情報屋のオリの仕事場はトロン王国の城下町の外れのところにあるのですぐに王国前までたどり着いた。流石に王国に入るのに気配を消して入ったと知られたら、後々面倒なことになるかもしれないので、入り口手前の橋で気配を消すのをやめた。トロン王国の周りは池があり、地上から行くには橋を渡るしかない。トロン王国は昔からある由緒ある王国であり、攻め入って来る他国からの守りを考えるために王国の周りに池を配置していた。しかし、今では城下町もしっかりとした街並みとなっていて、トロン王国の方針というものもあり、アスカ大陸では国同士の戦争というものがほとんどなくなっていた。ちなみにトロン王国の方針というものは、他国に攻め入ることはせず、攻め込んできた他国はこれを徹底して叩くというものである。1000年前からその方針があり、当初からトロン王国は強かった。そのため、アスカ大陸にある他の国々はトロン王国を攻め入ることを次第にしなくなった。それがトロン王国の歴史の一つである。

　俺は橋を渡りきったところの門の目の前で兵士に呼び止められた。

「そこの怪しいやつ、止まれ」

　門を守る兵士は2人いて、1人は俺のことを呼び止めた者で不審な目で俺を見ている。もう1人の兵士がこちらに気付いたのか、少し慌てた様子で俺を止めた兵士に声をかけた。

「この人は止めなくていい」

　俺を怪しんでいた兵士は、その言葉に不満があるのか眉を顰めた顔をしていた。

「しかし、フードを被って仮面を付けているなど、怪しさ満点ではないですか」

　ああ、うんそうだよねと俺は内心ではその兵士に同意していた。

「新人のお前は知らないかもしれないが、この方はSランク冒険者の仮面の戦士なのだ」

「仮面の戦士のことは知ってますよ。しかし、仮面の戦士の変装などフードと仮面さえあれば誰にでも姿を偽ることが簡単なはずです」

　痛いことついてくるなこいつと思いながらもう一方では、仮面は結構な特注品なので早々真似はされないと思っている俺がいるなと色々考えながら兵士2人の話を聞いていたが、面倒なので父上からもらった手紙の一部分を兵士2人に見せた。

　兵士2人に見せたのは、ミーラ王の本名が記載されている部分だ。手紙の名前の欄にはある魔法がかかっており、そこに嘘を記載することはできない。この手紙もまた封筒と同じくDランクの魔法具で多くの人々に愛用されている。

　その署名を見たことで俺を怪しんでいた方の兵士が、申し訳ない顔をして俺に謝った。

「申し訳ございません。ただもっと早くこの署名を見していただければ、あなた様のことを怪しまずに済みましたのに」

　こいつ、内心では絶対に申し訳ないと思っていないなと思ったが口には出さなかった。代わりにもう1人の兵士に殴られて、頭を押さえつけられて謝っている。

「本当に申し訳ございません。どうぞ、お通りください、仮面の戦士様」

「ああ、特に気にしていないから、あまり彼を責めないでくれ」

　実際のところアリア帝国が世界統一を掲げているのでいつトロン王国を攻めてくるのかわからない今は、彼くらい疑ってもいいと俺は思ったのでそう言い、王国内に入った。

　俺は父上であるミーラ王に用事があるので、ミーラ王がいる玉座の間に直接向かった。玉座の間にも兵士が2人いたので今度はすんなり通してもらうようにとあらかじめミーラ王直筆の署名を兵士2人に見せると「少しお待ちください」と言い、魔法具である通信機を取り出し俺に聞こえないように少し離れ喋り出していた。その離れていた兵士が、戻ってきて「もうしばらくお待ちください。すぐに玉座の間の扉が中の方から開きますので」と言い先ほど警備していた扉の前に戻った。

　数分が経過して、本当に内側から扉が開いた。

「どうぞお入りください。仮面の戦士様」

　中からそう声が聞こえたので、俺はその言葉の通り玉座の間の部屋の中に入った。部屋に入るとすぐに俺を怪しんでいる視線をいくつも感じた。玉座の間には俺の父上であるミーラ王、そしてその王の側近である大臣、あとは護衛の近衛騎士がいるのが普通だが、少々近衛騎士の数が多いなと感じた。俺は大臣の方に視線を向けると、大臣が頷いたように見えた。

「こやつは仮面の戦士だ。問題はない」

　大臣がそう言うと、俺を怪しんでいた視線を感じなくなった。

「すまないな。このような形で出迎えてしまって」

　申し訳なさそうにミーラ王がそう言った。

「気にしていませんよ。状況が状況ですので無理もないでしょう」

　とりあえず俺は近衛騎士がいるので無難なことを口にした。俺の正体を知っているのは父上のミーラ王と大臣だけだからである。

「こやつは余が招待した仮面の戦士だ。近衛騎士達よ、すまないが席を外してくれないか」

　国王というのは、絶対的権利の持ち主だ。命令口調ではないが、王族直属の騎士である近衛騎士達にとって国王からのお願いというのは命令と同義である。

「国王様。それは流石に受け入れられません」

　そんな国王のお願いを拒否する近衛騎士が1人いた。その人物は近衛騎士の総隊長であり、精鋭と言われている近衛騎士の中で最も強い人物である。

「ふむ、私の言ったことが受け入れられないということか？」

　少し威圧した声で、ミーラ王がそう言った。

「大変恐縮ですが、近衛騎士総隊長の立場からして、その申し出は受け入れられるものではありません。平常時ならいつもの通り内緒話をしても問題ございませんが、今は帝国がいつ攻めてきてもおかしくないのです。どうかご容赦ください」

　近衛騎士総隊長は片膝をつき、頭を下げ、懸命に自身の考えを訴えた。これには、ミーラ王も頭を抱えていた。近衛騎士総隊長のいうことは何一つ間違っていないからである。俺は、総隊長にならバレても、俺の正体は広がらないと思ったので、総隊長に正体をバラす決意をした。

「王様。私は、近衛騎士の総隊長は私たちの話に混ざっても問題ないと考えます」

「しかし、良いのか？」

　心配するように、ミーラ王がそう言ったが、もう決意したことだ。あとはなんとかなるだろうと思いながら「はい、問題ございません」と返事をした。

「では、今の話の通り総隊長以外の近衛騎士はこの玉座の間をでていくように」

　そう大臣が言うと、すぐに他の近衛騎士達は玉座の間から出ていった。玉座の間の扉が閉まったのを確認してから俺は仮面をとり口を開いた。

「まずは、ただいまと言っておきましょう。父上。大臣。それとあなたにはお久しぶりと告げた方が良さそうですね、近衛騎士総隊長」

　ミーラ王と大臣は歓迎の笑みを浮かべていたが、当然近衛騎士総隊長は困惑した顔を浮かべていたがなんとか絞り出すように声を発する。

「……あなたは、カルディック様でございますか？」

「ああ、この国の5番目の皇子のカルディックだ」

　俺がそう言うと、総隊長は嬉しそうに笑みを浮かべ、片膝をついて口を開いた。

「道理で国王様や大臣様が安心して、密会をできるわけだ。……お久しぶりでございます、カルディック様」

「俺に対してそんなかしこまらなくていい。形だけで言えば、勘当されたようなものだ」

「しかし、カルディック様がSランク冒険者になっていられたとは驚きました。5年前に出て行かれた時とは、別人のように強くなっておられるように感じます」

「ああ、まぁなんだかんだ大変だったからな。……ところで父上、そろそろ本題に入ってもよろしいでしょうか」

　近衛騎士総隊長はまだまだ質問攻めしてきそうな勢いだったので、また何か質問される前に本題に入るように言った。

「ああ、そうだな。総隊長よ。まだまだカルディックに聞きたいこともあると思うがそれはまた今度にしてくれ」

「かしこまりました」

　そういい総隊長は一歩後ろに下がった。

「さて、本題であるが、お前の姉であるアトリが3日前の20日に何者かに襲われ、現在もベッドで寝ている。手紙にも書いたとおり、命に別状はない」

　先ほどまでとは変わり、ミーラ王は真剣な表情をして、本題を切り出した。

「アトリ姉様が無事なのはよかったです。ただ誰が襲ったのかですね」

　この会議は極秘の謁見であるので、俺はいつも自由に発言している。父上が話している途中に相槌を打ってもこの極秘の会議では特にお咎めなしだ。

「ああ、そうだな。あのアトリを倒せる人物など、この大陸ではほんの一握りしかいないだろう。それが問題なのだ」

　そういい、父上はまるでその先を言いたくないのか頭を抱え続きを言わない。ミーラ王の気持ちを察した大臣が代わりに口を開いた。

「ほんの一握りの存在。カルディック様、神器のことは知っていますね？」

「はい、神器はこの大陸にはトロン王国の3本しかなく、その3本は我が姉、そして2人の兄が持っていることを存じております」

　この大陸の神器の状況について、俺の知っていることを喋った。

「はい、その通りです。そして、神器に対抗できるのは同じ神器持ちだけなのです」

　世間では、神器の認識はそうなっているが、個人的な意見を述べれば少し懐疑的である。少なくともSランク冒険者なら神器に対抗できると俺は考えているからだ。ただ、話が脱線してしまいそうになるし、神器について俺は詳しくないのでその意見は述べないようにした。

「アトリ姉様を襲った容疑者は兄2人のどちらかとになるということですね。ですが」

「ああ、その通りだ。帝国が世界統一を謀っている以上、そこの神器を持っているものも容疑者となると言いたいのだろう？」

　俺の言葉を、父上が途中から遮るようにそう言った。

「はい、その通りです」

　これは俺の考えていることそのものなので首肯するしかない。

「だが、アトリが20日にあの場所にいるということはごく限られたものしかいない」

　この情報は手紙には書いていなかったので、その事実に俺は驚いた。

「では、そのごく限られた人物とは誰なのですか？」

「お前を除くここにいるメンバーとあとはわしの息子達、それとアトリの護衛の1人だけじゃな」

　それは、父上には悪いが息子達、特に今は王選抜が行われている最中なので、それに参加しているアトリ姉様を除いた皇子あるいは皇女の4名が最重要容疑者なのだろう。

「だとしたら、最も疑わしい容疑者は王選抜に出ているジョーカー兄様、ライ兄様、カヅキ兄様、サイール姉様の誰か4名ということになるのですね」

　カヅキとはトロン王国の第3皇子の名前である。サイールもまたこの国の第2皇女の名前である。

「ああ、その4名がアトリを襲う動機としては妥当だろう。ただ、他国を利用それも帝国と何かしらの協定を結んでいるという点からして、ジョーカーとカヅキはないと考えられるだろう」

　この父上の意見には俺も同意見である。ジョーカー兄様は王選抜で争っていると言っても、次期国王最有力候補であるし、なによりもあの人は優しい。そんな人が、帝国を利用してアトリ姉様を襲うなんて考えられない。そしてカヅキ兄様は敵に対してとても厳しい。正直この人とは、争いたくないと俺は思っている。そんな人が、今や完全に敵国と言ってもおかしくないアリア帝国と組むなど考えられない。

「つまり、ライ兄様かサイール姉様の2人が最重要容疑者ということですね」

「ああ、その通りだ」

　父上がそういったと同時に、ルルルルルと音がなった。慌てて総隊長が服から通信機を取り出し「失礼して良いでしょうか」と父上と大臣に呼びかけ「問題ない」と父上が答え、総隊長はボタンを押し通話を始めた。

「なんだ？」

「緊急のため連絡しました。アトリ様がお目覚めになられました」

　その声を聞いて、部屋にいた一同は安堵の溜息をついた。

「連絡ありがとう」

　総隊長はそう言い、通信を切った。

「アトリが目覚めたのなら、ここで話していても仕方あるまい。アトリがいる病室に向かおう」

　父上がそう言い、俺たちはアトリ姉様がいる病室に向かった。

カルディックが家を出たところまで時間は遡る。

「随分と急いで家を出て行ったわね」

　朝食を食べた席でトミがくつろぎながらメイドのルトーに話しかけた。

「王国から手紙が届いていたみたいですからね。呼び出しでもあったんでしょう」

　ルトーは朝食の片付けをしながら、トミの話に応じた。

「ふーん、呼び出しかー」

　トミはそう呟きながら机に置いてあった今日の新聞に目を向けた。その新聞の記事の一面には、『山が砕けた？！天変地異の前触れ？それとも……』と言った見出しが書かれていた。

「カルクが呼び出されたのはこれが原因かしらね」

「何か気になる記事でも見つけましたか？」

　そういいながら掃除の手を止めてメイドのルトーがトミに近づいた。近づいてきたルトーにトミは向かい合い、新聞の一面を見せた。

「ああ、これですか。確か2日前の新聞にも載ってましたよ」

　ルトーはそういい近くの収納箱から2日前の1月21日の新聞を取り出した。その新聞の記事にも山が砕けたという文字が記載されており、似たような内容の記事であった。

「それにしても、山が砕けたって凄いわね」

　1通りの記事を見終えたトミが驚いたような、信じられないと言った口調でそう呟いた。

「そうですね。それに今日の記事のタイトルには『それとも……』と意味深な記載のされ方をしている通り、帝国が関与しているのだと考えるものも多いでしょう」

「でしょうね。……この山が砕けた場所って意外と忘れられた都市のダンジョンから近いわね。早馬で2時間ってところかしら」

　そう言ったトミは、何やら考えるそぶりを見せた。

「トミ様は、その記事に写っている場所に行かれるのですか？」

　ルトーの質問にトミは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「わかる？」

「数年カルク様と一緒に世話をしてきていますからね。それくらいはわかりますよ」

　ルトーは呆れたようにそういった。

「さてと、それじゃ私も出かけるかしら」

　トミはそう言い自室に戻り、部屋着から外出用の服に着替え、再びリビングに戻った。リビングに戻ると先ほどまでいなかった執事のシンがいた。

「トミ様はこの新聞の記事の場所にお出かけですか？」

「ええそうよ。調べたら彼のためにもなるかもしれないし、それにその山が砕けたっていう現場をそんな魔法具で映し出されたような新聞の白黒のものじゃなくて直に見たいしね」

「これはルトーの言う通り、止めても無駄でしょうね。それでは気をつけて行ってください」

「本当に気をつけてくださいね」

少し心配そうにルトーもトミに言葉を告げた。

「ええ、気をつけるわ。出迎えありがとうね、シン、ルトー」

　そういいトミは家を後にした。

　トミは仮面の戦士の服装に着替えるために情報屋のオリの仕事場へと向かった。

「ほう、別々で来るとは珍しいな」

　トミが店に入るなり、そうそうにオリはそう呟いた。

「まぁ、珍しいかもね。ちょっと気になることがあるから調べに行くの」

　そのトミの言葉を聞いたオリは軽薄そうな笑みを浮かべ聞いた。

「仮面の戦士だと都合のいい場所ってことかい？」

「……そうね」

「ふーん、ま、何か面白い情報があったら教えてくれ。その情報買うから」

「わかったわ。部屋の鍵をちょうだい」

　それで会話は打ち切りと言わんばかりに、トミは部屋の鍵を催促した。オリから部屋の鍵を受け取り、着替えを済ませたトミはギルドに向かった。ギルドに向かったのは、転移で忘れられた都市に向かうためだ。ギルドの3階の受付場所に行き転移門を使用する手続きを済ませる。手続きを済ませたところで振り返ると見知った顔がそこにいた。トミ達と同じSランクの冒険者のエイルである。向こうもこちらに気付いたのか声をかけてきた。

「やぁ、今日はむらさき1人だけかい？珍しいね」

「まぁ、そう言う日もあるよ。じゃ、私は急いでいるからこれで」

　そういいトミは強引に話をきり、転移門に向かった。

「あかのようにもう少し話をしてくれてもいいのになー」

　エイルは少し不貞腐れたように呟いていた。

　転移門で忘れられた村に着いたトミは、そこのギルドで早馬を借りた。その馬で記事に載っていた山が粉砕されたという場所まで、約2時間かけて向かった。

「これは、凄いわね」

　目的の場所についたトミは驚きの声を上げた。そこは記事に載っていた通り、山が粉砕されているからだ。詳しく調べるためにトミは近くの港に向かい、馬を預け、再び記事の載っていた場所に戻ってきた。山が粉砕された場所からだいたい1.5kmくらい離れているが、その場所は荒野なのではっきりと見える。近くで調べたいトミは、山が粉砕された場所にまっすぐ向かった。少し歩くと、見張りの兵がいて、一般人らしき人物も多くいた。

「おいおい、近くで山がどうなったのか見たいんだがね。これ以上行ったらいけねぇのか？」

「当然だ。これ以上は近づくな。危険だからな」

　先に進みたい一般人を見張りの兵はそう言って通さないようにしている。大変そうだなと思いながら、トミは自身の存在を希薄にする技術と存在を隠蔽する魔法を両方使い、他人には気づかれないようにして、その兵の目の前を素通りした。ちなみにカルクは魔法が使えないので、このような芸当はできない。技術で存在を希薄にすることがトミより上手でも、目の前を通ると流石に気付かれてしまう。

　本来このようにこっそりと侵入しなくてもSランク冒険者なら堂々と立ち入り禁止の現場に行くことができる。トミがわざわざ存在を隠して通ったのは、先ほど見張りの兵に向かって文句を言っていた一般人に難癖をつけられるのが面倒だなと思ったからだ。その場所を通ってからトミは自分を視認できる普通の状態に戻った。

　少し歩きその砕けた山のところあたりに着くと、何人かの兵士や冒険者たちがそこにいた。本当に砕けた山が目の前にあるとそれは圧巻だった。山の形は跡形もなく、何か円形の巨大なものがその山を貫いたかのように見える。円形のように見えるのは、山の両端が綺麗に高さを保っており、丸みを帯びている形をしているからだ。

「あんたは確か仮面の戦士の相棒だったな」

　砕けた山をじっくりと観察していたトミにそう呼びかける人物がいた。その声にトミが振り向くと3人の見覚えのある人物が立っていた。

「あなたは、確かドランだったわね。ここにきていたんだ」

「ああ、気になったもんでな。そういうあんたは1人でどうしたんだ。あかはいないのか？」

「あかはいないわ。リベンジしたいならまた今度にすることね」

　トミがそう言うとドランは少し笑みを浮かべた。

「あれから、まだ数日しか経ってねぇんだ。流石にまだ奴に勝つビジョンは浮かんでねぇよ」

　その言葉を聞いて少し嫌な感じがしたトミは先んじて言葉を発した。

「私はあなたと戦う気はないわよ」

「そうかよ、つれねぇな」

　ドランはがっかりするでもなく、特に感情を込めずにそう呟いた。その反応にトミは顔には出さないが少なからず驚いた。このドランという人物は前に1回会っただけだが、それでも戦闘を楽しむ人物だったはずだ。トミは自分がSランクの自覚はあるので、断ってもこのドランなら何かしらの理由をつけて戦いを申し込むと思っていた。

「あっさりと引き下がるんだね」

　そのトミの言葉にドランは眉を顰める。

「あ？しつこく戦いを申し込んで欲しかったのか？」

「いや、そう言う訳じゃないけど」

「うちのリーダーはね。少し考えごとがあるのよ」

　突然ドランの仲間であるリッカが話し始めた。

「考え事？」

「おい、何を言い出す？」

　ドランが少し声の音量を上げてリッカに言った。

「仮面の戦士に言うのなら別にいいんじゃない？それにあの自称冒険者の正体を知っているかも知れないしね」

「……まぁ、こいつらに言うなら別に問題ねぇか」

　ドランは頷きながらそう言った。

「自称冒険者って何？」

　トミは不思議そうな顔を浮かべながら、リッカを見た。

「4日前の19日に、忘れられた都市から少し離れた森である3人組に出会ったの。うちのリーダーがその３人組のリーダーらしき人物と戦ったの。結果は相手の一撃でうちのリーダーがのされたわ」

「ちっ」

　話の内容が面白くないのか、ドランは舌打ちをした。

「え！？ドランって結構強くない？本当に一撃でやられたの？」

　トミはカルディックとドランの戦いを見てある程度ドランの実力はわかっているつもりだ。ドランと自分が戦えば、自分が勝つと思っているが流石に一撃では勝てないし、それなりに状況によっては善戦もされるだろうと思っている。トミはドランがその自称冒険者に一撃でやられたことに少なからず驚きを隠せない。

「おー、うちのリーダーって結構評価高いんだねー」

　少し喜んだ様子でリッカが言った。

　答えそうにないリッカを見てドランが代わりに口を開いた。

「ああ、一撃でやられたのは本当だ。ただ、驚いたのはその後だ。奴は剣で俺の体を一閃したが、その剣で俺の傷口を治したらしい。俺はその一撃で気絶していたから傷口を治すところは見ていないが、後ろの2人が証人だ」

「ええ、見たわ。正直あんなの初めて見たわ」

「はい、本当に驚きました。まさか、剣で傷口を治すなんて」

　リッカとルービオンが少しテンションを上げてそう言う。

「剣で傷口を治す？！そんな芸当ができるのなんて……」

　トミは驚いた表情を見せ、ある考えが浮かぶ。ドランも同じ考えなのかトミの言葉を引き継ぐように口を開いた。

「ああ、俺もあんたに同意見だ。多分奴が使っていたのは、神器なのだろう」

　“神器“それは選ばれたものにしか扱えない、国宝級の代物であり、それ1つあれば国をも滅ぼすことができる。トミは神器についてそう思い出し、もう1つ気になることができたのでドランに聞いた。

「ねぇ、あなたが見たその自称冒険者は、見覚えはなかったのよね」

「ああ、少なくともトロン王国にいる王族ではないだろうな」

　トミが知りたいと思っていたことをドランが先んじて言った。

「そう。……ところで何故その情報を冒険者ギルドに報告するか、情報屋に売っていないの？」

　そう聞くとリッカとルービオンは少しだけ浮かない表情を浮かべ「やっぱり、言ったほうがよかったよね」と小さな声で呟いている。ドランはというと特に表情を変えていない。

「奴らには傷を治してもらった借りがあったからな。報告しようとは思わない。あんたに言ったのは、まぁ、あんたのところのあかに負けてからの借りを返したってところだ」

「そう」

　トミは一言そう呟く。

「……早く報告しろって注意しないの？」

　少し不安そうにリッカがトミに聞いた。その問いにトミはキョトンとした表情を浮かべていた。まるで何故自分が注意するのだろうと言う顔で首を少し傾げる。

「あれ、特に怒らない感じですか？」

　ルービオンも注意されると思っていたのか、トミに聞いた。

「いやー、その情報はあなた達が手に入れたものだからね。あなた達が手に入れた情報をどう使うかはあなた達自信が決めればいいと思うわ。少なくとも私はそう考えている。それに冒険者は自由だからね。そんなことで怒りはしないよ」

　優しい笑みを浮かべトミがそう言った。

「……Sランク冒険者ってみんなこんな懐広いの？私ファンになっちゃいそう」

　感心した様子でリッカが呟いた。

「そうですね。1番尊敬しているのはリーダーですが、あなたは2番にしてもいいですね」

　ルービオンも感心した様子で呟いている。

「ははは」

　この2人の評価にトミは苦笑いを浮かべている。何故なら自分という人間は面倒ごとは極力回避したいと思っているからだ。だから、そこまで評価されるべき人間でないとトミ自身は思っている。ただその性格上、否定するのも面倒なので、特に否定はしない。

「ったくお前ら何言ってやがる。悪いなうちの連中が変なこと言って」

「……ああ、いえ、気にしていないわ。それよりもその自称冒険者の仲間の2人なんだけど、片方が精霊使い、そしてもう片方が探知使いじゃなかった？」

　トミの質問を受け、少しドランは考える仕草を見せるがすぐに口を開いた。

「精霊使いかどうかはわからなかったが、もう片方はおそらく探知使いだと思う。多分だが、こっちの探知にかかる前から気づいていたと思うぜ。どのくらいの距離を探知できるかはわからないがな」

「どうして、探知使いだと思ったの？」

「なんとなくだが、わざと俺たちとすれ違うように歩いていたように思う。まぁなんとなくだから期待はしないでくれ」

「……いえ、貴重な情報ありがとう」

「礼はいらねぇよ。こっちも1つ聞きたいことがある。あんたのとこの“赤“と俺を一撃で倒した自称冒険者、その2人が戦ったらどっちが勝つと思う？」

「……その2人と直接戦ったあなたの意見を先に聞かせてもらえるかしら？」

「まぁどっちも俺よりはるかに強いからな。戦った俺の意見が参考になるかはわからねぇが、自称冒険者の方が勝つと思う。“赤”の一撃もかなりやばいが、自称冒険者のあの回復能力はかなり厄介だと思う。こっちの意見はこんな感じだ。で、あんたの意見はどうなんだ？」

「私は彼との付き合いが長いからね。正直彼の負ける姿は想像つかないわ」

　トミは微笑みながら、ドランの質問に答えていた。

1月23日13時

　玉座の間で話し合いをしていた俺と父上、大臣、そして近衛騎士の総隊長は、アトリ皇女が目覚めたという吉報を受け取り病室へと向かおうとしていた。俺は玉座の間を出る前に、仮面を装着した。俺のその行動に父上と大臣は特に何も言わない。

「そういえば、カルディいえ、仮面の戦士のあか様は正体を隠しているんでしたね」

　総隊長は俺のその行動が見慣れていないのか、確認のために聞いてきた。

「様はつけずに普通にあかと読んでくれればいい」

「わかりました。あか」

　それで会話が終わり、俺たちは玉座の間をでた。

　病室に着くとライ兄様とサイール姉様の2人がすでに病室に来ていた。この2人はアトリ姉様を襲った人物と繋がりがあるのではないかという最有力の容疑者である。2人は仮面をつけている俺を眉を顰めて睨んでいる。まぁこの反応は当然だろうと思いながら、俺はその視線には気にも止めていない態度で総隊長の後ろで立って、アトリ姉様が眠っているベッドの方を見る。アトリ姉様はすでにベッドに座った状態で果物を頬張っている。数日眠っていたという話だが、思ったよりも元気そうなので安心した。

「アトリよ、元気そうだな」

　父上がアトリ姉様に声をかけた。

「お早い、もぐ、おつき、もぐ、ですね。ごくっ、父上」

　果物を食べながらアトリ姉様が父上に話しかけた。

「ちゃんと食べ終わってから話せば良い」

　ホッとした様子の父上はアトリ姉様の様子を見て今度はため息をついていた。

「いえ、とりあえずはある程度の栄養は補給しましたので、大丈夫です。私とお話をするために来たのでしょう。話し合いが終わってから、また食事を再開します」

「そうか。目覚めたばかりで悪いが、何があったのか教えてもらえるか？」

「あ、はい、それはいいんですが、その後ろの仮面をつけた人物も一緒に聞くんですか？」

　アトリ姉様が遠慮がちに父上に問いただした。カイ兄様とサイール姉様も同意見なのか頷いている。

「こやつは、そうじゃな。お前達はSランク冒険者を知っているか？」

「それは、まぁ知っていますが……その話をして仮面をつけた者がいるということは、あなたはSランク冒険者の仮面の戦士という認識でよかったですか？」

「アトリ姉、相手がSランク冒険者と言っても僕たちの方が敬われる立場なんだ。敬語は使わなくていいんじゃないか？」

　アトリ姉様の敬語を使う姿に違和感を覚えたのか、ライ兄様がそう言った。

「初対面の相手には私はいつも敬語を使っているよ。ライ、それはお前も知っているだろう？」

　そのアトリ姉様の言葉で納得したのか、ライ兄様は特に敬語云々については追求しなかった。

「え、と、しゃべってよかったですかね」

　微妙なところで俺に対する質問が途切れていたので、喋りかけるのが良いか迷ったが結局は声に出した。

「ああ、すまなかったな。続きをどうぞ」

　アトリ姉様がそう言ったので俺は続きを喋ることにした。

「はい、私はアトリ皇女様が言っていた通り、Sランク冒険者の仮面の戦士です。今日は王国からの依頼があって来た次第です」

「そうか、それはわざわざありがとう」

　アトリ姉様は笑みを浮かべてそう言った。

「わざわざSランク冒険者なんて呼ばずに、私たち家族の誰かに頼めばいいのに」

　面白くなさそうに、サイール姉様が呟いている。

「まぁ俺もサイールに同意見ではあるが、Sランク冒険者にはSランク冒険者にしかできないことがある。まぁそういうことなのだろう」

　落ち着いた様子でライ兄様がいうと、サイールも納得はしていない様子ではあったが、特に何も言わなくなった。

　その2人の様子を見て俺は、この2人は自分達がアトリ姉様を襲った何者かと内通者ではないかと父上に怪しまれているのだという予測をしているのだと思った。そして、王選抜戦とは関係ないSランク冒険者を雇い内通者を見つけようという父上の思惑が見えたのだろう。

「仮面の戦士については分かりました。ところで父上、私の話はこの場にいる全員に聞かせても宜しかったのでしょうか？」

　そのアトリ姉様の言葉に全員沈黙する。しかし、その沈黙は数秒のことですぐに父上が口を開いた。

「ああ、構わない。誰がお前を倒したのか聞かせてくれ」

「……はぁ、敗北したことについて細かく話すのは気持ち的にはしたくないのですが、そうも言ってられませんね」

　そういいアトリ姉様の話が始まった。

1月20日18時

　岩陰に隠れていた人物が姿を現し、自分は帝国の第4皇子のカイタチ・サールスだと名乗った。

　名乗った人物はそのまま近づいてきて、アトリと普通に会話ができる距離まで近づいて来た。ある程度近づくと、アトリの側近であるクーリン・ブルグが「待て」と言いカイタチと名乗る人物に槍を向けた。それを見たカイタチは足を止めて話し始めた。

「もう一度聞かせてもらおう。あなたが、トロン王国第1皇女のアトリでよろしかったか？」

「アトリ様に向かってなんという態度だ」

　そう言ったクーリンは今にもカイタチに襲い掛かる勢いだったのでアトリが「待て」と言い止めた。

「ああ、私がトロン王国第1皇女のアトリで間違いない。それで、帝国の第4皇子が一体私になんのようだ？」

　アトリはカイタチを警戒しながらそう問いただした。その問いにカイタチは特に表情を変えずに答える。

「帝国が世界統一を目指しているのは知っているだろう？そのために帝国以外の神器使いの実力を知っておきたい。アトリ第1皇女、あなたは神器を持っているのだろう？」

「ええ、持っている。それで神器を持っている私を殺しに来たのか？」

「……殺そうとは思っていない。ただ、帝国以外の神器使いの実力が知りたいんでね」

　そういいカイタチは腰にある剣を取り出した。

「あなた達」

　カイタチの様子を見て、アトリは側近である近衛騎士たちに声をかけた。

「はい、まずは我々が奴に突っ込みますので、奴の動きを観察してください」

　近衛騎士達はやる気をみせるようにアトリの前にでてそれぞれ剣を取り出す。最初から臨戦態勢だったクーリンはカイタチに向かって突っ込んでいった。そのクーリンの姿を見たアトリは「待て」と呟いていたが、その声は槍と剣が交差する音にかき消された。

「アトリ様どうされましたか」

　アトリの近くにいた近衛騎士にはアトリの言ったセリフが聴こえていたのかそう聞いた。

「神器使いは別格だ。いくら、私の側近と言っても戦うべきじゃない」

「何を言いますか。体調はSランクにも引けを取らない実力の持ち主です。クーリン隊長ならいつものようになんとかなるでしょう」

　近衛騎士はクーリンの実力に疑問を持っていない。だが近衛騎士は神器の強さがどれくらいのものなのかも知らない。神器の本当の強さを知っているのは神器を持っているアトリだけだ。

　再びクーリンの槍とカイタチの剣が交差する。互いに弾きあったところでクーリンが一歩後ろに引いた。

「なかなかやるな」

　２度の刃を交えたことで、カイタチがクーリンの実力がそれなりのものだと気付き感心した声で発した。

「お前もな」

　クーリンは冷や汗をかきながらそう呟いた。そして、その直後クーリンは「はぁぁ！」と雄叫びを上げながらまたもカイタチに向かって突進し、突きを放つ。だがその突きはカイタチの剣で余裕で止められる。

「貴様、本当にアリア帝国第4皇子のカイタチ・サールスなのか？貴様の持っている剣は神器なのか？」

「ああ、どちらの質問の答えもそうだ」

　互いに刃を交えながら言葉を交わす。言葉を交わしながらもクーリンは攻撃する手を緩めない。しかし、どの攻撃もカイタチに全て受け流されている。

「俺とお前の実力差はわかっただろう？俺が今、実力を知っておきたいのはお前の主人であるアトリ皇女だ」

　そのセリフを聞いたアトリは自分の腰に刺している剣を抜き、カイタチ向かって突進しようとする。

「そうだな。俺とお前には確かに実力差はある。だがな、俺の役目は我が主人を守ることだ！実力差があるからと言って、俺の攻撃は止められんぞ」

　しかし、そのクーリンのセリフを聞いて、アトリは「はぁ」とため息をつき立ち止まった。そして「死ぬなよ、クーリン」と言い、持っている剣を納めずにクーリンとカイタチの戦いを見守る。

「なかなか良い覚悟をしているな」

　カイタチは感心したように呟いた。だが、その直後カイタチはこれまでとは違う声音で呟いた。

「だが、実力差はどうしようもない」

　刃を交えていた2人だが、カイタチが後ろに引き持っている剣を鞘に納めた。そのカイタチの行動を見て警戒したクーリンは攻撃を止め足を止めた。

「後ろに下がって何をするつもりだ」

　そう問いかけるクーリンだがすぐに返事はこない。10秒が経過したところで、これまでと明らかに空気が変わる。クーリンは空気が変わったのは、カイタチが自分に対し殺気を向けているからだと気づいた。クーリンの体から先ほど剣を交えた時以上の冷や汗がでる。

「遊びは終わりだ」

　カイタチはそう呟き、剣を腰の鞘に入れたままクーリン向かって突っ込む。その動きを見てクーリンは深呼吸をしながら、自分の攻撃するタイミングを適切に見計らう。槍と剣のリーチ差を活かすために、剣の攻撃がギリギリ届かないところで攻撃する。そう決め、そしてその絶好のタイミングがすぐに来た。クーリンはカイタチ向かって突きを放つ。「はぁぁ！！」と先ほどあげた雄叫びよりも大きな声を放ち、渾身の突きを放った。

　しかし、クーリンが放った渾身の突きはカイタチに届くことはなかった。槍がカイタチに当たる瞬間カイタチは剣を抜刀した。そして、カイタチはその突きを放った槍を抜刀で斬った。そのカイタチの攻撃で槍は真っ二つに切れた。クーリンは槍を斬られたことに驚愕する。その瞬間をカイタチは見逃さず、攻撃の手を緩めようとはしない。。槍を真っ二つにした剣を今度はクーリンに向かってそのまま振り下ろそうとする。その瞬間、カイタチの正面から突風のような風が吹いてきた。その風によってカイタチは数メートルは飛んだ。そのため振り下ろしていた剣はクーリンにあたることはなかった。

「やる気になったようだな」

　カイタチはそう呟き、その突風を出したと思われる人物の方を見る。

「クーリン、お前がいくら強いと言っても神器使いには勝てないよ」

　そう呟いたアトリはいつの間にか、クーリンのすぐ近くまで来ていた。

「申し訳ございません。我が主人よ」

「気にするな。次にもっと強くなって挑戦すればいい」

　アトリはそういいカイタチの方に殺気を向ける。その殺気はクーリンがカイタチに向けられた殺気と遜色のない恐ろしさであった。間近にいるクーリンはアトリのその殺気を受けまたも冷や汗をかいてしまう。

「ああ、すまない。後ろの奴らを引き連れて、距離を空けておいてくれないか。少なくとも数キロは離れておいてくれると私も全力を出せる」

「ですが、主人よ。奴の実力は本物です。1対1で闘うのなど危険すぎます」

　後ろにいた近衛騎士達が近づいて、それぞれが主人であるアトリの心配を口にしていた。

「お前達、黙れ！」

　クーリンがそういうと周りの近衛騎士が黙った。

「お前らも俺の戦いを見ていただろう？奴に手も足も出なかった。Aランク武器である槍も奴に折られる始末だ。……俺たちの実力じゃ、アトリ様の足手まといになるんだ」

　そのクーリンの言葉に、周りの近衛騎士は悔しそうな表情を浮かべるが、誰も反論はしない。

「俺たちのやることはただ一つ。我らが主人が全力で戦えるようにするため、ここから一刻も早く立ち去ることだ」

　そう言うと近衛騎士達は「我らの実力が足らず、申し訳ございません」とそれぞれアトリに頭を下げた。

「気にするな。私たちの大陸は平和だったんだ。強敵相手にいきなり、命をかける戦いに挑まなくていい。それは私の役目だ！だから、ここを離れろ！！」

　アトリがそう言うと、近衛騎士達は悔しそうな表情を浮かべながら一斉にその場から離れていった。

「クーリン、何をしている」

　動こうとしないクーリンにアトリは問いかける。その問いかけをする時も油断なくカイタチの方を見ている。

「私の実力が足らず申し訳ございません。アトリ様、どうか死なないでください」

　頭を下げて、クーリンは悔しさのせいなのか震える声でそう言った。

「任せろ！」

　そのクーリンの言葉に応えるように、笑顔で力強くアトリは言った。それを聞いたクーリンはアトリの邪魔にならないように急いでこの場を去った。クーリンがこの場から見えなくなったのを確認して、再びカイタチの方をアトリは見た。

「まずは礼を言っておこうか」

　そのアトリの言葉にカイタチは眉を顰める。

「あんたの近衛騎士がこの場から離れるまで、待っていたことか？」

「それもあるが、我が側近に止めを刺さなかったことだ」

　その言葉で、カイタチは驚いた表情を浮かべる。

「何をいっているんだ。あれはお前が風で私を吹き飛ばしたから当たらなかったんだろ？」

「……私を甘く見ているようだな。確かに私は、お前を風で吹き飛ばした。しかし、お前はその風にわざと当たったように私には見えていたのだがね」

「……どうやら私の思っている以上にトロン王国第1皇女は強そうだ。それに私に向けた殺気もなかなかだったしな。少しは期待出来そうだ」

「敵国の皇子に皇女と言われる筋合いはない。アトリでいい」

「なるほど。では、アトリ、こちらもカイタチで構わない。では、そろそろ私たちの戦いを始めるとするか」

　カイタチは殺気をアトリ向けて放った。その殺気に気圧されずに、アトリもまたカイタチに向かって殺気を放った。そして、互いに鞘から剣を抜き、近づいた。

　互いの初撃は刃を交え『ギィン』と音が鳴り響く。そのまま数度刃を交えたところで、互いにお互いの間合いから離れた。間合いから離れたことを確認したカイタチはクーリンと戦っていた時と同様に剣を鞘に納めた。その様子を見たアトリも剣を鞘に納めた。

「面白い」

　アトリの様子を見たカイタチはそう呟き、アトリ向かって走り出した。アトリもまた、カイタチ向かって走り出した。それぞれの間合いに入るなり、互いに剣を抜刀した。剣と剣がぶつかり合い『ガキィン！』と先ほどよりも強烈な音が鳴り響く。

　カイタチは目を大きく開け驚いている。

「その顔は、なんだ？やはり私を甘く見ていたようだな」

　そう言ったアトリは笑みを浮かべている。そんなアトリの様子を見て、カイタチは冷静になる。

「ああ、そうみたいだな。正直今の一撃で私が勝つと思っていた」

「それは私を甘く見積もりすぎだな」

　少しムッとした表情を浮かべアトリが言った。そして、お互いに後ろに少し引いた。

「どうやら、剣の実力は似たようなものらしいな」

　カイタチはそういい先ほど以上にアトリに対し警戒する。

「そうみたいだね。つまり、次は」

　そう言ったアトリは剣を離れているカイタチ向けて振った。その剣からは、強烈な風が噴き出しその風はカイタチに向かって行った。互いに剣の当たらない間合いしか離れていなかったので、カイタチはその強烈な風をまともに受けた。数メートル後ろに吹き飛んだカイタチはすぐに態勢を立て直す。しかし、アトリは追撃をしてこなかった。

「いきなり技を出すなんてね。けど、どうして今のタイミングで追撃してこなかったんだ？」

「なんとなく、直感的なものだ」

　そう言ったアトリは真剣な表情でカイタチを見ている。先ほどの風でカイタチの服が少し切れている。強烈な風を浴びて少しで済んでいるのは、装備がいいのだとアトリは判断した。カイタチは真剣な表情でこちらを観察してくるアトリを見て自分のことをかなり警戒しているのだなと思ったが、すぐに行動した。

「さて、攻撃してこないなら次はこっちから行かせてもらおうか」

　カイタチはそういい初級魔法のファイヤーアローを放った。アトリはそのファイヤーアローを避けずに、持っている剣で弾き落とした。その一瞬の間にカイタチは間合いを詰め、斬撃をアトリに当てようとするが、アトリはそれを読んでいたのか冷静にその振ってきた斬撃を受け流した。そして、先ほどと同じく剣を振るい強烈な風の遠距離攻撃をカイタチ向けて放った。

　またもその攻撃をカイタチは直撃したかと思われたが、球体の薄い緑色のようなものがカイタチを覆っており、ダメージを受けていないようだった。

「それが君の能力かい？防御系の能力か。実に厄介だね」

「そう思うか？私にとってはお前の能力もかなり厄介だと思うが」

　カイタチはそういい、高速詠唱で呪文を唱え始めた。

「そんな詠唱させると思う？」

　そう言ったアトリは、剣を振り風をカイタチ向けて放った。しかし、カイタチは先ほどのバリアを貼ってその攻撃を受けない。それを見るや否や、アトリはカイタチ目掛けて突っ込んだ。アトリはカイタチのバリア目掛けて思いっきり剣を振り下ろした。自身の能力の風も付与しており、強烈な攻撃であるがカイタチのバリアを破ることはできない。

「次はこちらの番だ」

　そう言うとカイタチはバリアをアトリの剣が入り込まない程度に開けたかと思うと「突風派」と中級魔法の名前を言った。至近距離にいたアトリは突風派を直撃してしまい、数メートル吹き飛んだ。

「君はまだ私を舐めているつもり？」

　吹き飛んだアトリは、綺麗に受け身をとり地面に着地した。中級魔法を直撃したが、少しのかすり傷しか受けていない。大したダメージを受けていないが、その顔は明らかに不満顔である。

「どうやら、風系の能力を持っていると魔法である風の攻撃には耐性を持つようだな」

　不満顔のアトリをよそに、カイタチは状況を冷静に分析している。

「それを確かめるために、わざと風魔法で攻撃したっていうの？」

　そう言ったアトリはまたもカイタチ目掛けて突っ込んだ。先ほどと同じようにカイタチは高速詠唱で呪文を唱えながら、自分の周りをバリアで展開している。同じようにアトリの剣がバリアに振り下ろされる。しかし、結果は先ほどとは違った。「ぐっ」とカイタチから苦痛の声が漏れた。カイタチはアトリの攻撃によって高速詠唱を中断されてしまっていた。急いでカイタチは後ろに下がった。アトリは追撃せず一定の距離が離れたところでカイタチは自分の体を確認した。カイタチの体はビリビリと痺れてしまっている。

「これはお前の能力ではなく、神器による能力か？まさか、私のバリアを貫通するほどの威力を持っているとはね」

「どうやら、今度は1本取れたみたいだね。応える義理はないんだけど、そうね、これは私の能力ではなく神器の能力よ」

「電気、雷、私の体が痺れていると言うことはその辺りの能力なんだろう？」

　この質問にアトリは答えない。先ほどは気持ちが昂って答えただけであって今はすでに冷静だからだ。

「もう2、3度受けてみればわかるんじゃない？」

　そういいアトリは剣を構え突進しようとするが、カイタチの剣が光ったのを見て突撃するのをやめて観察をはじめた。剣が光だしてすぐに電撃の痺れでかすかに震えていたカイタチの体が治まったようにアトリには見えた。

「まぁそれは一理あるかな」

　そう冷静にアトリはいいまたバリアを展開している。それはアトリにはさももう一度同じ攻撃してこいよと挑発しているように見えた。アトリはその挑発にのり、カイタチ向かって突進し、剣を振り下ろした。振り下ろした剣は先ほどと同じく神器の力で雷を付与している。その雷はまたもカイタチのバリアを貫通し、先ほどと同じくカイタチは苦痛の声を漏らす。今度の攻撃は先ほどのように1撃だけで終わらず、2撃目、3撃目と連続した攻撃を繰り返した。その攻撃でカイタチは明らかにダメージを受けており連撃を食らうたびに苦痛の声を漏らしていた。

　アトリは3撃目の攻撃が終わると後ろに下がった。

「ダメージは通っているよね？なぜ、避けないの？」

　その質問にはカイタチは返事せずに、代わりにまたも剣が光った。剣が光ると痺れていたカイタチの体はまたも、もとに戻っていた。２度目のそれを見て流石にアトリも気づいた。

「もしかして、それはあなたの神器の能力？それも何か回復系の能力なのかな」

「神器の能力であることは正解だ。回復系かどうかは黙秘する」

　先ほどのアトリが能力のことを言わなかったことへのやり返しと言わんばかりにカイタチがそう言った。その返しにアトリはイラッときたが、表情には出さずに内心で飲み込み冷静に状況を分析する。その結果現状このまま戦闘が長引けば厄介な状況になるとアトリは思った。アトリは自身の能力を使い、神器の能力も使っている。そのため、魔力の消耗も激しいものとなっている。条件はカイタチの方も同じだと考えているが、アトリよりも魔力量が多いまたは、能力で消費する魔力が少なかった場合先に魔力の底を見せてしまうのはアトリの方だ。そして、回復などの補助的な能力は、攻撃系の能力よりも燃費が良い。少なくとも魔法ではそうだ。そう考えたアトリは現状かなりまずい状況なのではないかと考える。

「結構、やばい状況なのかもしれないね」

　現状を分析し、困ったようにアトリがそう呟いた。その呟きが聞こえていたのか、カイタチは笑みを浮かべていた。

「あまり、自分の弱みは見せない方がいいぞ」

　これまで自分よりも強い相手と命のやり取りをしたことのなかったアトリの無意識の弱音であり、それを敵に聞かれたしまったことにひどく自分に対してムカつき内心で舌打ちをしていた。そのアトリの様子を見たカイタチは、真剣な表情を浮かべ口を開いた。

「どうやら、私に勝てる未来が見えないらしいな。1つ提案があるんだが聞く気はあるか？」

「提案？それは内容によるね」

「では、言わせてもらおう。この戦いはもうやめにして、改めて別の日にもう1度戦わないか」

「……何を言っている？ふざけているのか？」

　眉を顰めて、疑いの目をアトリは見せる。

「何、こちらはいたって大真面目さ。このまま戦っても私が勝つだろう。だから改めて別の日に戦おうと言っている。そうすれば、もう1人神器使いを呼べるだろう？」

「それが目的というわけ？」

「そういうことだ。日付はそうだな、25日の18時でどうだ？場所は戦いの間と呼ばれているダンジョンでどうだ？」

「日付と場所を私に帰って伝えろってことね」

「悪くない提案だろう？お前にとっては勝つ確率が間違いなく上がるのだからな」

　カイタチのその見下すような発言にアトリはムカついていた。

「そうね。その提案だけど、却下するわ。何故ならここで私が君を倒すからね」

　その言葉にカイタチは眉を顰める。明らかにアトリにとって断る理由のない提案だと思っていたからだ。カイタチはあらかじめ考えていたことを口にしたのであって、アトリのプライドが傷ついて反論されたことなど考えていなかった。これは敵の感情についてあまり考えようとしないカイタチの悪癖である。

「だが、断ってどうするんだ？このまま戦ってもお前の魔力が先に尽きるだけだろう？」

「そうだね。その君の考えは間違ってはいない」

「だったら」

「ただ、それは私が全力を出していた場合だろう？」

　カイタチが何か言おうとした言葉に被せて、アトリが言った。

「なんだと？」

「意味がよくわからなかったと言いたげだね。ではもう一度言うとしよう。私はまだ全力を出していない」

　その言葉に黙り込むカイタチだが、何か思い当たることがあったのか今までにない驚きの声をあげた。

「まさか、お前？！」

「どうやら知っているようだね。ええ、その通り私は“神器解放“を行うことができる」

　そういった直後アトリは「神器解放！」と叫んだ。その叫び声と共にアトリの周りは爆風が起こった。カイタチの視界では埃や砂がまい、アトリの姿がよく見えない。その砂埃から突如電撃がまい、アトリの姿がはっきりと見えた。先ほど着ていた鎧から変化しており、青白く光っている衣服へと変化している。またアトリの持っていた神器の剣の姿が槍に変形しており、アトリはその槍を天高く掲げている。「雷槍一閃」アトリはそう呟き、その直後、アトリの姿が消えた。反射的にカイタチは自分の周りにバリアを展開していた。しかし、そのバリアの右側が簡単に砕け散り、槍がカイタチの肩をかすめた。

　かすっただけであったが先ほどの電撃よりもさらに強烈であり、カイタチの足がふらついた。

「悪いけど、あまり時間はかけていられない」

　そう言ったアトリは、さらに速度を上げ、カイタチ目掛けて突っ込む。これには流石のカイタチも命の危険を感じた。そして「神器解放！」と大声で叫んだ。アトリの時と同様カイタチの周りで爆風が舞うが、アトリは気にせずに突っ込んだ。

「これで終わりだ！雷光一閃！！」

　そう叫んだアトリは、カイタチのバリアを突き破り、カイタチに大ダメージを与えた手応えを感じる。そのアトリの攻撃の余波なのか槍からはビームのような円形のようなものが飛び出し、目の前にあった山を吹き飛ばした。

「はぁ、はぁ、はぁ、これで、私の勝ちだね」

　そう言った、アトリは神器解放状態を保っていられなくなったのか、元の鎧姿に戻った。神器解放した槍も元の剣へと戻っていた。アトリの攻撃をまともに受けたカイタチは、左腕がなくなっており、電撃を浴びたせいかその姿は黒く焦げている。ただ、黒焦げているがその姿は神器解放をしたからなのか、最初の頃と変わっている。

「がはっ、がっ、はぁ、はぁ、ぐっ」とカイタチは肩で息を切らしており、杖のように右手で持っている神器を地面に刺している。立っているのもやっとといった状態にアトリには見えた。

「はぁ、はぁ、こちらの神器解放が切れたとはいえ、はぁ、その状態じゃ勝負は明白だろうね。降参すれば悪いようにしないけどどうする？」

　アトリもまた肩で息を切らしているが、カイタチよりは明らかに余裕そうである。

「た、しか、に、がはっ、こ、の状態じゃ、明白、だな」

　喋るのもやっとといった様子でカイタチがそう呟く。その言葉で勝ちを確信したと思ったアトリだが、カイタチの剣がまたも光った。今度の色は先ほどの薄い緑色ではなく、光輝く緑色であった。見る見るうちにカイタチの黒焦げた体は元のダメージを受けていない体になり、あろうことかアトリの攻撃で吹き飛んだ左腕までもが回復していて元通りとなっていた。そのあまりにもな現象にアトリは驚きの表情を隠せない。すでにカイタチは先ほどまでの死にかけの状態ではなくなり、その表情には余裕すらある。

「さて、こちらは神器解放していて、お前は神器解放が切れているがどうする？」

　その言葉にアトリは息を切らしながらも笑みを浮かべる。

「それで私が諦めるとでも思っているの？」

　そういい、アトリは力を振り絞りカイタチ向かって突進する。

「だろうな。そう言うと思っていたよ」

　アトリの視界からカイタチが消えたかと思うと、アトリの肩からお腹にかけて血が噴き出した。

「ち、く、しょう」

　アトリはそのまま崩れ落ちた。

1月23日15時

　アトリの話を聞き終えた俺たちはそのあまりにもな話に黙り込んでいた。当の本人は、やることをやって満足しているのか執事を呼んで食べ物を要求している。数分の沈黙のあと、最初に口を開いたのは父上であった。

「やはり、アリア帝国が攻め込んできていたか」

「そうですね。しかし、いきなり“神器解放“を扱える皇子が攻め入って来るとは思いませんでした」

　ミーラ王の話を補足するように大臣がそう言った。

「ミーラ王、神器解放と言うのは何でしょうか？」

　俺は“神器解放“という言葉は初耳なので聞いてみた。俺以外のこの場にいる面々は神器解放について知っているのか特に表情を変えていない。大臣が総隊長の方を見て総隊長が頷くと口を開いた。

「僭越ながら私から説明させていただきましょう。皆さま、よろしいでしょうか？」

　ミーラ王が頷くのを確認してから総隊長は再び喋り出した。

「仮面の戦士は神器については知っていますか？」

「はい。選ばれた者にしか扱えない国宝級の武器のことですよね。そして、それに選ばれたのものは絶大な力を得られると言うのも聞いたことがあります」

「その理解で概ねあっております。そして、その絶大な力を得られると言うのは神器解放のことなのです」

「絶大な力と言うのは神器の能力のことではなかったということですか」

「そうですね。神器の能力だけならば、Sランク冒険者と大差ないでしょう」

　その総隊長の意見は俺が思っていたことだ。神器使いになるとせいぜい能力が一つ増えるだけのものであり、Sランク冒険者と変わらない強さだと俺は思っていた。まぁ、能力が一つ増えるだけでも戦術の幅が広がりだいぶ強くなると思うが、勝てないことはない。しかし、神器解放。アトリ姉様の話を聞いた限りだと、その力は山をも破壊する力があるらしい。それなら、絶大な力を得られると言うのも、Sランク冒険者よりも強いと言うのには納得だ。

「そして神器解放をしたものはおよそ通常で戦う状態の10倍は強くなると言われております」

「……10倍か」

　その強さの揺れ幅を聞いて俺は驚いた。

「そして、相手はアトリ以上の強さの化け物であることと、その能力は自身の能力がバリアなど防御で、神器の能力が回復系の能力ということで良かったか？アトリよ」

　父上が相手の強さをまとめるようにそういった。

「ええ、そうですね。その認識で間違っておりません」

　いつの間にか執事にもらっていたのか、パンを頬張りながらアトリ姉様は父上の質問に答えていた。

「25日の18時に戦いの間で待つか。ライよ、行ってくれるな」

「もちろんでございます。必ずアリア帝国の皇子を倒し、捕虜にします」

「期待しておる」

　ミーラ王がそう言ったところで、サイール姉様が声を発した。

「父上、私も戦いの間に行ってよろしいでしょうか？」

「……サイールよ残念だが、お前はこの王国で待機して置いて欲しい」

「私のことをアトリ姉上を襲った人物と通じていると疑っているのは存じ上げております。ですが、父上！怪しいのはライ兄上も同じではありませんか？」

　悲痛な叫びでサイール姉様は訴えている。

「お前の気持ちもわからんでもないが、神器に対抗できるのは神器を持つもののみなのだ。それを満たしているのはこの中でライしかおらん。確かにお前の言うとおり、ライも内通者の可能性があると余は考えている」

　父上がそういうと、悔しそうな表情を浮かべサイールは下を向き黙り込んだ。

「もちろん、僕は皆様が考えているような内通者ではありません。多くは語りませんが、その答えは明後日の25日にわかることでしょう」

　特に身の潔白を示すようなことは言わず、ライはそれだけを口にした。

「そう願っておる。……相手の実力は生半可ではない。アトリの側近であるクーリンが簡単にやられてしまうほどの実力だ。ライよ、お前の普段の側近を連れて行っても足手まといになるだけだろう」

「そうですね。アトリ姉様と私の側近ではややアトリ姉様の側近の方が強いと私は見ております」

　父上の言葉に反論はないのか、特に感情を見せずにライは淡々と答えた。

「そこでだ。余が認めている仮面の戦士を護衛に連れて行くといい」

　父上の言葉を聞いて、サイールとライは俺の方を見た。特にサイールは驚いた表情をしていて、その顔には少しの怒りさえ見え隠れしている。ライは多少驚いた顔を見せたが、すぐに元の冷静な表情に戻って口を開いた。

「足手まといにはならないのですか？」

「ああ、余が保証しよう」

「では、僕に異論はないです」

「仮面の戦士よ。25日はお前の相棒であるもう1人の仮面の戦士も連れていくのだぞ」

「かしこまりました」

　俺は内心でため息をつきながら、父上の方を向いて頷いた。

　それで、話が終わったのか「それでは、各自25日の準備をしておくように。そうだな、当日行くものは16時に街の外の正門前ででも待ち合わせするとよかろう。アトリはゆっくり身体を休めておくのだ」と言い父上は部屋から去ろうとする。ライ兄様も俺の方を見て「よろしく」と言い父上の後ろについていき、それに続くようにそれぞれが病室を去っていった。俺も同じように病室を去ろうとすると後ろからアトリ姉様の声がかかった。

「仮面の戦士よ」

　俺は、ベッドに座っているアトリ姉様の方を向いた。

「お前の実力は噂で聞いている。ライを頼んだぞ。まぁ、私が行ければよかったんだがな。流石に2日じゃこの傷は治らない」

　これまでとは違い、自分の無力さに悔しそうにアトリ姉様が言った。

「お任せください。必ず期待に答えて見せましょう」

　アトリ姉様の思いを考え、俺は真摯に床に片膝をつけ頭を少し下げる。

「うむ頼んだ！」

　顔を上げるとアトリ姉様は先ほどとは違い力強い笑顔を浮かべていた。

幕間　それぞれの決戦前夜

聖暦2502年1月24日18時

サイド：カルディック

　俺とトミはそれぞれ23日を別行動し、今日それぞれが調べたことについて家の広間で2人で話し合った。ちなみに執事のシンとメイドのルトーは食事の片付けを行っている。

「明日の今ごろには、私たちは大事な戦いの渦中にいるってわけね」

　1通り話しあった後、トミは小さくつぶやいた。

「そうだな。しかし、驚いたぞ。まさか、アトリ姉様と帝国の皇子が戦った現場に行っていたなんてな」

　暗い空気にならないために話し合った内容のおさらいを俺は述べた。

「まぁ、新聞見て山を破壊するなんて興味を持ったし、その日はカルクもいないしで暇だったから調査しに行こうと思った。ただ間がよかっただけね」

「しかし、ドランに会って貴重な情報を手に入れるなんてな。それにあのダンジョンにいた奴らが、帝国の皇子の護衛の可能性が高いなんて、意外と繋がってくるものなんだな」

「ええ、それには私も驚いたわ。ああ、それとドランが言うにはあなたよりも帝国の皇子の方が勝ちそうだって言っていたけど、あなたはどう思う？」

　俺はそのトミの質問に少しだけ考える。

「さぁ、実際戦ってみないとわからないが……ただ、相性は悪くないと思っている」

　それを聞いたトミは笑みを浮かべ、席を立った。

「明日はお互いに最善を尽くしましょう。そのために私はもう自室で休むとするわ」

「ああ、また明日」

サイド：カイタチ

　とある宿屋での一室。

「それにしても私たちには戦うなって言っていたくせに自分は皇女と戦っていたなんてねー」

　アクアは目を細くして、カイタチを睨んでいる。

「全く、アクアは何度その文句を言えば気がすむんだ」

　やれやれと首を振りながらエルが言った。

「それは少しすまないと思っている。ただ、奴の情報から、明日仮面の戦士の2人が指定していた戦いの間にくると言っている」

「それって、昨日内通者からの報告でわかったことよね。仮面の戦士には、忘れられた都市でしつこかったからね。明日は存分にそのうさをはらさせてもらうわ」

　アクアは獰猛な笑みを浮かべながらそう言った。

「仮面の戦士は2人組だから、僕の相手はリーダーではない方だね」

「わかってるじゃない。弱い方が相手だからって油断して負けないでね」

「アクアもな」

　エルは特に不満げもなくそういい、アクアはエルの態度が気に入らないのか「何をー！」と反発している。それを見てカイタチは少し微笑むが、気を引き締めるように声を出した。

「とにかく明日が決戦の日だ。各自油断はするなよ」

カイタチがそう言ったのを聞き、アクアとカイタチはお互いに顔を見て頷く。そして3人はそれぞれのグラスを掲げた。

サイド：？？？

　とある部屋。

　その人物は通信機を用いて連絡を取っている。

「それでは、明日は俺の変装をよろしく」

「正直気は乗らないけど、あなたの頼みだから乗って上げるわ。……ああ、それと仮面の戦士について調べていたけど、その正体についてはわからなかったわ。私も彼らとはライバルな関係だけど、仲が悪くのは嫌だから深掘りはできなかったわ」

「いや、調べてくれただけ感謝している。どの道明日で全てがわかることだ」

「ふーん。ま、あんたとは友達だし、いい仕事関係だし、だから死なないでね」

「私の目的が達成できるまで、私は死ねないさ」

「どうでもいいけど、一人称は俺か私かで統一しておいた方がいいんじゃない。聞いていて、違和感ある」

「そうか？俺は嫌いではないのだがな。では、明日は頼んだぞ」

　そう言うとその人物は通信を切った。切られた方のエイルはやれやれと言った表情を浮かべている。

第4章　激化する戦闘

聖暦2502年1月25日15時55分

　約束した時間よりも早く俺とトミはトロン王国の正門前で第2皇子のライ兄様が来るのを待っている。いつもの俺たちなら約束したらちょうどくらいの時刻にその約束場所に行くのだが流石に王族よりも遅く到着するわけにはいかない。格好はもちろん、Sランク冒険者としての仮面の戦士の姿だ。待ち合わせした時刻の16時ちょうどになるとフードを被った人物が正門を通り抜けてきた。

「ついてこい」

　フードを被った人物はそのまま足を止めることなく、直進して行った。俺はトミの方を向き、彼女が頷くのを見てからその人物の後ろを言われた通りついていった。そのまま黙って30分くらい歩き、森の中に入った。森の中に入ると、フードを被っていた人物はフードを外した。当然ながら、その人物はライ兄様である。

「さてと、どうしてこの私の言葉に従いついてきた。あの時点では私の顔は見えていないはずだ」

　ライ兄様はこちらを試すような目をしてそう問いかけてきた。

「……頼んだ」

　俺がそう言うとトミは特に表情を変えずに話始めた。

「簡単なことですよ。私の探知魔法では、王族の力は他の冒険者とは違う異質なものを感じるのです」

「つまりすれ違った時に異質な私の力を感じ取ったから、信じてついて来たということだな？」

　そのライ兄様の問いかけにトミは微笑んだ。

「いいえ、違います。異質な力を感じているのは後方80mくらい離れたところにいる人物ですね。残念ながら、あなたからは特に異質なものは感じられません」

　そのトミの言葉にライ兄様は目を大きくして驚いている。いや、偽ライ兄様と言った方が良いのだろうか。というか、俺全然知らなかったよ。まさか、目の前にいるのが偽物のライ兄様だったなんて。動揺を外に出さない訓練をしておいてよかったなとつくづく俺は思った。

「その言い方だと最初から気づいていたようですね」

「そうですね」

　トミが頷いた。偽ライ兄様はため息をつくと、懐から通信機を取り出した。

「すいません。最初からばれていたみたいです」

　それだけ言うと偽ライ兄様は通信機を懐にしまった。それから数秒が経過すると、同じくフードを被った人物が俺たちに近づき、フードを取ると、その顔はライ兄様だった。俺は偽ライ兄様とライ兄様の2人を見る。正直、両方とも全く同じ顔で俺の目には見分けがつかない。

「もう変身を解いてよいぞ」

　後から来たライ兄様がそういうと、偽ライ兄様の姿が変わった。変身していた人物は顔の頬の部分に切り傷がある30代くらいの男だった。

「やれやれ、まさか簡単に俺の変身がばれてしまうとはな」

「ご苦労、ゴードよ」

「いえいえ、お安い御用ですよ。まぁ、簡単に変身がばれてしまったのには流石に驚きましたがね。そうだ仮面の戦士よ、自己紹介が遅れました。俺はゴード・セントという」

　先ほど変身していた時の口調は演技だったのか、フランクな喋り方をする人物だと思った。

「そうだな。なぜ、こいつが俺の偽物だと思ったんだ？」

　ライ兄様が不思議そうに聞いてきたので、トミはゴードにした説明と同じように話した。

「……ふむ、王族の異質な力を感じ取れるのか。なかなか稀有な探知魔法のようだな」

　感心したように、ライ兄様が言う。

「お褒めいただきありがとうございます」

　トミも王族に褒められたので礼儀として、お礼の言葉を述べた。

「ところでだ。異質な力と言うものは、王族、そしてSランクの冒険者にも当てはまるのだろう？」

「……そうですね」

「もしも、私ではなく敵の罠だった場合はどうしていた？」

　こちらを値踏みするかのように、ライ兄様がそう言った。

「その時は簡単ですよ」

　トミはそういい俺の方を向いた。次の言葉は俺に言えと言わんばかりの表情をしている。

「返り討ちにするだけです」

　俺がそう言うとライ兄様は少し笑ったような気がした。

「そうか。試すような真似をしてすまなかったな」

「今回は相手が相手ですしね。気にしていませんよ。それで、俺たちは合格なんですか？」

「ああ、問題ない。これから私の護衛を頼む。それと、ゴードよ」

「ええ、わかっています。ここから先は俺では足でまといです。ライ様、どうか無事に戻ってきてください」

　悔しそうにゴードはそういいライ兄様に頭を下げた。

「すまないな。必ず帰る。……では仮面の戦士よ、私についてこい」

　ライ兄様の後ろについて行こうとすると後ろでゴードの声がした。

「仮面の戦士よ。私に変わってライ様をお守りください」

　先ほどの砕けた口調はなくその言葉には、自らの実力不足を嘆く叫びのように俺は思った。

「任せろ」「任せて」

　俺とトミは力強く同時にそう発していた。

17時30分戦いの間入り口前

「今日は戦ってもいいのよね？」

「ああ、好きに暴れるといいさ。ただし、できれば殺すな。ただ殺さずに勝つのが難しいなら、それでも構わない」

　カイタチがそう答えたことで、アクアは目をぎらつかせ「了解」と答えた。

「どうやら来たみたいですね。僕の探知に引っかかりました」

　エルが落ち着いた様子で言った。

「へー、約束していた時間より少し早いじゃない？ま、早く戦えるから私としては嬉しいけどね」

　そう言いながら、アクアは呪文を唱え始めた。

「何度聞いてもアクアの“神速詠唱”はすごいな。何を言っているのか全くわからない」

　感心したようにカイタチが言った。

「まぁ、アクアの能力については、流石に凄いとしか言えませんね。高速詠唱ですら10倍速く呪文を唱え終わることができると言うのに、アクアの“神速詠唱”は100倍速く呪文を唱え終えることができますからね。その点に関しては褒めざるを得ません」

　アクアに対して毎度辛口だったエルもこの能力に関しては素直に認めている。そんな2人の少しの会話の時間だけで、呪文を唱え終わったのかアクアの前に魔法陣が浮かび上がった。そして魔法陣から出現したのは風の精霊であるシルフィーである。シルフィーは出現するとすぐにアクアに向かって片膝をついた。

「またも私を呼び出していただき、ありがとうございます」

「今日もよろしくね！シルフィー。あ、あと今回の相手は前のダンジョンにいた仮面の戦士だから、結構手強いと思う」

　笑みを浮かべながらアクアが言った。

「なるほど。あの者達ですか。私の風魔法を受けても何事もなく追いかけてきていましたので確かにかなり手強い相手だと思いますね」

「あれ、もしかして自信ない？」

「そんなことはございません。我が主人の期待に答えて見せますよ」

「うん、期待してる」

　そう言いアクアはカイタチとエルの方を向き「これで私は準備OKだよ」と言った。

「それでは、カイタチ様、邪魔者である仮面の戦士の2人は僕たちが相手をしておきますので、神器使いの相手はお任せします。お気をつけください」

　エルはそう言いカイタチに片膝をついた。

「2人とも、気をつけてな」

「はい！」「もちろん！」

　エルとアクアの2人は返事をして、森に向かって走り出した。カイタチはそんな2人を見送った後、戦いの間の中に入った。戦いの間は、至る所にランプがあり、そのランプの中に青い炎が灯っている。そのため、少し薄暗い感じがするが、見えないということはない。ダンジョン内は荒野のように岩があり、隠れるのに困難しないようだなとカイタチは思った。

　カイタチは近くの岩の上に乗ると座り込んだ。目を瞑り時が来るのを待っている。

　そろそろ目的地の戦いの間に着く頃だ。そう思い、俺はこれから戦うのだと内心自分に気合を入れる。

「止まって。どうやら向こうから来たみたい」

　トミがそう言ったのを聞いて、俺とライ兄様はそれぞれ足を止めた。事態は俺の思っていたよりも早く展開した。すぐに2人の人物と精霊が空を飛んで現れた。2人の人物は俺たちとある程度の距離をあけて地面に着地した。

「さてと、そこの仮面の戦士の2人に聞くわ。私たちに見覚えはある？」

　着地するなり、すぐに女の方が俺たち仮面の戦士にそう問いかけてきた。正直言うと見覚えはない。忘れられた都市で出会った時はこの2人はフードを被っていたので俺は顔を見ていない。それに相手の魔力を感知する魔法は俺には使用できない。だから俺にはこの2人があの時忘れられた都市にいた人物だという確証が得られない。仕方なくトミに小声で呼びかけた。

「俺の代わりに返事して」

　トミから小さくため息がするのが聞こえた気がした。しょうがないだろ俺には確証がないんだからと内心で文句を言う。

「もちろん、覚えているわ。20日に忘れられた都市にいた2人組ね。それにあの時の精霊と全く一緒のようね」

「あら、あなたが答えるのね。てっきり仮面の戦士のリーダーは男の方だと思っていたんだけど」

　痛いところついてくるなと思いながら「誰が答えても一緒だろ」と答えておいた。

「……それもそうか。ところで私たちは仮面の戦士に用があるの。皇子のあなたは先に戦いの間の方に行っていいけど、どうする？」

　相手の女がそう提案してくると怪しいと思わないわけではないが、俺の中では、ライ兄様は内通者ではないと思う。

「ライ皇子、先に行ってください。後から必ず追い付きます」

「……そうか、わかった」

　ライ兄様はそういい戦いの間の方へと走りだす。2人組と精霊は通り抜けようとするライ兄様に対し、特に何もすることはなかった。そのままライ兄様の姿は見えなくなった。

「本当に行かせてよかったの？」

　トミが小声で俺に聞いた。

「……多分な」

　先ほどのやり取りを見ていたら、少し自分の考えに自信をなくすが、それまでのライ兄様とのやりとりを思い出し、自分の考えを改めて信じることにした。

「それにしてもライ皇子をすんなり通すとは思わなかった」

　何気なく俺はそう呟いたが、この言葉に相手の女が反応した。

「こっちの提案に応じなかったら私が相手をしてもよかったんだけどね。第2皇子の相手は私たちの皇子にやってもらうとするわ」

　そう女が言うと、もう1人の男の方が舌打ちしたように聞こえた。正直演技かと思ったが、そういうふうにも見えない。マジかよこいつらと思いながら、トミの方に少し顔を向けるが、トミは油断なく戦闘態勢をとっている。多分内心では色々考えているんだろうなと思いながら、俺も敵に集中することにした。

「さてと、そろそろ始めますか」

　自分のミスに気づいてないのか、あっけらかんと女がそう言うと、後ろに控えていた精霊が中級魔法である“突風波“を放った。油断せずに見ていたので正直避けるのも簡単ではあるが、俺はすぐさま纏を発動し俺の体全体を白いオーラが纏った。そしてさらに俺は右手に力を込める。力を込めた拳は、銀色に輝く。向かってくる“突風波“に俺はその拳をぶつける。

「崩拳！」

　俺の拳がぶつかると“突風波“は霧散するように消え失せた。それを見た相手の2人は、少し驚いたような表情をしていたがすぐに平常心を取り戻し、また女の方が話しかけてきた。

「聞いていた通りかなり強そうじゃない。それに纏を発動してくるなんてね」

「精霊を相手するなら纏を発動するのは普通だろ？」

　俺はそう返事し、もう1人の男のいた方を見るといつの間にかいなくなっていた。俺の背後に気配を感じたが、俺はそれを無視した。男が俺に襲い掛かろうとした瞬間トミが、自分の武器のクリスタルロッドを持ってその攻撃を止めた。ガキィンと音が鳴り響く。どうやら相手の男は2本の短剣を両手で持っていた。

「いきなり、後ろからうちの大将を獲れると思ったの？」

　鍔迫り合いの状態でトミが相手を押し返す。トミの力が思ったよりも強かったのかどうか知らないが、相手の男は引いた。背中合わせの状態で俺とトミは相手を見る。ふと思ったことがあったので俺は声に出した。

「お前ら名前何て言うんだ？」

「アクア。そんで、あんたの後ろにいるのがエル。そして私が使役している風の精霊がシルフィー」

この質問にアクアはあっさり答えた。

「そうか。俺はあかだ。で、後ろにいるのがむらさきな」

「あかね。あんたがリーダーなんでしょ？私と1対1の勝負をしなさい」

「1対1？まぁ、それは構わないが」

　2対2で戦うと思っていた俺は1対1の提案をしてきたことに驚いた。まぁ俺としてはどっちでもいいからその提案は乗るんだけどね。

「じゃ、決まりね」

　そう言ったアクアは笑みを浮かべ、移動した。風の精霊もそれについていっている。

「気をつけろよ」

「あなたもね」

　俺は相棒であるトミにそれだけいいアクアの後についていった。アクアと風の精霊は空を飛んで移動している。いいなーと思いながら、俺は走りながら追いかける。数分走り続けていると、相手が地面に着陸した。

「この辺でいいよね」

　その場所はちょっとした広場である。

「ここなら思う存分暴れられるわよね」

「お任せください。主人」

　シルフィーは早速魔法陣を展開した。魔法陣から飛び出してきたのは実態のない風の狼だ。この技は上級魔法の“狼風“だよな、なぜ詠唱なしで発動できるんだと思いながら、先ほどと同じように右手に力を込める。俺の右手が銀色に光る。俺の直前にまで迫ってきた“狼風“をその右手の拳で迎え撃った。俺の右腕が触れると上級魔法の“狼風”は、中級魔法の“突風波”と同じように霧散した。

「主人。どうやら私では、仮面の戦士に勝てないようです」

「……そう見たいね。時間稼ぎお願いしていい？」

「お任せください」

　そう言うとアクアは呪文を唱え出した。早すぎて何を言っているのか俺にはわからない。“高速詠唱”の類だと思うが、あれは確かに早いが断片的に聞き取れる部分もある。しかし、あのアクアが唱えている呪文は早すぎて全くわからない。不気味なものを感じ、またそれを見たいという好奇心が俺の中で渦巻いた。

「呪文が唱え終えるまでの時間稼ぎがしたいのか？」

「そう言うことです。それまであなたのお相手は私がします」

「そうか」

　流石に好奇心で相手の思い通りの展開にさせるのはよくないと思い、俺はシルフィーに向かって走り出した。シルフィーは俺が向かってくるのを読んでいたかのように、魔法陣を展開し、“狼風”を放っていた。俺はその“狼風”を崩拳で霧散させる。シルフィーは俺に休みを与えることなく、魔法陣を3つ展開している。その3つの魔法陣から“狼風”が放たれている。時間差なく3つの“狼風“が俺に向かってきたので、俺は右手を横払いのように振るい全ての“狼風“にあて、その全てを霧散させた。

「厄介な能力ですね」

　そのシルフィーの言葉にこっちのセリフだと言いたくなる。こちらは、近づきたいというのに、これ以上近づくと流石に“狼風“に反応できなくなり、大ダメージを受けてしまう。今でもシルフィーとの距離は10mとかなり近くにいるのだが、これが纏を発動した状態で反応できるギリギリの距離だ。早くシルフィーを倒して、アクアの呪文の邪魔をしたいというのに、厄介な状況だなと現状を分析する。

「なぜ、お前は上級魔法を詠唱なしで発動できるんだ？」

　現状を分析したが、簡単に近づける策は思いつかず、疑問に思っていたことを俺は口にした。シルフィーは時間稼ぎになると思ったのか、俺の質問に答えてくれた。

「私たち精霊は自分の系統の魔法なら、詠唱なしで魔法を発動することができるからです」

　そう言ったシルフィーは油断なく俺を見ている。油断して話していたら走り出そうと思っていたが流石にそんなに甘くはないらしい。

「見たまんまの通りあんたは風の魔法を詠唱なしで発動できるということか」

　精霊にはそんな能力があったのかと俺は内心で驚いた。どうやってこれ以上距離を詰めようかと考えていたら、アクアの呪文の声が聞こえなくなっていた。

「シルフィー時間稼ぎご苦労様」

　アクアの目の前に今まで見たこともないような黒色の魔法陣が浮かび上がっていた。

「どうやら私の出番はここまでのようですね」

　精霊は2体同時に召喚できないのか、シルフィーの姿がどんどん薄くなっている。

「あんたとは決着つけれないのか」

　どうやって近づこうか考え付かなかったところで、勝負がお預けになったことに、俺は思っていたよりもがっかりした気持ちになっていた。

「そうがっかりした顔をしないでください。私には君に対する決定打はありませんでしたから、あなたの勝ちのようなものですよ」

「そうか」

「ええ、ですが次に出てくる精霊は私よりもはるかに強いです。私と同じだと思っていると痛い目を見ますよ」

　そう言い残しシルフィーは消えた。敵であるはずのシルフィーが助言のようなものを俺に言ったのは、俺のことを認めたからなのだろうか。だが、そんなことを考えている間に、魔法陣から次の精霊が現れた。その存在感はビリビリと肌に伝わってくる。今まで感じたことのないような感覚に戸惑いながらも俺はその精霊を観察する。その精霊は全身を黒で纏った衣服を着ている。大きさはシルフィーよりも大きく、3mくらいの大きさはあるだろう。顔にも黒いローブがあるので表情は見えない。そもそも精霊には決まった顔というものはないかもしれない。そして、一際目立つその精霊が持っている黒い剣に注視した。3mの大きさの巨体にピッタリと収まっている感じからして、その黒い剣の大きさは普通よりも大きいと考えるのが妥当だろう。

「黒衣の騎士よろしくね。けど、少し待っててね。あの仮面の戦士と少し話したいから」

「了解した」

　黒衣の騎士と呼ばれたその精霊は大人しく立っており、動く気配はない。

「知っているかしら？基本的に1対1で呪文を行うなんて真似、普通の魔法使いならしないわ」

　本当に俺に話したいことがあるのか、アクアはそう話しかけてきた。そのアクアの顔には余裕が伺える。

「あんたが精霊使いだから、呪文を唱える余裕があったってことか？」

「そうね。それも少しあるけど、上級魔法を扱うには、数時間の詠唱が必要よ。いくら精霊のサポートがあってもそんな長い時間は詠唱できない。例え高速詠唱があったとしてもね」

　高速詠唱という特技は普通に詠唱するよりも10倍の速さで詠唱を終わらせることができる。しかし、いくら10倍速く終わらすことができる“高速詠唱”と言っても、1時間以上はかかる上級魔法を発動するには最低でも6分はかかる。それでも時間はだいぶ短縮されているが、アクアは俺とシルフィーが戦っていた約3分という時間だけで、詠唱を終わらせていた。つまり、3分を埋めたなんらかのカラクリがあり、それは奴の能力に関連するものなのだろうと俺は考えた。

「どうやら、何か結論がでた顔をしているわね。いいわ特別に教えてあげる。私の能力は、神速詠唱っていうの。高速詠唱が10倍速く呪文を唱え終えることができる能力だとすると、神速詠唱はそのさらに10倍。つまり、通常の呪文よりも100倍速く呪文を唱えることができるわ。私はこの特殊な力でSランク相当の実力だと言われているわ」

　うーん、100倍か。俺は少し考える。つまり、アクアは3分呪文を唱えていたから、本来の時間だと5時間はかかっているということだ。5時間かかるはずの呪文が3分で終わるなんて、流石に反則すぎやしませんかねと内心で愚痴をこぼす。というか、その“神速詠唱“という特技があれば、最上級魔法を何連発も矢継ぎ早に打たれたのなら対処はできないなと、ふと思った。そんな俺の考えを見透かしているのかアクアが続けて言葉を発した。

「流石の私も魔力量は普通の魔法使いよりも少し多いくらいなの。最上級の魔法を何発も打つことはできないわ」

「……なぜ敵である俺にそんなことをわざわざ教える？」

　俺はとりあえず気になったことを聞いてみた。

「今の魔法……いいえ、精霊魔法を唱え終え、黒衣の騎士を召喚できた時点で私の勝利が確定したからね。謎は少ないまま死んだ方がいいでしょ？」

「……そうかもな」

「じゃ、始めましょうか。黒衣の騎士、目の前にいる仮面をつけた奴が敵よ」

「了解した」

　黒衣の騎士がそう頷いたかと思うと10mはあった俺との間合いを瞬時に詰め、俺に黒剣を斬りつけてきた。俺はその攻撃をギリギリのところで交わし、すぐさま先ほどと同じ10mくらいの間合いを保った。しかし、俺の右肩の衣服が切れ、少量だが血が噴き出した。どうやら、避けていたと思っていた斬撃は避け切れていなかったらしい。10mの距離があり、纏状態で避けきれないことにいよいよやばいなと俺は思った。先ほどと同じ距離では、また黒衣の騎士の攻撃が当たってしまうので、俺はさらに距離を広げた。

「黒衣の騎士、少しストップ」

「了解した」

　精霊使いの言葉ですぐに黒衣の騎士は動きを止めた。

「正直今の一撃で、勝負を決めれなかったのには少し驚いたわ。纏ね。聞いているわ。仮面の戦士。あなたのこと。纏をずっと継続していられるんでしょ？すごいね。正直あなたのそれも十分反則だと私は思うわ。けどね、いくら纏で数倍戦闘能力を上げたとしても、人間じゃ最上級の精霊に勝てないわ。黒衣の騎士もう攻撃を始めてもいいわよ」

　そういうと同時に黒衣の騎士が再び襲いかかってきた。

　振り下ろされた剣を俺は、受け止めることはせずに全て回避に専念する。しかし、回避に専念していても徐々に黒衣の騎士が俺の動きを見切ってきたのか攻撃は当たってくる。どれも致命傷にはならないが、俺の体はどんどん切り傷が増えてくる。このままだとジリ貧になるので、崩拳によるカウンターを狙うことにした。

「避けてばかりでは私には勝てないぞ？」

　黒衣の騎士が攻撃の手を休めずにそう喋りかけてきた。

「そうだな。けど、そんな余裕なことを言っていていいのか？」

　黒衣の騎士が突きの攻撃をしようとしたところで俺は右拳に力を込めた。その拳は銀色に光る。

「崩拳！」

　そう叫び、俺の“崩拳“と黒衣の騎士の突きがぶつかる。ぶつかり合いは互いに一歩も譲らない。俺は全力で殴っている。崩拳という技は内部に衝撃を与える防御不可避の技だ。その攻撃が当たれば内部を破壊できると俺は考えている。しかし、その考えは少しばかり甘かったらしい。なぜなら、黒衣の騎士の黒剣は破壊されずに俺の拳とぶつかりあっているからだ。

「どうやらその拳は内部からの攻撃を可能にする技のようだな」

「ああ、そうだがなぜお前の剣は破壊できない」

「ならば、精霊と戦うには少しばかり相性が悪かったようだな」

「なんだと？」

　ぶつかり合っていた突きと崩拳の均衡が崩れた。互いに交錯する。結果は俺の右腕が斬りつけられており、血が噴き出した。現状に思考が追いつかない。俺は黒衣の騎士の方を見た。崩拳が当たったというのに、黒剣には特にダメージはなさそうだった。

「理解できないという表情だな。教えてやろう。精霊に内部からの攻撃が効かないのは、精霊にとっては表面も内部も同じだからだ。どちらも同じで、防御することができる。そして、それは精霊が持っている武器も同じだ」

　黒衣の騎士が言っていることはあまり理解できなかったが、普通の攻撃を当てるのも内部破壊をもたらす崩拳を当てるのも同じということでよかったのだろうか。どうやら、精霊と人間では体の構造が全然違うらしい。理解できないわけだ。俺はそう結論づけた。

「このままじゃやばいな」

　俺は小さく愚痴をこぼした。

「何がやばいのだ？貴様はまだ全力じゃないのだろう？」

「……なぜ、そう思った？」

「その程度のことはわかる」

「ちょっと待って！？あなた全力で戦っていなかったの？！なんで？！」

　俺と黒衣の騎士の会話を聞いていたのか、アクアが話に参加してきた。

「なんでってこっちはお前ら2人を殺すつもりはないからな」

「こっちは殺す気でやってんのに、あんたは殺すつもりはなく戦っていたの？意味わかんない！」

「意味わかんないと言われても俺は俺の考えで動いているからな。そっちが俺を殺そうと思ってるのは自由だが、俺がお前らを殺さないように戦うのも自由だろ？」

「しかし、全力を出さなければ貴様はここで我に殺されるぞ？」

　そう言われると、確かにそうだなと俺は思った。さて、どうするかと思っていると黒衣の騎士はさらに言葉をつづけた。

「ならば貴様に良いことを教えてやろう。契約した精霊は例え死ぬような一撃を受けたとしても次の日には復活している。現に我も我が主人の主人、つまりカイタチ様に一刀両断されてしまって復活をした身だ」

　精霊は死なない？少なくとも俺はそのことに衝撃を受けた。

「死なないというのは、本当なのか？」

「ああ、本当だ。まぁ貴様が全力を出したところでカイタチ様の足元にも及ばないだろうな。なぜなら貴様は神器使いではないからな。せめて我を一撃で倒せるくらいでなければ、カイタチ様と戦うのはやめた方が良いだろうな」

　黒衣の騎士の言っていることを俺は半分聞き流していた。俺にとって今重要なのは、俺が全力で戦っても目の前にいる精霊は死なないということだ。念のためアクアの方にも聞いてみる。

「おい、アクア！精霊が死なないっていうのは本当なのか？」

「ええ、本当よ。これであなたも全力で戦えるんじゃない？その話が本当ならね」

　俺はその言葉を聞いて精神を集中させた。もちろん、集中しているときも相手の動きは観察している。どうやら、黒衣の騎士は俺の様子を窺っているようだ。ならば遠慮なく全力を出すとしよう。

「確かに神器使いは化け物だ。少なくとも山一つをぶっ飛ばす力を得ているんだ。それは認める。だがな、あいつらが化け物だからって、神器を持っていない俺が化け物ではないとなぜ思う？」

　俺の全身が赤く輝く。それを見た黒衣の騎士は油断なく剣を構えた。黒衣の騎士が構えたと同時に俺はすでに黒衣の騎士の目の前まで近づいた。それに反応して黒衣の騎士が黒剣で俺を斬りつけようとするが、俺はその斬撃を左腕で受け止めた。先ほどとは違い、無傷で俺はその斬撃を受け止めることができた。

「なっ！？」

　これには衝撃を受けたのか、黒衣の騎士が初めて慌てたような声を出した。俺は右拳に力を入れる。その拳は銀色ではなく、金色の輝きを放つ。俺はその拳を黒衣の騎士のお腹部分に全力で叩きつけた。あまりのスピードに黒衣の騎士は防御の態勢とる暇もなく、まともにその拳を受けた。そして、その拳を受けた黒衣の騎士の体は一瞬にして霧散した。その光景が信じられないのかアクアは大きく目を見開いていた。俺はその隙を見逃さず一瞬でアクアの目の前まで行った。俺は赤く光っている体を白い光を放つ纏に戻し、アクアのお腹に俺の手のひらを添えるように置いた。ただ、優しくおきはしたがその右拳は銀色の輝きを放っている。

「崩掌」

　俺がそういうとアクアは吐血し、後ろに倒れた。倒れたアクアの様子を見ると気を失っている。

「ふー、久々に全力を出したな。それにしてもいつの間にかあたりは真っ暗になっているな。……さて、トミの方はどうなったかな？」

　俺は少しだけ地面に座り込んだ。

時はカルディックとアクアの2人が移動したタイミングに遡る。

「こちらも場所を移動して戦うとするか」

　エルがトミに提案してきた。トミは警戒しながらもその提案に賛同するように頷いた。頷いたのを見てエルが走って移動し始めた。トミはエルの後ろについていく。

「さて、この辺でいいだろう」

　数分走ったかと思うとエルがそう言った。特に先ほどと場所の雰囲気は変わっていなく、あたりは森である。変わったことといえば、あたりが先ほどよりも暗くなってきたことである。周りを確認していると不意に、エルの姿が消えた。トミは後ろを振り向き、クリスタルロッドを構える。次の瞬間、二つの短剣がトミの構えたクリスタルロッドに当たった。

「どうやら完全に僕の動きは探知できているらしいね。暗くなってきたのにいい探知能力だね」

「ええ。問題ないわ。ただあなたほどの探知能力は私にはないけどね。まぁそれも短距離の戦いなら関係ないけどね」

　鍔迫り合いしていた2人は互いに後ろに身をひいた。

「僕の方が君より探知の能力が優れていると？」

「ええ。ダンジョンの時も今回の時もそっちから仕掛けてきたしね。流石に私よりも遠い距離を感知できると思うわ。まぁだからって、私より実力が上とは限らないけどね」

　そういいトミは不敵な笑みを浮かべた。

「そいつは面白い冗談だね。僕よりも実力が上のつもりかい？」

　そう言ったエルは無表情のままだ。そして、エルは再び消えトミの後ろから2本の短剣を振りかざす。トミはそれをみえているかのように今度は振り向かずにクリスタルロッドを背中に置くように構えた。またも2本の短剣とクリスタルロッドが交錯する。

「後ろから狙うの結構好きなようね」

　そう呟いた瞬間に、少し離れた場所から異様な気配をトミは感知した。

「どうやら君も今の気配を感知したようだな」

　そう言ったエルは、いつの間にかトミの前5mほどの距離に移動していた。

「ええ。また感じたことのない力ね。あなたのお仲間がやったのかしら？」

「そうだな。この力は、アクアが黒衣の騎士を召喚したものだろう」

「……黒衣の騎士？」

「最強クラスの精霊のことさ。黒衣の騎士を召喚したとあっては君のお仲間は終わりだよ」

　エルは不敵に笑った。そのエルの笑みに少し不機嫌になったのかトミは苛立ちを込めた声で言った。

「終わり？なんで？」

「この精霊の力を貴様も感じるだろう。この力はいくらS級といえども普通の人間には勝てない力だ」

　確かに今まで戦ってきたSランクの魔物たちとは違う異質な力をトミは感じ取っていた。それでもなお、トミは先ほどの苛立ちを込めた声が嘘かのように、笑みを浮かべて言った。

「そうね。あなた達の強さはよくわかっているつもり。痛い目にもあったしね。けど、何も強いのはあなた達だけじゃない」

　その物言いが引っかかったのかエルは眉を顰めトミを観察する。特に何も変化がないと思った瞬間、エルは何かに縛られたように体の上半身を拘束されてしまっていた。

「こいつはなんだ？」

　心底驚いた声でエルが言った。

「どうやら、あなたは人の気配を察知することは長けていても魔力を探知することに関しては、そこまで凄いものじゃないみたいね」

　トミがそう言うと、エルを縛っていたものが可視化できるようになっていた。エルの体を縛っていたのは鎖だった。その鎖のせいでエルは両腕を使うことができない。

「いつからこんな鎖を用意していた？」

「あなたがこの場所を決めて襲ってきた時からちょっとずつ準備しておいたの。まぁ、準備していたのが気づかれなかったのは嬉しい誤算だけどね」

　その余裕の物言いにエルはムカついたのか声を荒げて言った。

「こんなもので縛った程度でこの僕に勝てると思ったのか。ただの冒険者風情が！！」

　エルの荒げた声にトミは平静を崩さない。

「だったらその拘束、解けるものなら解いてみてよ」

「はっ、舐めるなよ。こんなもの魔法や、纏を使用すれば簡単に引きちぎれるんだよ」

　エルはいつもの通り魔力を練ろうとする。しかし、エルは魔力を練ることができない。いや、それどころか自身の魔力を感じることができない。

「どうやら、気付いたみたいね。いつも通り魔法を使うことができないことに。教えてあげるよ。私の鎖で拘束されたものは、魔力を練ることができないの」

　まぁ、縛られる前に発動していた設置型の魔法やカルディックみたいに最初から纏を発動していた場合は、発動したままなんだけどねと心の中でトミが呟いた。

「君が僕に勝ったところで、君のお仲間はアクアにやられるだろう」

「だといいね」

　トミは頷き、クリスタルロッドを掲げて走り出した。そして動けないエルに向かってクリスタルロッドを振り下ろす。クリーンヒットしたクリスタルロッドに、エルは口から血を吐き気絶してしまう。

「私の勝ちね」

　トミがそう言ったと同時に、先ほどよりもさらに上の異様な気配を探知した。しかし、その気配には身に覚えがあったのかトミは笑った。

「この気配を探知せずに気絶したのは、あなたにとっては幸運かもね」

トミは今の戦いで少し疲れたのか、腰を下ろして地面に座り込んだ。

カルディックとトミがそれぞれ戦い始めた時間に遡る。

「準備はできているのか？」

　しばらく戦いの間のダンジョン内で座り込んでいたカイタチは誰かに話しかけるように声を発した。ダンジョン内にはいくつもの岩があるので奥の方は見えない。この戦いの間と言うダンジョンは、その名の通り戦いをするためのダンジョンであり、特に階層もなく横に大きい。こちらの声が届いたのか返事がきた。

「ええ、ばっちり。あとはライ兄様が来るのを待つだけね」

　そう言いながら、その人物はダンジョンの奥から姿を現した。

「ところで、お前は王国に残るように言われていたんだろ？サイール第2皇女」

「そっちは大丈夫。信頼できる人物に私の変装をしてもらって私の部屋で待機してもらってるから」

「それなら問題ない。それより、国を裏切るようなことをして本当によかったのか？」

　そのカイタチの問いかけに、サイールは眉を顰める。

「いいわけない！……ただ、アリア帝国とトロン王国が戦うとなると被害は甚大なものになる。そうなると私の弟たちはどうなる？成人しているカルディックは間違いなくその戦いに召集されるだろう。5年前からカルディックとは会っていないとはいえ、その時は間違いなくカルディックは弱かった。もし、そんな戦争に駆り出されるようなことがあればカルディック、いや、私の弟や妹たちは間違いなく死んでしまう。それは私には耐えられない。だったらそうならないためにもとっとと戦争を終わらすべきでしょう？」

　サイールの目から水滴が落ちた。改めて国を裏切る覚悟を問いただそうと思ったいたカイタチだが、そのサイールの表情を見て少しばかり申し訳ない気持ちになった。

「そうか、余計なことを聞いてすまなかったな」

「あなたのことは信用しているから、気にしていないわ。それに、これまでのあなたの行動は信じられるものでもある。だから、引き続き私との約束はちゃんと守ってね」

「アスカ大陸にいる人物は誰も殺すなという約束だったな。ああ、ちゃんと守るさ。それに私もあまり人殺しは好きじゃない」

　それで話が終わったのか、お互いに黙った。ダンジョン内はお互いの息遣いの音だけが聞こえる。

　それから暫くして、戦いの間の入り口の扉が開く音が2人には聞こえた。その気配を察知して、サイールは自身の周りを球体のようなバリアで囲った。それを見たカイタチはサイールの気配を感じられないことに気づく。サイールはそのままカイタチから離れた場所の岩陰に姿を隠した。

「お前が帝国第4皇子のカイタチか？」

　ダンジョン内に入ってきた人物がそう問いかけてきた。

「ああ、そうだ。そういうお前は、トロン王国第2皇子のライでよかったか？」

　カイタチにもはっきり見えるくらいに、ダンジョン内に入ってきた人物の顔が見えた。

「ああ、その通りだ。俺がなぜこの場所にきたのか知っているだろう？」

　ライがそういい腰の鞘に収めている剣を取り出す。カイタチも自身の腰に収めている剣を抜く。そして互いに動き出し、お互いの剣と剣がぶつかりあう。互いの剣の実力が互角のなのか数度撃ち合っても、2人の剣はぶつかりあう。カイタチは何度目かの鍔迫り合いをした後に、後ろに下がり剣を鞘に収めた。その構えからライはカイタチが狙っているのは抜刀による高速の斬撃であることを見抜き、油断なく剣を構える。ライの予想通りにカイタチはライに向かって突っ込んできた。カウンターをしようと考えていたライは、カイタチの想像以上のスピードに驚いたのか、防御することに神経を注いだ。

　カイタチとライがすれ違う。カイタチがライの後ろに来た時に、ライの肩から多少の血が噴き出していた。ライは自身の肩口から噴き出している血を見て、防御に神経を注いでよかったなと思った。もし、カウンターをしようとしていたら今の一撃で決まっていたなと内心で反省する。そう反省したと同時に、何か今まで感じたことのないような気配をダンジョンの外から感じた。

「お前、ダンジョンの入り口のドアを少し開けているな」

　カイタチもその気配を感じたのか、ライにそう問いかける。

「なんのことかな」

　少しとぼけるようにライがそう言った。しかし、とぼけることに意味のないことをライは理解していた。ダンジョン内では、入り口のドアを閉めるとダンジョン外にいる気配など感知することはできない。つまり、外側の気配を感知できるのはダンジョン内が密閉状態ではない時だ。ライはダンジョンに入る際に、入り口のドアを少し開けていた。そうしたのは、仮面の戦士の2人が隠密に長けていることを知っていたからだ。ドアの開閉音が鳴らなければ、気づかれずに入ることができると思っていたが、これほどの気配が外側から感じれたことによって、こちらの狙いも気づかれてしまった。しかし、いくら密閉状態ではないと言っても、多少の気配なら感じることはできない。それの意味することはつまり、今感じている気配はとてつもなく大きいということだ。

　そんなライの考えを見透かすようにカイタチが喋り始めた。

「こっそり仲間に侵入させて私の隙を伺おうと考えていたのか知らないが、無駄なことだな。そして残念なことに、この異様な気配は私の仲間のものだ」

「そうか」

　落ち着いたそぶりでライはそう答えるが、内心では少し動揺していた。『この気配が奴の仲間のものだとしたら、仮面の戦士がやられるのは時間の問題かもしれない』そう思い、ライは自身の心を落ち着かせるために、深く息を吸い吐いた。そうすることで、頭が少しばかりクリアになった気がした。

「どうやら、相当焦っているようだな」

　カイタチは不敵な笑みを浮かべている。ライは再び動き出し、カイタチもそれを見て動き出した。またも互いの剣がぶつかり合う。

「どうした？神器解放しないのか？」

　挑発するようにカイタチがそう言った。ライはその挑発には乗らずに、鍔迫り合いを繰り返す。しかし何度繰り返しても、カイタチにダメージを与えることはできず、鍔迫り合いの形となる。その繰り返しによってライの頭が冷静になったのか、現状を分析するように呟いた。

「抜刀以外では、どうやら剣の実力は互角らしいな」

「そうらしいな。だが貴様の姉とは抜刀も互角だったぞ」

　またも挑発するようにカイタチが言った。その物言いに多少頭に血が上ったライだが、次の瞬間先ほどよりもさらに強力な気配を感じた。その気配にカイタチも気づいているのか、信じられないと言った表情を浮かべていた。ライはその隙を逃さずに剣で斬りかかろうとするが、驚いた表情を見せながらも油断していなかったのか、カイタチはライの攻撃をギリギリのところで避ける。カイタチは少しだけライとの距離を空けた。

「あまり外のことばかり気にしない方がいいぞ」

　先ほどとは違い、落ち着いた様子でライがそう言った。それと同時に外の異様な気配は消えていた。一瞬何のことか理解できていなかったカイタチだが、自身の左腕から血が噴き出したのを見てその意味を理解した。ギリギリで避けたと思っていた斬撃は少しだが当たっていたのだ。そのことにも驚いているが、今はもう感じなくなっているが外の異様な気配が気掛かりであり、カイタチの顔は動揺を隠せていない。

「どうやら、先ほどの異様な気配には身に覚えがないようだな」

　いつまで経っても動揺を隠せないカイタチに向かって、ライがそう言った。しかし、その言葉で少し落ち着きを取り戻したのか、カイタチはライを見据え、自身の剣を左腕に当てた。カイタチの持っている剣が緑色に光ったかと思うと、カイタチの受けた傷口が見る見る回復していく。

「それが回復の神器か。厄介だな」

　そうライが呟くが、その言葉が聞こえていないのかカイタチは心ここにあらずといった感じだ。取り繕うように行動しただけであり、カイタチの動揺は隠せていない。こちらを見据えてはいるが、先ほどまでの隙のなさはないようにライは見えた。勝負を決めるのならここだと思い、ライは自身の中の魔力と持っている神器に対して力を込めた。

「神器解」

　神器解放と唱えようとした瞬間にライの周りに魔法陣が浮かび上がった。その魔法陣の中心にライがいる。ライは不思議に思ったが、再び「神器解放」と唱えた。しかし、ライの身体は変化することはない。そして、身動きするのもかなり困難であることに気づく。ライはカイタチの方を見るが、特にカイタチは何もしておらずただ黙って立っているだけだ。

「ライ兄様」

　声が聞こえた方向にライは顔を向けるとそこには、サイールがいた。その顔を見ただけで全てに納得いったのか「そういうことか」とライが呟いた。

「ごめんなさい」

　サイールはライに頭を下げて謝った。それと同時にカイタチは「神器解放」と唱えていた。カイタチの姿が変わる。肩にまで掛かるほどの長髪になっており、髪の色も緑色となっている。服装も鎧姿となっており、白色の見たこともないような綺麗な鎧を装備している。

「一陽来復」

　カイタチは小さくだがそう呟いており、ライの耳にもその名前は聞こえていた。

「一陽来復、それが貴様の神器解放か？」

　身動きが取れないライはそう呟く他なかった。

「先ほどの気配には私も驚いたよ。……この神器解放を見せたのはせめてもの情けだ」

　カイタチは少し悲し気な表情を浮かべいたが、構わずライに向かって突っ込んだ。

「しくじったな」

　ライは諦めたようにそう呟く。カイタチはすでにライの目の前に来ており、剣を振り下ろした。特に何も抵抗できずにライはその振り下ろされた剣を受け、後ろに倒れ込んだ。辺りはライの血が飛び散っており、近くにいたカイタチもその血を浴びていた。

「勝負に水を刺されるとはな」

　決着がついたのを確認したカイタチは文句を言うようにサイールに言った。

「ご不満だったかしら」

「そうでもない」

　だが、戦いが決着したというのに、ライは神器解放を解除しない。

「なぜ、その状態から元の状態に戻らないの？」

　不思議そうにサイールが聞いた。

「お前は何も感じていなかったのか？」

　そう言ったカイタチはあたりを警戒しているのか、臨戦態勢のままだ。

「私のさっきの球体のようなものは相手に気配を察知されるのを気づかないようにと私自身をガードするための魔法。そして、それにはデメリットもあるわ。それは私にもその球体にいる限り、外の魔力や気配を感知できないということよ」

「そうか」

　その呟きに眉を顰め、サイールがカイタチに聞いた。

「外で何か感知したの？」

　そう質問したが、すぐにその答えは返ってきた。しかし、カイタチの言葉からではなく、圧倒的なそして、神器解放と似たような得体の知れない気配をサイールが感じたからである。そして、その気配は岩陰からものすごいスピードでカイタチ向かって飛び出してきた。

時刻はカイタチとライの決着がつく前に遡る。

　俺はアクアとの勝負が決着した後に座り込んだが、すぐに立ち上がった。とりあえず、アクアが気絶している場所はいつ魔物が来るかわからない場所なので、とりあえずアクアを後ろに抱えて、戦いの間に向かおうとする。俺が移動しようとした瞬間に俺の持っている通信機の音がなった。通信機をオンにするとトミの声が聞こえてきた。

「そっちは決着ついた？」

「ああ、これから戦いの間の方に向かうところだ」

「了解。じゃ途中で合流しましょ」

　それで通信は切れた。俺はアクアを抱えながら、それなりのスピードを出して走った。数分走ると、通信で言っていたとおりトミと合流した。

「お前の相手のエルとかいうやつはどうしたんだ？」

「そのまま置いていたら危険だから、私の魔法で隠してるよ」

「魔法が使えるっていいな」

「まぁあなたみたいにおぶらなくてもいいっていうのは便利かもしれないね」

　トミは少し笑みを浮かべながらそう言った。くだらない話をしていると戦いの間のダンジョンが見えた。戦いの間のダンジョンにつくと、俺は入り口の横のところにアクアを寝転ばせた。

「念のため、魔物に見つからないようにしておいてくれ」

「了解」

　そういい、トミは高速詠唱で呪文を唱えた。簡単な魔法なのかすぐにアクアが寝転んでいる地面のところに魔法陣が浮かび上がり、アクアを包み込むように球体のようなものが取り囲んだ。

「これで大丈夫と思うよ」

　そうトミが言った瞬間、戦いの間のダンジョンから異様な気配を感じた。入り口である扉をよく見ると少し開いていた。

「ダンジョンから気配を感じると思ったら、入り口が開いていたなんてな」

「多分だけど、第2皇子のライが私たちのために開けておいたんだと思う」

「なるほどな。じゃあ、今のうちにこっそり入るか」

　俺はそういい後ろにいるトミの方を向いた。トミは何か考えているのか難しい表情を浮かべていた。

「ちょっと待って」

「なんだ？」

「第2皇子の狙いはそれで間違ってはいないと思うけど、正直相手にも気づかれていると思う」

　俺にはトミの言いたいことはよくわかっていない。なので質問した。

「なぜそう思う」

「あなたが力を解放した時、私はちゃんと感じ取っていた。このダンジョンのドアが空いていたのなら、多分相手も感じ取れていると思う」

「なるほど」

　トミのいうことは最もだと思った。けどやはりこっそりダンジョンに入ることは変わりない。しかし、予定外のことが起きたとしてもこれで慌てずには済みそうだと思った。

「わかった。それを踏まえて、こっそりダンジョンに侵入しよう」

「了解」

　そういい俺とトミは、互いに限界まで気配を消し、戦いの間へと入った。

　ダンジョン内に入って少し進むと、空中に魔法陣が浮かび上がっているのが見えた。そして、その中心にライ兄様がいる。その奥には白銀の鎧を纏った人物がいる。おそらくあれが帝国の皇子のカイタチなのだろう。そしてもう1人見知った顔の人物のサイール姉様がいた。

「色々と驚きはあるが、あれが神器解放というやつか。その名の通り、なんか神々しいな」

　俺はかなり小さめの声でトミに話しかけた。

「そうね」

「さて、作戦だがライ兄様がやられた瞬間に俺が、あの帝国の皇子のカイタチに向かって突っ込む。トミは、サイール姉様の邪魔が入らないようにしてくれ」

「……あなたの兄様が死ぬかもしれないけど本当にいいの？」

「確証はないが、多分殺さないと思う。サイール姉様はきつい性格だが、家族を殺すような人じゃない。それにアトリ姉様も生きて帰って来たからな」

　俺は冷静を装ってそう言ったが、トミはそんな俺を黙って見ていた。あまり強がらなくていいのに、そんな声がトミから聞こえた気がした。

「俺の気配を感じたら、それが合図だ」

「了解」

　俺は、気付かれないであろう限界まで、カイタチに近づく。トミは、サイール姉様の方に近づいている。距離を詰めたところで、カイタチの剣がライ兄様に向かって振り下ろされた。それを受けたライ兄様は、血を噴き出し後ろに崩れおれた。俺はその光景を目に焼き付け、瞬時に自身の力を解き放てるように力をためる。カイタチがライ兄様を倒したので油断して神器解放から元の姿に戻ると思っていたが、解除せずに注意深く辺りを見ている。サイール姉様がカイタチに話しかけており、その内容から俺たちが来ていることを疑っており、トミの言っていたことは正しかったんだなと思った。カイタチの油断を狙えなくなったが、結局やることは変わらない。俺はありったけの力を身体全身に込めた。俺の全身が赤く輝く。俺はこの状態を纏鬼と呼称している。そして、俺は隠れていた岩陰から全速力で帝国の皇子に向かって飛び出した。

　帝国の皇子は周りを強く警戒したためか、俺が岩陰から飛び出してきたことにも驚かず、俺の動きに合わせて剣を自身の目の前に構えた。そのカイタチの行動に内心俺は驚いた。なぜなら、纏鬼は通常の10倍ほど身体能力が向上しているからである。

　トミはカルディックの力を感じると、サイール皇女に気付かれないように岩陰から飛び出した。トミの標的であるサイール皇女は、カルディックの力を感じたのかそちらを真剣な眼差しで見つめている。そして、自身の魔法でカイタチの援護をしようとした瞬間、トミが準備しておいた鎖により動きを封じられる。ようやくトミのことを認識したが時すでに遅く、トミの鎖によって、魔法を発動することができない。そして、あらかじめ設置してた魔法はもうライに使用しており、手詰まりである。

「こんなことで私が……」

　サイールは悔しそうに呟く。そんなサイールをトミは気にすることなく、カルディックとカイタチ、2人の皇子の決着を見守る。

　カイタチがカルディックのスピードに反応できたのは、神器解放の身体能力向上も似たようなものであるということなのだが、同じく10倍の身体能力が上がるとしても実際に見るまでは信用していなかった。反応されたことにカルディックは驚いていたが、しかしカルディックは迷いなくカイタチに向かって突っ込む。お互い必中の距離まで近づいた。カイタチはその手に持っている剣をカルディック向かって振り下ろす。対するカルディックは左の手で拳を握りこみ、それをカイタチが振り下ろしてきた剣に向かって殴りつける。剣と拳のぶつかりあいは拮抗しており、互いにさらに力を込める。両者の力が互角だったのか剣と左手は弾かれる。

　そのことがよほど驚いたのかカイタチは次の行動が遅れてしまった。そして、それが勝負の明暗を分けることとなった。カルディックはあらかじめ右の拳にも力を込めていたのだ。そしてその拳は金色の輝きを放っている。カルディックはカイタチの一瞬の隙をついて、その右拳をカイタチのお腹にぶつけた。

「崩拳壊」

　カルディックはそう呟くと同時に、カイタチは口から血を吐き出し、前のめりに膝から崩れおれ、そして両腕を地面についた。その一撃で勝負は決まったと言わんばかりにカルディックは“纏鬼“を解除し、一歩だけ後ろに下がった。

　“崩拳壊“を受けて死なないどころか意識を保つことができていることに俺は驚いた。そして、カイタチはさらに立ち上がってきた。

「これ……で私に……勝ったつもりか」

　カイタチは不適な笑みを浮かべている。だが、俺にはそれが限界だと思ったので警告をした。

「あまり無理はするな。お前はもう限界のはずだ」

「この程度が……私の限界……なわけ……がっ」

　カイタチは血を噴き出し神器解放状態の神々しい姿から、元に戻っていた。なぜ自分が今の状況になっているのかわからないのか驚きの表情を浮かべている。

「あんたの能力聞いているよ。部位が無くなっても再生することができるという恐るべき回復能力の持ち主だってな。けど、俺とは相性が少々悪い」

「どういう……ことだ？」

　俺は一瞬思案するが、言っても問題ないと思いカイタチに告げた。

「俺の崩拳壊は身体の内側から破壊する技だが、実はそれだけじゃない。相手の魔力すらも拡散させる能力がある」

「……なるほど……な。通りで回復……しづらいわけだ」

　カイタチは納得したように言い、そのまま後ろに倒れた。その顔は、どこかほっとしたような表情を浮かべているように俺には見えた。

「負けたのになぜそんな表情を浮かべている？」

「なぜだろうな？……安心、したのかも……しれない」

　その言葉を聞いた俺はすぐ側で倒れているライ兄様に近づきその生死を確認した。ライ兄様は生きている。安心という言葉、ライ兄様とアトリ姉様が生きているということ、それらを加味するとこれまでのことが繋がった気がした。このカイタチという男は帝国の世界統一なんてものは目指していない。多分今まで誰も殺さなかったのは、人を殺すのが嫌だったからなのだろう。だが、立場上侵略しないと自分の命を脅かすことになるかもしれない。俺には考えたくもないような様々な葛藤があったのだろう。

「安心か」

　俺はそう呟き、カイタチに近づく。ポケットからある瓶を取り出す。

「こいつは魔力回復薬だ。飲め」

　俺はそういい、その瓶に入っているものをカイタチの口に入れる。それは忘れられた都市の3層ボスであるサイカから採取した魔力回復薬だ。俺の行動に驚いているが、特に暴れることなくその回復薬をライは飲みきった。そしてその魔力回復薬を飲みきったライは「神器解放」と唱え、再び神器解放状態に戻った。そして、すぐにカイタチの身体が緑色に光ったかと思うと何の苦もなく立ち上がった。

「どうして私を回復させた？」

　戸惑いの表情を浮かべながらカイタチは問いかける。

　カルディックはどうやらカイタチに魔力回復薬を飲ませたらしい。まぁ、そんな感じの雰囲気はあったので不思議ではないかと私は思った。

「お前たちさえいなければ、私の計画は完璧だったのに！」

　悔しそうにサイールがそういう。先ほどからこのような感情的な言葉を私に向けてくる。現実逃避も兼ねてカルディックの方を見ていたが、どうやら向こうはそろそろ話が終わりそうだ。だから私も少しだけサイール皇女の相手をしようと思った。

「完璧な計画なんてこの世にはないよ。きっとどこかでほころびがでてくると思う。あとはそうだね私じゃなくて、うちのリーダーに話を聞いてもらうといいと思うよ」

　私がそういうと、さらに眉を寄せて悔しそうな表情を浮かべる。

　それからしばらくすると、カルディックとカイタチの話が終わったのか、その2人がこっちに向かってくる。

「私のもう1人の部下はどこにいる？」

　そう言われた私は、懐に入れておいた札を取り出す。

「このダンジョンを出てから東の方200mくらいのところにいるよ。安全面を気をつけて結界を張ってるから、近づいたらその札を出して。それでわかると思うから」

「この札か。ありがとう」

　カイタチは戦いの間を後にした。

　カイタチが出て行くのを確認し、俺はサイール皇女に近づいた。

「サイール第2皇女よ。なぜこのようなことをしたのですか」

「あなたにはどうでも言いことよ」

「どうでもよくありません。少なくとも俺はこの国の民の1人なのですから」

「……それもそうね。私はただ、この世から戦争を無くしたかったの」

「それは、また随分とでかいことですね。けど、それがなぜトロン王国を裏切って帝国側に着くのでしょうか」

「仮面の戦士。あなたは帝国第4皇子のカイタチに勝った。だから、あなたの実力は認めるわ。でもね、帝国はあなたが思っているよりも遥かに戦力を整えているのよ」

「まぁ、そうだと思いますね。戦力に自信がなければあんなラジオ放送はしないですもんね」

「ええ。だから帝国と戦争をしようとしたら間違いなくトロン王国の多くの国民たちが死ぬわ。それに最前線で戦う私の家族も」

「帝国の皇子に2人も家族を倒させておいてよく言いますね」

「それを言われると少し痛いわね。ただあの2人なら、死なないと思った。それにアスカ大陸の民は殺さないという契約も結んでいたしね。帝国の皇子の実力を知ったあの2人なら、帝国の軍門に降ると思っているわ」

「軍門に降るかどうかは別として実際のところ2人ともやられていましたしね。まぁ、そのことについてはもういいです。しかし、これが王選抜選を戦わない弟たちが襲われたならどうでしたか？」

　俺がそういうと、サイール姉様は怒ったように顔を歪めた。

「私が可愛い弟たちを売るとでも？」

「そう思われてもおかしくないでしょう？」

「ふざけないで。もちろん帝国の皇子と話をした時、弟たちは襲わないでといったわ」

「そんな言葉で向こうがいうことを聞くとでも。まぁ、今回このトロン王国に来た帝国の皇子はあの国には珍しくどこか優しげな雰囲気がありましたからね。ですが、それも子ども相手にだけでしょう。第5皇子からは20歳で成年となっています。第5皇子あるいは第4皇子が襲われていたかもしれませんよ」

　そういうと、サイール姉様は悔しそうに下唇を噛んで俺を睨んでいた。サイール姉様が特に言葉を話さないことを察して、俺は続けて言葉を発した。

「まぁ、第4皇子は実力があると言われていますが第5皇子は世間的にはかなり弱いと言われています。魔力はないのに魔術は全く使えず、魔法具なども全く使えない、トロン王国の失敗作だと」

「私の弟を侮辱するな！！」

　俺が第5皇子を揶揄すると第2皇女は怒りの表情で俺に噛み付いた。

「力があるあなたにはわからないでしょうね。あの子の苦しみはね。……あの子はずっと努力していたのよ。周りから何を言われてもずっと努力しているの。王族であるのに、あの子は王族としての才能に恵まれなかった。けどあの子はそれでも諦めず、今でもきっと努力している。あの子の悪口を言うのは他が許しても私は絶対に許さないわ」

「……それほど弟を思っているなら、どうして、帝国に着くのですか？」

「少なくとも帝国につけば、弟達は死なずにすむの。力のないあの子たちが、帝国の戦いで死なないで済むには降伏するしかないのよ」

「なるほど。家族のためですか。しかしそれは少々早とちりだと思いますがね。あなたの弟たちに力がないなんて、あなたの決めつけではないのでしょうか？」

　そう言い俺は仮面の戦士のアイデンティティとも言える仮面を取り外した。

「あなたに何がわかる……」

　サイール姉様はそこで言葉を切り心底驚いた表情を浮かべている。

「わかりますよ。俺はあなたの弟ですから」

　サイール姉様は、戸惑っているが時間が経つと同時にその表情は柔らかなものになっていく。

「そう、仮面の戦士はあなただったのね。カルディック。……強くなったわね」

　先ほどの敵意剥き出しと言った表情はもうそこにはなく、サイール姉様の目は優しさに満ち溢れていた。

「ええ、サイール姉様と会っていないこの5年間、いろいろな経験をしてきました」

「あの頃とは見違えるほど強くなっているのものね。そっか、この勝負私の完敗のようね」

　サイール姉様は諦めたように後ろに倒れた。その表情はどこかスッキリしているように見える。

「完敗かどうか知りませんが、まぁ今回の帝国の侵攻では誰の命も失っていないし、できるだけ刑は小さくなるように俺から父上に言っときます」

　そういうと少しだけサイール姉様は驚いたような表情を浮かべている。

「あなたの正体父上も知っているの？」

「そうですね。何度か父上からの依頼もこなしたりしています」

「あの親父」

サイール姉様がそう小さく呟くのが聞こえた。まぁ、聞かなかったことにしよう。

「これで今日の依頼は終わりかしら？」

　トミはほっとしたような口調でそういった。

「ああ、そうだな。じゃあ、我が家に帰るとするか」

終章（エピローグ）

聖暦2025年1月26日12時

　ここはアスカ大陸とカーム大陸の間にある海の上であり、カイタチ皇子達は来た時と同様に精霊であるシルフィーの魔法で空を浮遊して、アリア帝国に帰還している最中である。

「私とあなた、2人とも仮面の戦士にやられたみたいね。それとエルはその相棒に」

「……そうだな」

　カイタチはそう答える。エルは言葉では反応していないが悔しそうな表情を浮かべている。

「？……なんかカイタチはあまり悔しそうじゃないね」

　そのアクアの問いかけにカイタチは微笑む。そして、カイタチは戦いの間での仮面の戦士と交わした会話を思い出していた。

「回復させたのはなんだかんだあんたを気に入ったからだ」

「気に入った？そんな理由で敵である私を回復させたというのか？」

「そういうこと。それにあんた誰もこの大陸の連中殺していないだろ？」

「そうだな。……けど甘いとしか言いようがないな」

　そのカイタチの厳しい言葉に仮面の戦士は、穏やかに笑った。

「よく言われるけど、一応俺なりには見極めているつもりなんだがな」

「……帝国相手にどう戦うつもりだ？言っておくが、今回の時のようにこの先の戦いは甘くはない。もしトロン王国からの援助がなくなった時、お前はアリア帝国と戦えるのか？」

　仮面の戦士は少し考えるそぶりを見せる。

「1人で戦えるかという問いには、まぁ無理だな。けど、俺には優秀な仲間がいるし、それにトロン王国が俺を援助しなくなるというのも考えにくいしな」

「……なぜそう思える？」

　そのカイタチの問いかけに仮面の戦士は仮面を取り、不適な笑みを浮かべた。

「俺がトロン王国第5皇子カルディック・クロトだからだ」

「私を倒したあいつなら、この混乱する世の中をどうにかしてくれるかもしれないな」

　そう言ったカイタチは、この先の未来に希望があるかのように優しく笑っていた。